



江戸名所圖會

西垣文庫
文庫10
6556
8



文庫10
6556
8



明顯山祐天寺 同所西の方五丁中と隔つ善久院と号も享保年間

二世祐海和尚祐天大僧正の遺蹟の地を奉りて當寺を草創し

則祐天大僧正と開祖とを常行念佛の道場中々々鉦鼓法

聲ハ山林小谿研せり 此称名ハ岡山祐天大僧正臨終の期開闢 毎年七月

十六日より同廿五日に至る迄の間阿弥陀經千部讀誦修行道俗

群恭す

本堂本尊阿弥陀如来五寸許惠心僧都の作中々々岡山生涯

持念のその像なるも 岡山祐天大僧正真像 本尊の龕前安置す 等身佛中々々八十二歳の

影像三輪利鑑

鐘堂前右の方庫裡の前より圓光大師堂同い並ひふあは法然上人

四郎と云強盜あり終小上人の化導は歸入し出家し相模國川村と云ふ下向の

常小上人の記念中々々自願造り送り多りし靈像なりと云ふ故あまも

當寺の記念中々々自願造り送り多りし靈像なりと云ふ故あまも

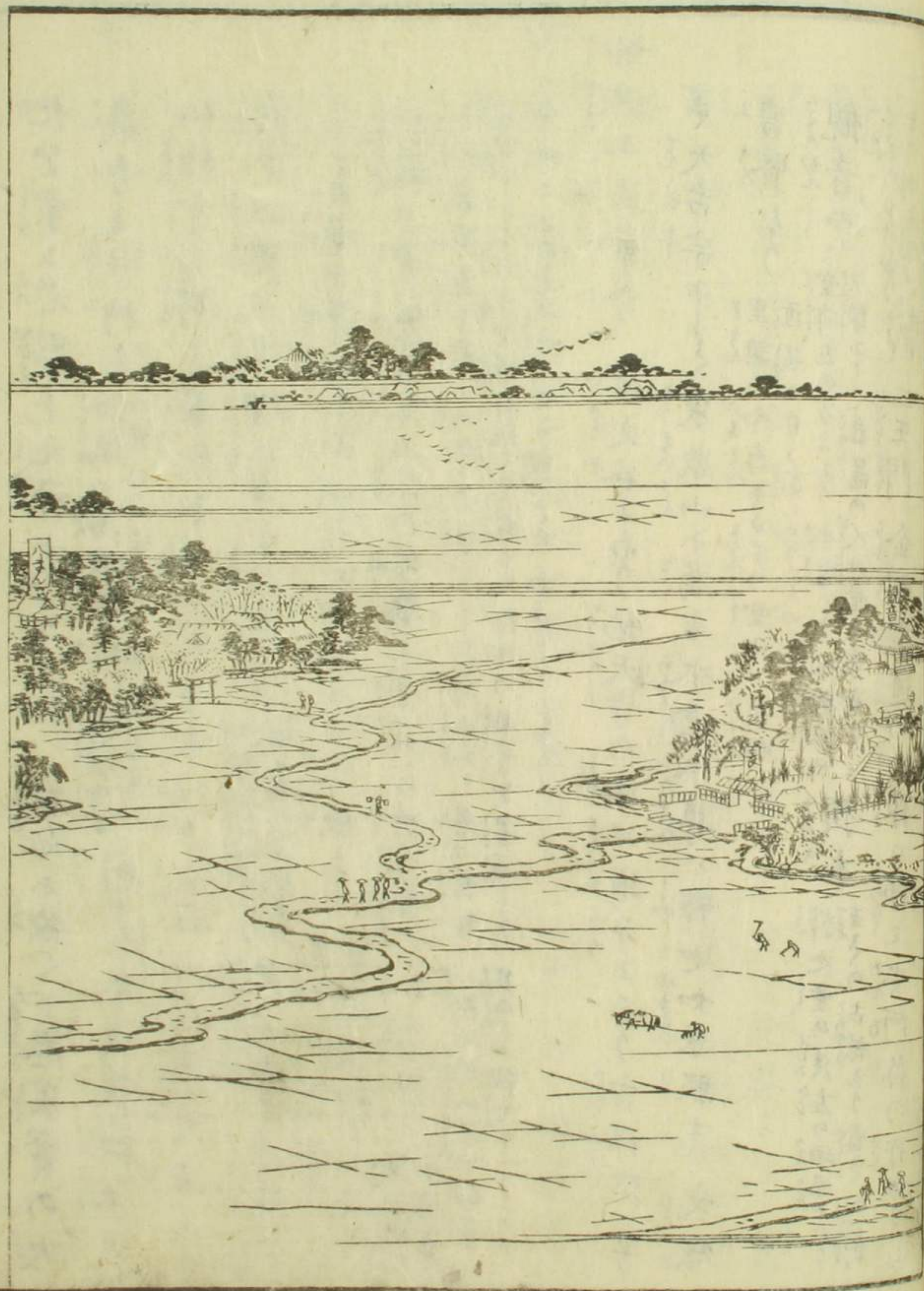
經藏堂前左の方あり願藏阿弥陀堂同い左並い岡山信授佛の号





祐
天
寺





碑文谷
法華寺



化と蒙る者夥し元禄十二年己卯 台命不依て下總生實の大
巖寺に住持し半島の庵室より直中大巖寺へ 同十三年戊辰 飯沼此
弘経寺に轉し紫袍を賜ふ又辛未 江戸小石川の傳通院より
移り正徳元年増二寺に住せり大僧正に任せり 後目黒の地へ隠栖 後山が三十六世あり
ぞと竟小享保三年戊戌七月十五日化寂あり當寺ハ則祐天大一世の 僧正終焉の地あり
行状并書寫しあふ所の名號の奇特ハ世人普く知所あり開山臨終 名号書寫怠りて一人ありて是と云む 開山云く 惠心僧都ハ一期の間來と彫造し 其中中々く往生と違はれしを我も又弥陀の号と書寫し 其中ハ往生と云く 命終の日不記す近一日も怠りてありと云り

妙法山法華寺 碑文谷よりあり 祐天寺の南半道斗ふあり 吉祥院と号

中 天台宗中より東叡山に属せ 本堂本尊ハ釋迦如来 服士ハ文殊

普賢なり 里談ハ今存せり 下の堂宇ハ飛驒 西郡が作らるるなり 榎木 釋迦堂の後左の垣添あり 至との古株あり 當寺開創

觀音堂 堂前左の方よりあり 本堂ハ土面觀音の 己未のものありと云 二王門 金剛密迹の二像ハ佛工安阿弥の作りと

その村に垣を築す

當寺其先ハ慈覺大師の開創中より天台宗の古刹なり 後

日蓮の宗化し歸し日源上人中興開基と云 竟元禄至至舊

貫復一元の天台宗を唱ふ 今堀内妙法寺ハ安置せし日蓮 大士の像ハ當寺ありと云り 境内櫻

楓の二樹多く春秋を頗る壯觀と云

碑文谷八幡宮 同所耕田を隔て 南の方一町斗ふあり 相傳入島山

重忠の崇信せし神ありと云 或ハ云 神射ハ秘物ありと云 或ハ云 東帯の銅像ありと云

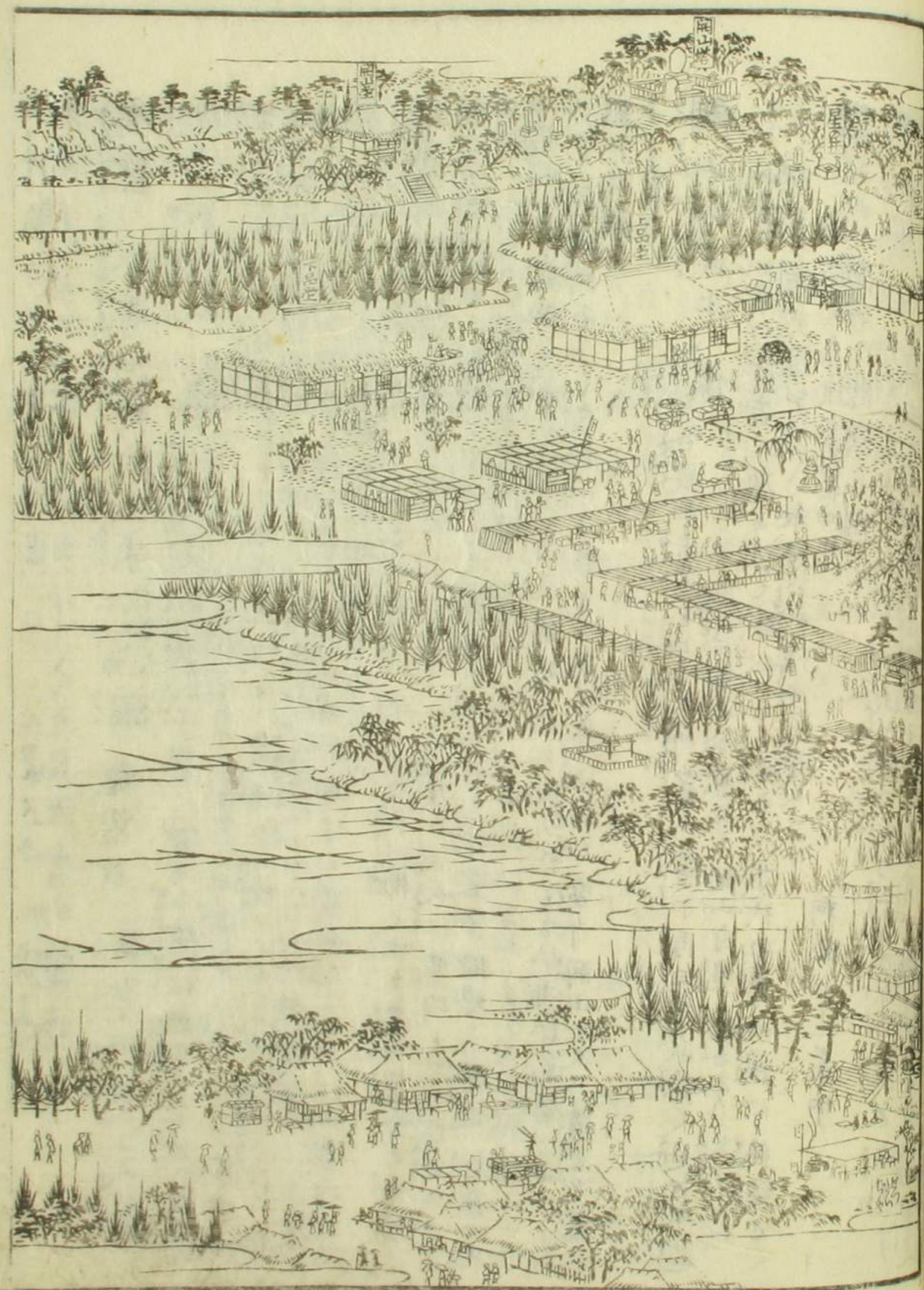
別當ハ天台宗中より法華寺末神宮院奉祀と云 昔ハ此地の農 民の内宮氏あり

人社司あり 此宮氏ハ重忠の家臣の遠裔ありと云 或人云八幡宮の西より此地ハ 往古の儀倉街道中 路傍に古碑ありと云 或日源上人ハ卒都婆ハ碑文を書きて埋め 鐵守八幡宮の社地へ埋藏しと云 或日源上人ハ卒都婆ハ碑文を書きて埋め かの名なりとも云 又江戸鹿子と云る 草莽ハ忠致と云る 砂門卒都婆一基を建

九品山淨真寺 碑文谷より一里あまりを隔て 西南の方奥澤村より

浄土宗中より唯在念佛院と号 京師知恩院 延宝六年戊午珂碩

ありて 共に詳しき 唱ふと云



奥澤村
浄真寺
九品佛

和尚開基する所の浄刹なり九品九會の靈場なり

本堂 本尊阿弥陀如来 文六の額 龍護殿 當寺珂慶上人筆

内佛本尊阿弥陀如来像 聖德太子四十二歳の山時一切衆生の災難を除く

靈岸寺の傍に庵室をたて念佛修行を勧むる所あり 珂慶上人の遺徳を慕ふ

賤の道徳利益をたむる所なり 珂慶上人の遺徳を慕ふ

地蔵尊 本堂の向小堂の中安置を岡山珂慶上人の本地佛と稱す 惠心僧都の作あり

一人一時山小堂に急雨に逢ふ 地蔵堂小休し 一時堂宇破壊し 佛跡雨露の爲

一度死し 冥府に渡り 自冠の霊像繁時 苦代に再び 因縁あり

野山に移るありしを 山法印當寺岡山上人の道光を慕ひ

開山珂碩上人像

客殿小安置を上人生前必本の靈ル再三かた依て是を彫造

此像ハ如来の教告三度依て彫刻せしあり 未代の筆此像に結縁せ

曼陀羅堂

本堂の左あり 念佛堂あり 堂守淨性とす 門當寺へ

中品堂 同右の阿弥陀像を安置す

上品堂 本品の阿弥陀像を安置す

下品堂 同左の阿弥陀像を安置す

以上九品の阿弥陀像を安置す 各座像中より一丈六尺あり 佛像一幹毎小圓

光ありて附する小佛一十一軀あり 九幹あり 同七年より至其前

甲子年竟九品の阿弥陀像を安置す 成就せしむるなり 此地小移

上人諸堂不成 遷化せし後 延宝六年戊午ころより 此地小移

開山堂

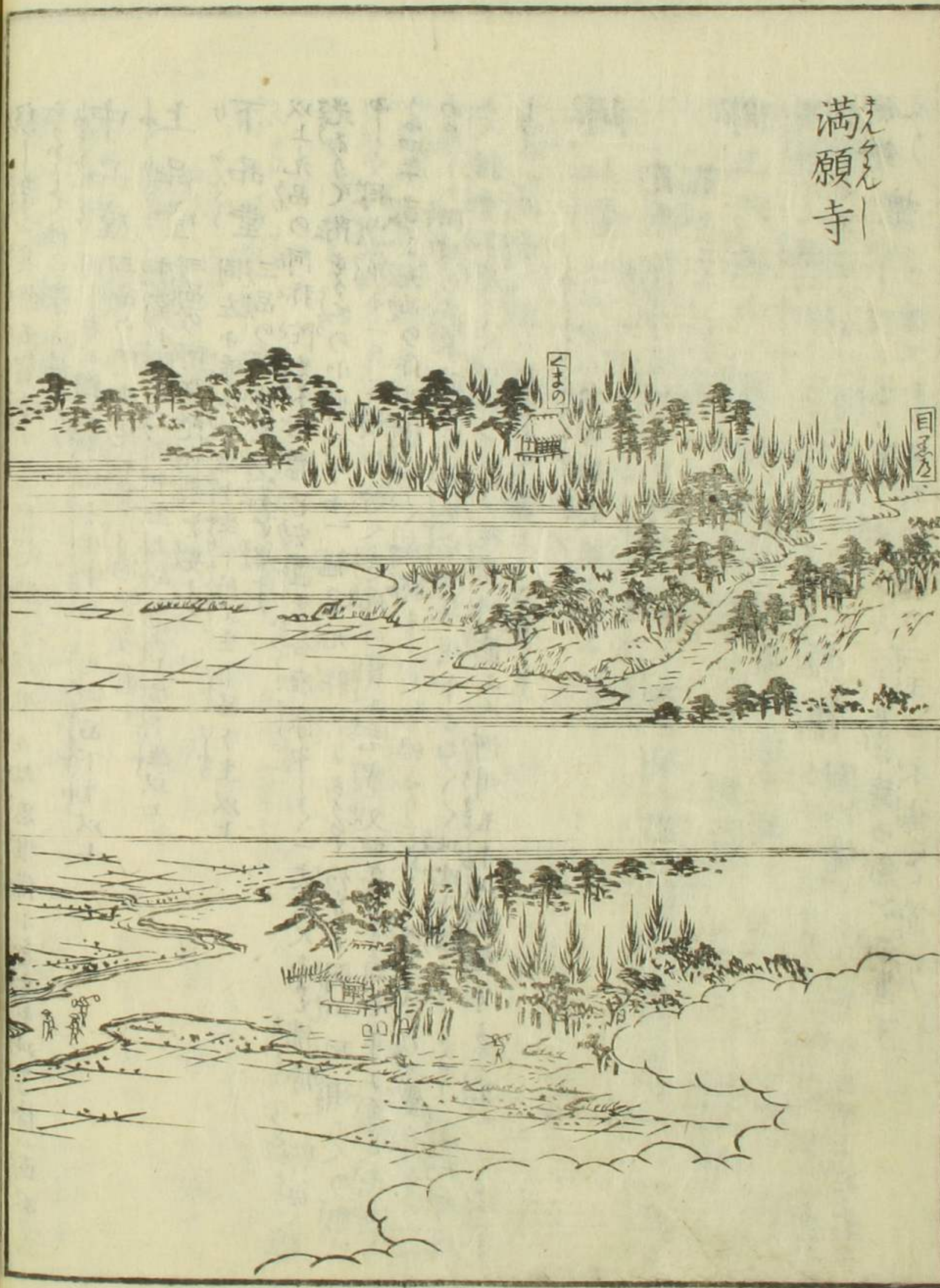
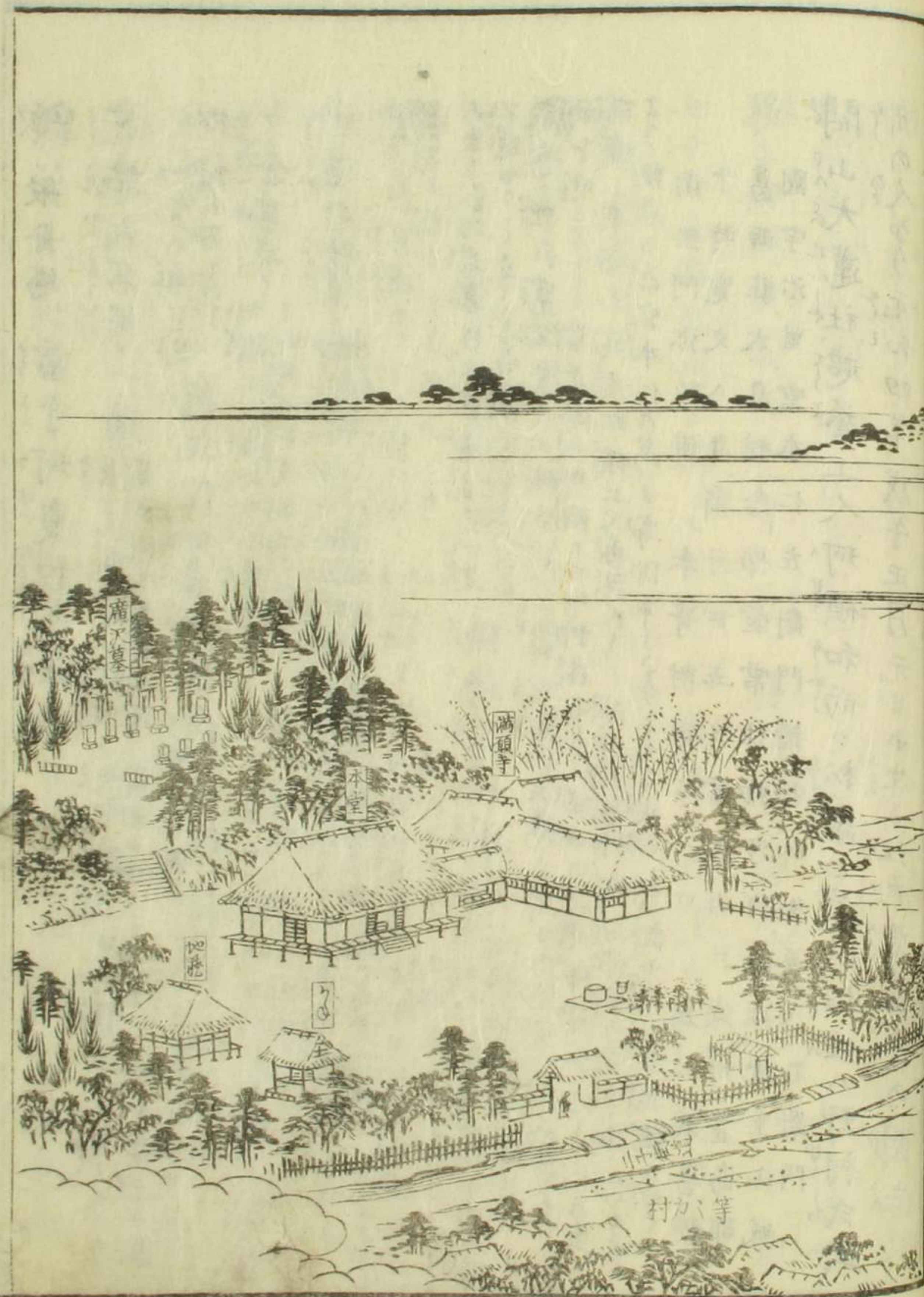
上品堂の後古城跡のよきあり 奥澤九品佛起す 椅子より杖と服を置とありしを立像あり

開山珂碩上人廟 龍山堂の右のつぎあり 興の院と 星の井 開山廟の前

有信の人偏に稱名せし 白日とす 鐘樓 本堂の右あり 九品の阿弥陀像

鐘樓 同しあり 樓上より二十五菩薩の像を安置す

樓門 樓下中々金剛密迹の二玉の木像を置り



満願寺

目録

村八等

額 般舟場 當寺珂慶和尚筆

芝枯大名号 一幅 長十三間中九尺白布十反を合せ用ゆ珂慶上人の筆なり

阿弥陀如来画像 珂慶上人の筆中細字の六字名号を以て

亡者の帷子 後珂慶上人の十念脈符を授け其の苦を道れ成佛して死す

攝待大茶金 當寺に収む毎年四月十部の時

南無阿弥陀佛 奉寄附罐子一口 為二親菩提

于時寛文八年霜月廿五日當九百日武州豊島郡

葛西莊大島村念佛堂常住物沙弥淨性施主山城

開山大蓮社超上人珂碩和尚ハ松露と号ハ俗姓ハ野村氏武

州の人なり元和四年戊午正月元日小生江戶覺真寺の圓岩に

投し一雜凍一十八歳ゆく業を珂山和尚に受 珂山和尚は下

和尚後年武陵の靈巖寺に住持す頃師も亦後つゝかゝりに

移る初越後國泰叟寺に住一後此地の郷民の招に應一歳

七十七の時武州に歸り世田ヶ谷奥澤小幽樓を題當寺に遂小元祿

七年甲戌十月七日化寂也 本朝浄土高僧傳小元祿八年報壽師の姿貌

温雅中々慈恩尤浚く奇驗孔多一凡在世の感應ハ勝教を

へり其より最煥灼とく人々是を傳ふ 以上浄土傳燈系圖上人

意を 傳本朝浄土高僧傳の

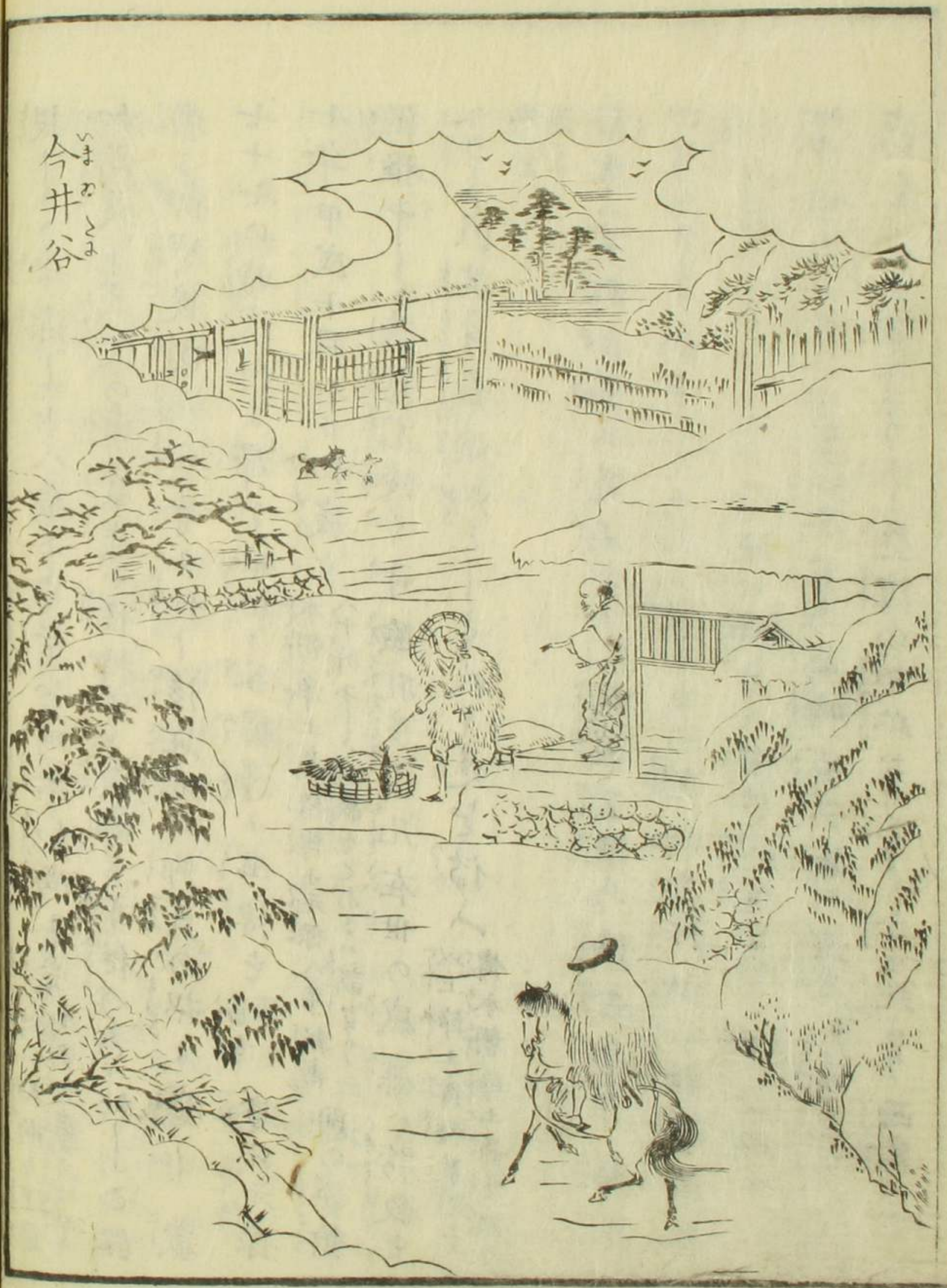
當寺ハ不断念佛の道場中々閑寂玄隱の淨舎なり 毎年

四月三日より同十二日小至る迄十日の間阿弥陀經千部讀誦修

行七月十六日より同十八日迄由拂ゆく當寺什宝を出し諸人小拜せしむ

此寺境内ハ昔小田原北条家の属將吉良家の老臣大平左馬 或出羽

とひ人の構へり一墨隍の旧跡なりとく今も北より西南の方へ



今井谷

境々々々堤の形空堀の跡を存す後門の方ハ大沼々々あり
 今ハ耕田とあり

大平山 奥澤新田村あり大平出羽守の砦の跡ありとあり

按等々カ利満願寺所蔵の天文弘治の古文書大平清九郎とつる名姓見え

致航山 満願寺 二子街道等々カ利道より右ふあり新義の真言

宗中々々山城醍醐報恩院ニ属を開創の時世詳あり中興

開基を定栄法印と号し慶安年間寺領に寄附の朱章あり

本尊ハ大日如来なり當寺ハ世田谷の吉良左兵衛佐源頼康の祈

願所中々々其頃ハ頗る盛大の寺院なりとあり

経緯住職を豪徳寺所蔵の吉良系図あり政忠の子経滿願寺あり當寺ハ
 天文弘治の鐘銘あり吉良頼康北條氏康政等の證状或ハ書簡あり十八通
 あり其文中ハ世田谷深澤村の満願寺とあり其故をあり昔等々ハ深澤ニ属
 中一通中ハ医王山満願寺とあり後世
 致航山ハ更々ありを猶可考なり
 廣澤先生の筆又本堂の向拜小掲々満願寺と書せハ

息男九阜の書なり

又菟村幸直に十貫寄納石井戸新開町中満願寺へ一貫分
 又淺三七百五十石寄納。又二百五十石寄納
 其村十一貫寄納。又田分二十貫寄納
 江戸河東十二貫寄納。又分五貫寄納
 弘治二年丙辰十二月十八日

吉良
 印家朱

世田吉内満願寺より山内受同分他分田相任為系内連は寺家
 再興有るは務以个勤行を修む若くは細相系依守より分
 忍く致白

天文廿一年壬子二月大老日

大老満願判
 聖音寺

世田吉内満願寺再興有る永代法儀不入若くは寄納より一貫
 寄納有るは務以个勤行を修む若くは細相系依守より分
 忍く致白

天文二十三年甲寅卯月大老日

本丸満願判
 満願寺

就醫主山満願寺再興有る永代法儀不入若くは寄納より一貫
 寄納有るは務以个勤行を修む若くは細相系依守より分
 忍く致白

甲寅二月大老日

本丸満願判
 満願寺

廣澤先生之墓 同境内堂より後の方岳の上あり

廣澤先生ハ細井氏通稱と次郎大夫と係り或ハ思貽菴蕉林庵等の号あり
 江戸に遊んで書法を雪山ハあまひ冠んり柳澤侯は仕上後致仕し城
 青山の隱る紫微字棟觀百譚撥鐘真詮篆體異同歌奇文不載酒字林長歌
 等の著述あり碑面左の如し

正面 廣澤先生細井君之墓
 左面 豪徳院不孤有鄰大居士
 背面 諱知慎字公謹號廣澤姓藤原氏

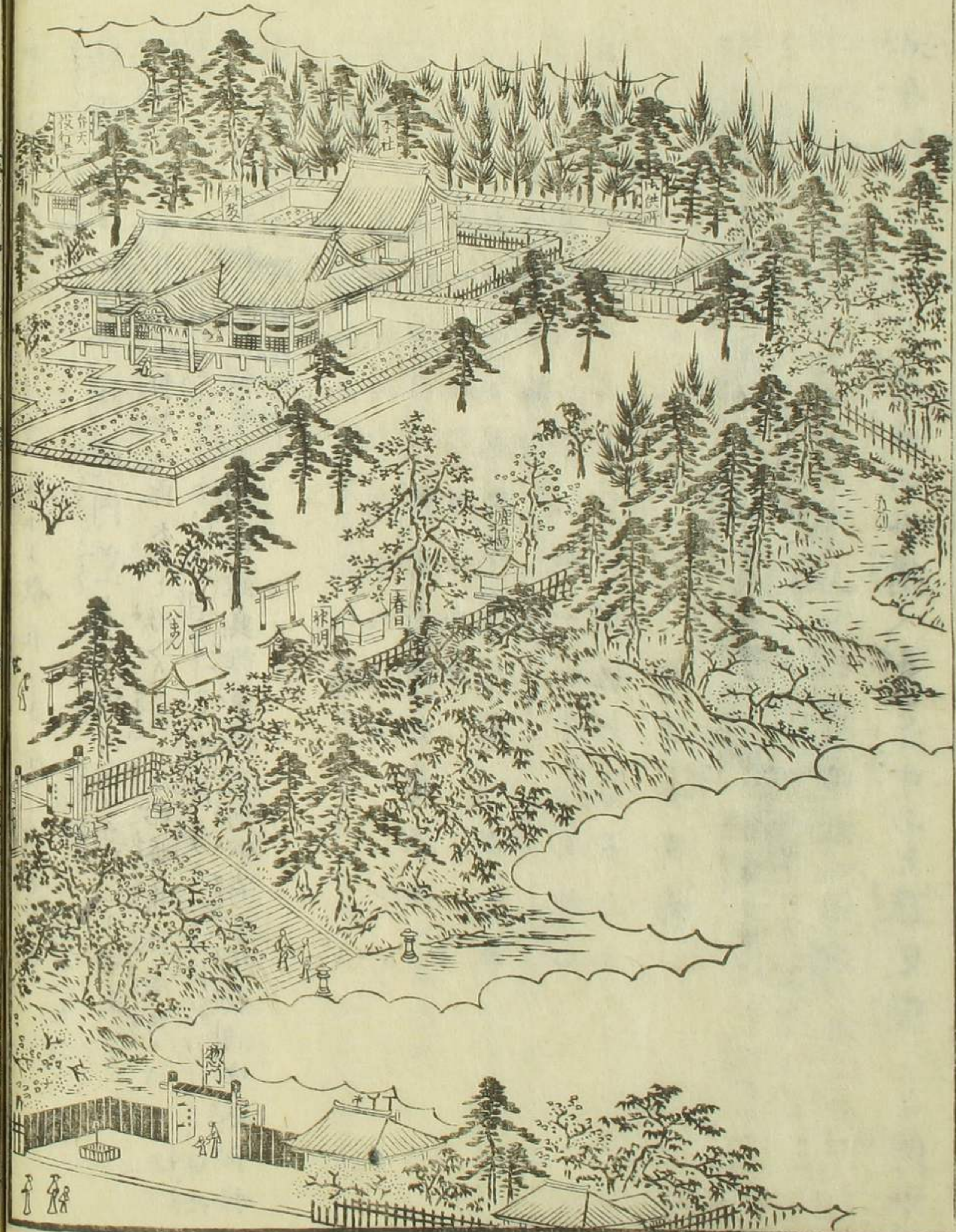
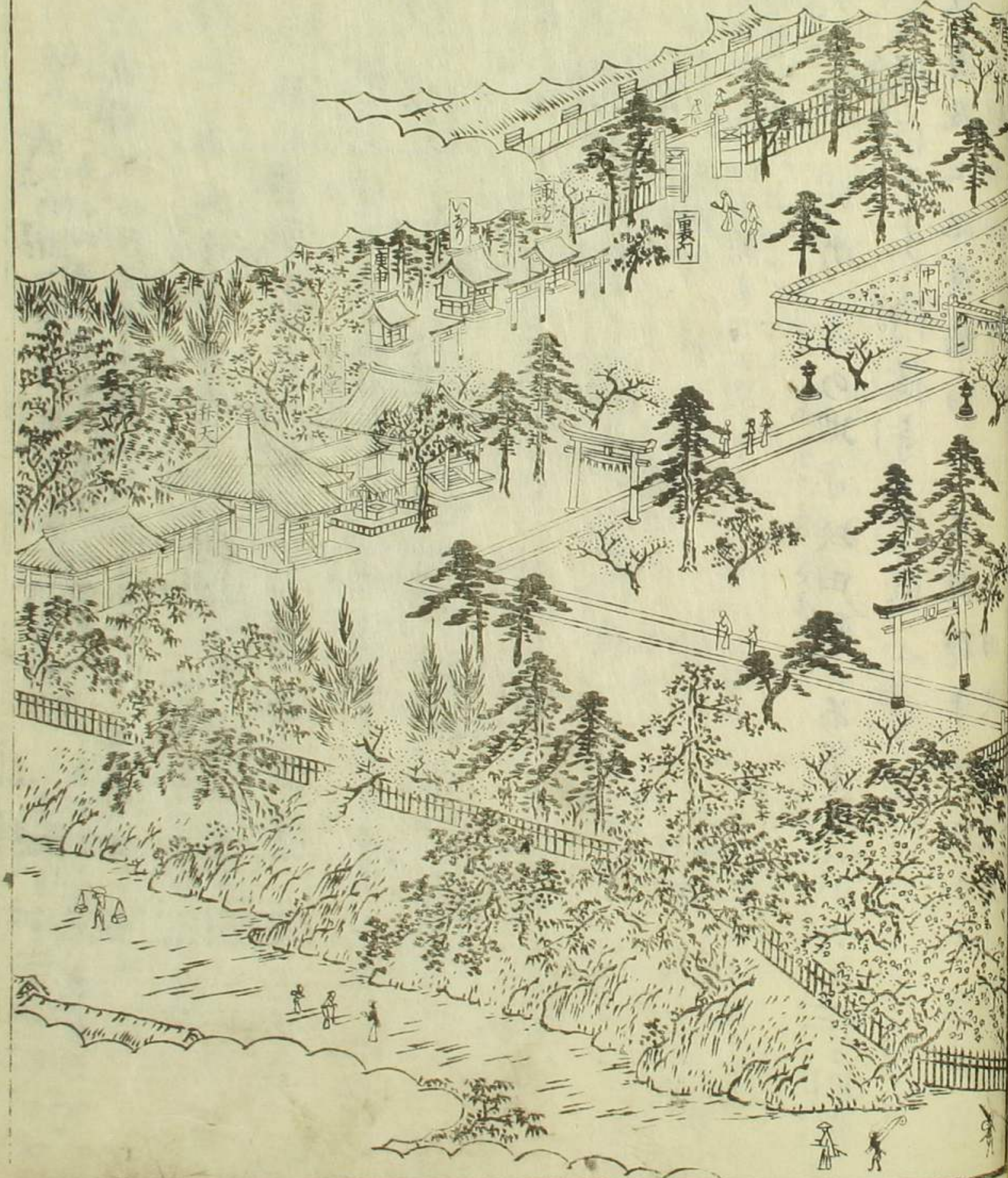
右面 萬治元年戊戌十月廿八日壬申
 生遠州懸川 戊子卯十二月己丑廿三
 享保二十年己卯二月己丑廿三
 日戊子卒于江戸城西于養享年七
 十八

孝子知文建

赤坂御門 糞田の方より青山へ街道赤坂への出口あり此御門は
 北斗形とく江戸御城の口構へ多き中あを殊更勝とく繩張

其餘先生の父母及息男九阜等並々細井一家の塋域と成りて垣をめぐり

赤坂の水川神社



なりとのみ 或人の説は赤坂の山に因の坂あり云と按は赤坂の地名は永祿二年小田原北条家の所領帳あり江赤坂六ヶ村千葉及所領をとのむ武蔵國風土記は荏原郡赤坂庄とあり今ハ豊島郡に屬せ

氷川明神社 赤坂今井小あき 此河邊に世よ三河墓とのみ天和の頃松平へてり 別當ハ

聖護院汎の觸頭ゆへ大乗院と云祭神當國一宮は相同し

赤坂の總鎮守ゆへ祭礼隔年六月十五日永田馬場山王権現

と隔年修修す 江戸名勝志惣鹿子等の草部當社元一本村ありしと

按當社を古呂故宮と云又其保中一本あり今の地より一里許り諸書は

氷川明神の同繪圖は今の地より一里許りありと記し

念三ヶ所の觀行を疑はれあり東國遊仙の項此れ一を觀音と稱す

得て土神より上面觀音の像と感得し其社は雨を降す

氷川明神と崇めまつるとあり

古呂故天神社 同所一本の地赤坂田町あり或ハ小六ハ作別當ハ

洞家の禪宗ゆへ清徳寺と号す

武蔵國風土記殘編曰 荏原郡赤坂庄小六天神或

古呂故圭田三十五束 三毛田天武天皇三年甲戌

十一月始行神禮有神戶巫戸所祭大已貴與必彥

名園韓神也號小六者以古呂故岡之名也云云

按は紫の一本は此大明神元當國八王子の辺は水呂子と云あり其所の

氷川明神と此西へつて道灌の書は水呂子の某か云ありと云又同書

及び江戸名所括の書は慶長の頃關東の小六といふ美濃のやえあり

あり此赤坂は住も常は氷川明神をまつ信一後其家富を依て社の破壞を

再修す故は後小六の宮とあり諸説紛々といふ詳ありは姑く風土記の説を用也

日本武蔵の聖蹟ありとあり諸説紛々といふ詳ありは姑く風土記の説を用也

信 康山龍泉寺 同所一ッ水町道より右側ありと云淨土宗ゆへ花浴

知恩院は屬も閑山を隨流和尚と号は寛永十一年の閑創より

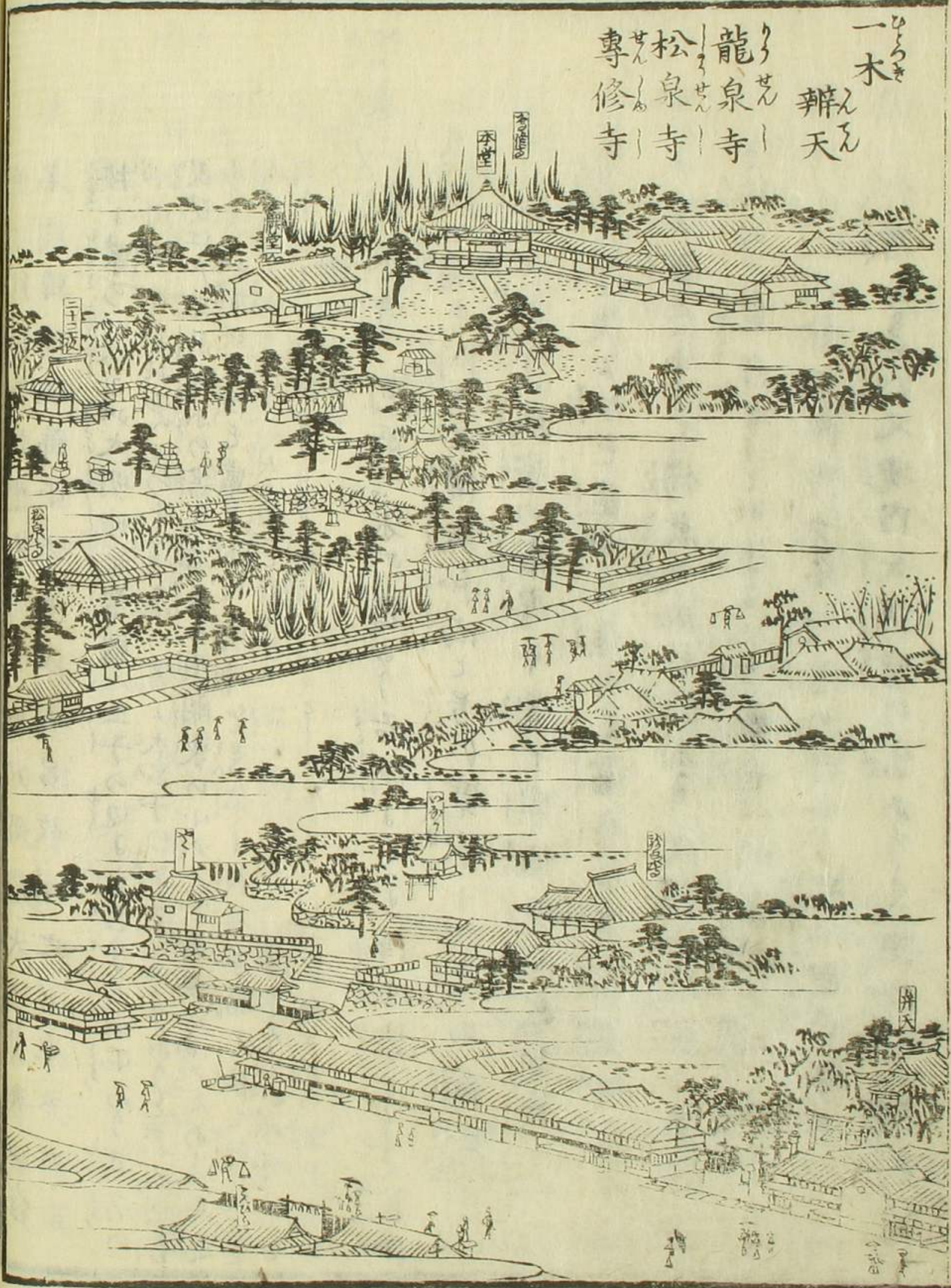
當寺佛元和尙ハ扶宗の志厚く曾て字信録千巻を著し刊行

して普く学徒よ尔も尾州の産物を當寺に子安觀世音を安

置も聖觀音中へ傳教大師の作あり又同一相殿は某師佛

像ハ作者も其又境内天満宮の宮ありと稻荷を相殿に

一木
辨天
龍泉寺
松泉寺
專修寺



天満神の神像ハ東巖山慈眼大師作らせらるゝ所なりや
云傳ふ

平河山浄土寺 源照院と号に同所龍泉寺より半町程南の方

同一側あり浄土宗中々縁山は属を本寺阿弥陀如来八座像

四尺餘作者詳かゞ閑山ハ教養聖公上人と号中興を源蓮

社本誓利覚一故と号けり當寺昔ハ河城内平河口の辺小

ありと元龜三年今の地に移されりと云

一行山專修寺 同所寺町あり當寺も縁山は属する所の浄刹

中々本寺阿弥陀如来ハ恵心僧都の作丈三尺閑山ハ寂蓮社

曇誓上人と号けり昔ハ青山ありと勢至菩薩と安せり草堂

なりと永祿年間閑山上人一字梵宇と其後亦坂水川

明神の辺に移ると又寛永に至ると同寺町地と改めらるる遂に

元祿に至ると今の地に移る寺は存せり安置の佛至菩薩の靈像ハ今猶當

往古ハ安んじ安置の佛至菩薩の靈像ハ今猶當

一本原 今赤坂傳馬町の裏通僅一本町の名と残せり昔此辺

なぐく一本原といひ矢盛莊七郷の中わく古き名ありと云

上下と二ツは上一本ハ四谷藪の橋の辺といひ今四谷々々を境や禪師宗

王寺といふ薬師宗の霊場あり昔の境内は大本の榎あり是を一本と云

又下一本ハ此赤坂の中同所清岸寺中薬師ありく王寺の霊像と同一

人なり共一本薬師の稱ありわりの此寺も大樹の榎ありしを其の

上杉朝興は打勝敵の首とも實檢一本原は嶺打揚作法のや

勝関と執柄は北条家の所領後帳は大田大膳亮所領の

中一本貝塚の地名を加へたり貝塚を

天正十九年の頃なりと或人云此地町屋ありしハ

狩野興意墓 同所三分坂下靈鳳山種徳寺の境内あり當寺を

大徳寺派の禪園や昔ハ相州小田原ありしと天正十九年

花町より引き後又當所に移る岡山ハ東光知灯禪師と号し

医王水も當寺の靈泉なり

今井古城址 氷川明神の西北の方松平藝州彦の中をききの

地といふ今井四郎兼平の城址ありといふ紫の一本といふ

草紙ハ齊藤別當實盛の城といふ或ハ田子先生義賢の出城あり

ともいふ傳あれとも共詳なり北条家の所領後帳は大田新六郎渡辺

氏家系は宮内少輔勝行北条家より此地を所領し又北

赤根山 紀州公沙中屋敷の地といふ昔ハ此地ハ多く苗を産せ

故ハ苗山といひ今紀伊國坂と呼ぶ地昔ハ赤坂と稱へ

となり赤根山の坂ありハかく赤坂とも号けりといふ

圓通寺舊跡 同所寺町あり此地申の方より寅の方へ向ひく

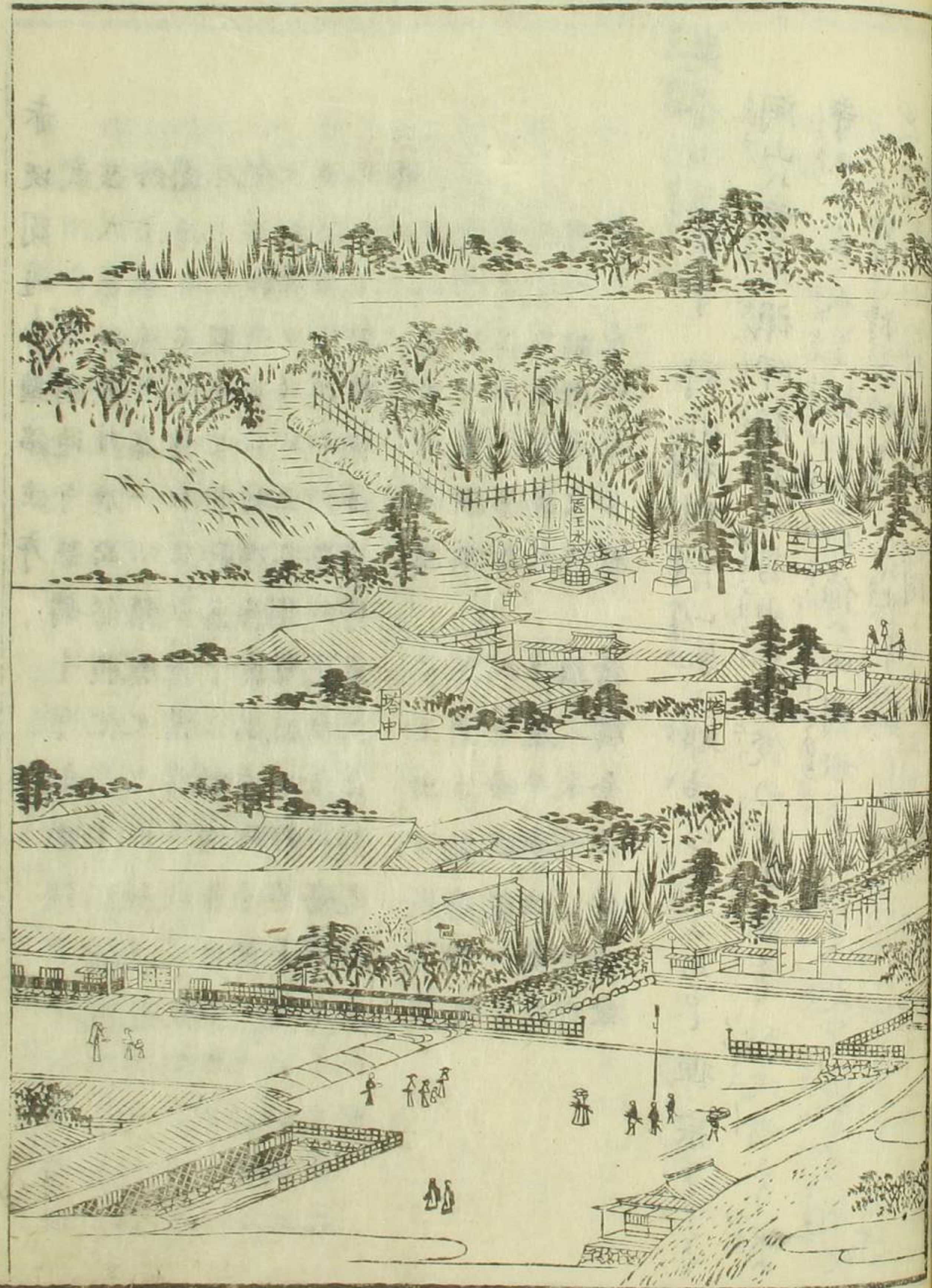
下る坂を圓通寺坂と云ふ此故なり今此地ハ佛智山圓通寺

といふ目蓮宗の寺ありとも古の圓通寺ハ異なり往古廢

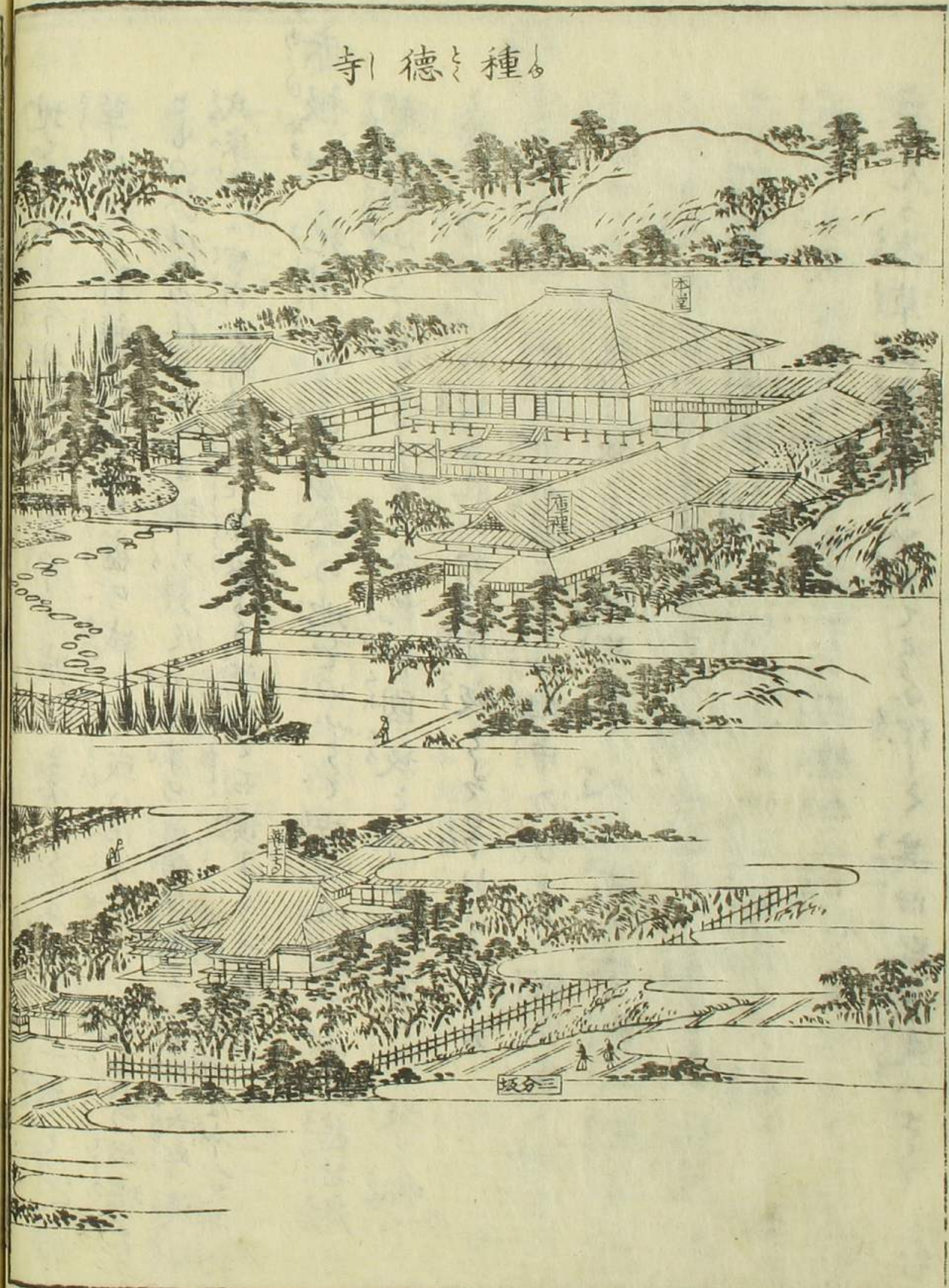
せ圓通寺の洪鐘ハ圓通坊といふ沙門建立する所と銘ハ

深草元政法師の撰む所あり其鐘今ハ亡びくをといふ古き

存せんう草山集小冊を以てし其記く其旧跡を失はしむ



寺種徳



赤

武州赤坂寺鐘銘並序
按武州赤坂寺鐘銘並序
法緣慈而為一應類悲願
通之舉其意在切精魅之
圓戲何余以諸句佛勒為
以諸戲間如幻師吹螺擊
似種々法余以諸句佛勒
云遊世間如幻師吹螺擊
此銘又遊戲翰墨為佛事
銘遊諸戲翰墨為佛事

鼠山流光人未驚
虎狼野干氣縱橫
龍宮高處擊華鯨
馬腹忽變聖胎成
狗不啼霜降月色清
猪雞羊蛇兎牛
觸人未唱轉崢嶸

崑崙山玉窓寺

同所右側青山家の邨弟の間ありて禪宗中々

閑山ハ普光禪師閑基ハ青山氏忠俊の女玉窓秀珍大姉より故

寺号とせ本寺觀世音の像ハ中将姫香を以て是を製する所と

百螺山鳳閣密寺真言教院

當寺ハ醍醐の院室にして戒定慧院と

號一諸國咒驗末寺の總綱より本坊ハ和州吉野郡鳥栖山に在て
閑基根本理源大師諱を聖寶僧正と號を光仁天皇乃皇子
葛聲王の令子あり弘法大師の肉弟真雅僧正小授して剃度し
螢雪の功年を積南都の諸名公に忝して法相三論華嚴唯識と
學ひ慧業日々小進を給ひ一萬乘の聖主一時の公卿尊師
の徳を仰慕し一々として淺うく時小宇多天皇寛平元年己酉
尊師年五十八大和國金峯山に毒龍栖あり霖雨洪水五穀
登らば山中修歴の徒もこれらに廢絶をなすに於て天皇宸襟
を惱し給ひ師に詔を下して毒龍を降伏せしむ師勅を奉り

金峯に分入り法威を震ふて龍を伏し斗數修行の道を再興し
次て奏聞を経て吉野郡に一寺を創建し給ふ鳳閣寺是なり即
尊師の上足貞崇僧正を以て第一世とし昌泰三年始て此處に
於て峯受灌頂の密法を興行し久し雨來七百餘年と經て元祿
年中中興俊尊僧都寺號を東都に移して一派總綱の役寺
を神祖御由緒の地遠州白山二諦坊康松院を兼領して
天下泰平國家利民の御祈願所とし毎年四月八日七月十九日
小八順逆二峰の神事柴燈護摩の儀式あり此日諸人群衆は
當寺本尊不動明王の靈驗の尊像にして里人出世不動尊と
稱して常小詣人あり脇壇には神變菩薩理源大師の像と
安置を寺内に三峯權現稻荷の小祠あり境内に櫻樹有暮春
の頃清賞あり此樹は當寺の一代俊賢僧都葛城山より種と
取りて昌平坂の舊地に殖て高間櫻と名つけたる名木

あり寛政年中聖堂御造營の節替地を賜ひて當寺以
今の處に移され刻舊樹は枯て僅に蘗生乃若木と存し
高間櫻の名を遺せり當寺の西隣に即梅窓院あり

長青山梅窓院 實樹寺と号を青山久保町道より左側あり

浄土宗ゆき京師知恩院に屬し當寺は青山家累世本尊阿彌陀

如來の像ハ聖徳太子の作あり當寺ハ寛永年間戴蓮社頂誓

冠中南龍和尚閑基一觀智國師と請し閑山祖を綴國師ハ

中興閑 惣門の額長青山の三犬字ハ黄檗悦山の筆なり

泰平觀世音自然銅の文三寸三寸の千手大悲の靈像あり天竺佛と稱し

聖武帝に献り南都大佛殿の傍あり源頼義公兄弟奥州追討の頃此靈

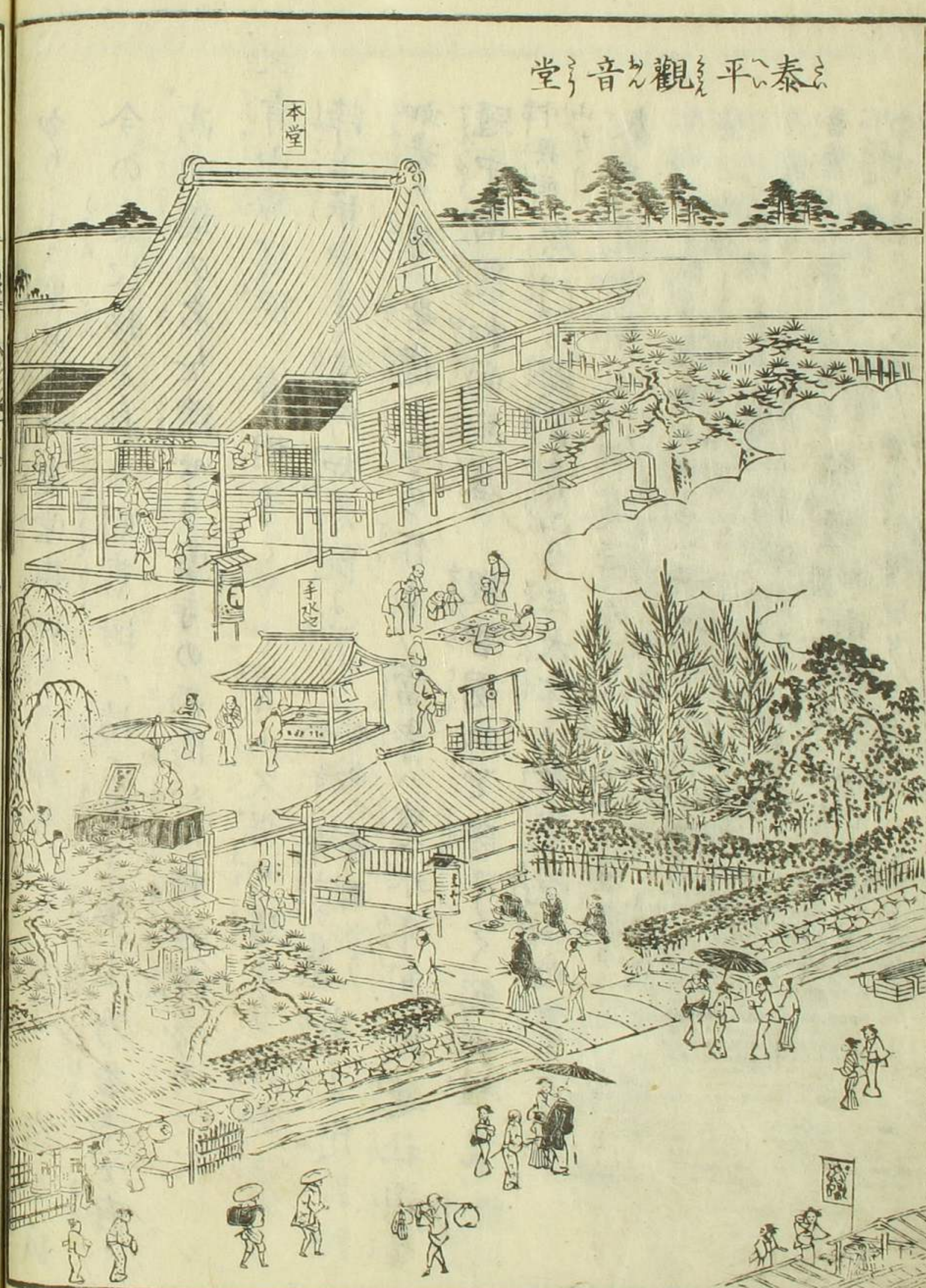
像を奉持し陣中守護とせ凱陣の時奥州伊達郡不安置あり故あり

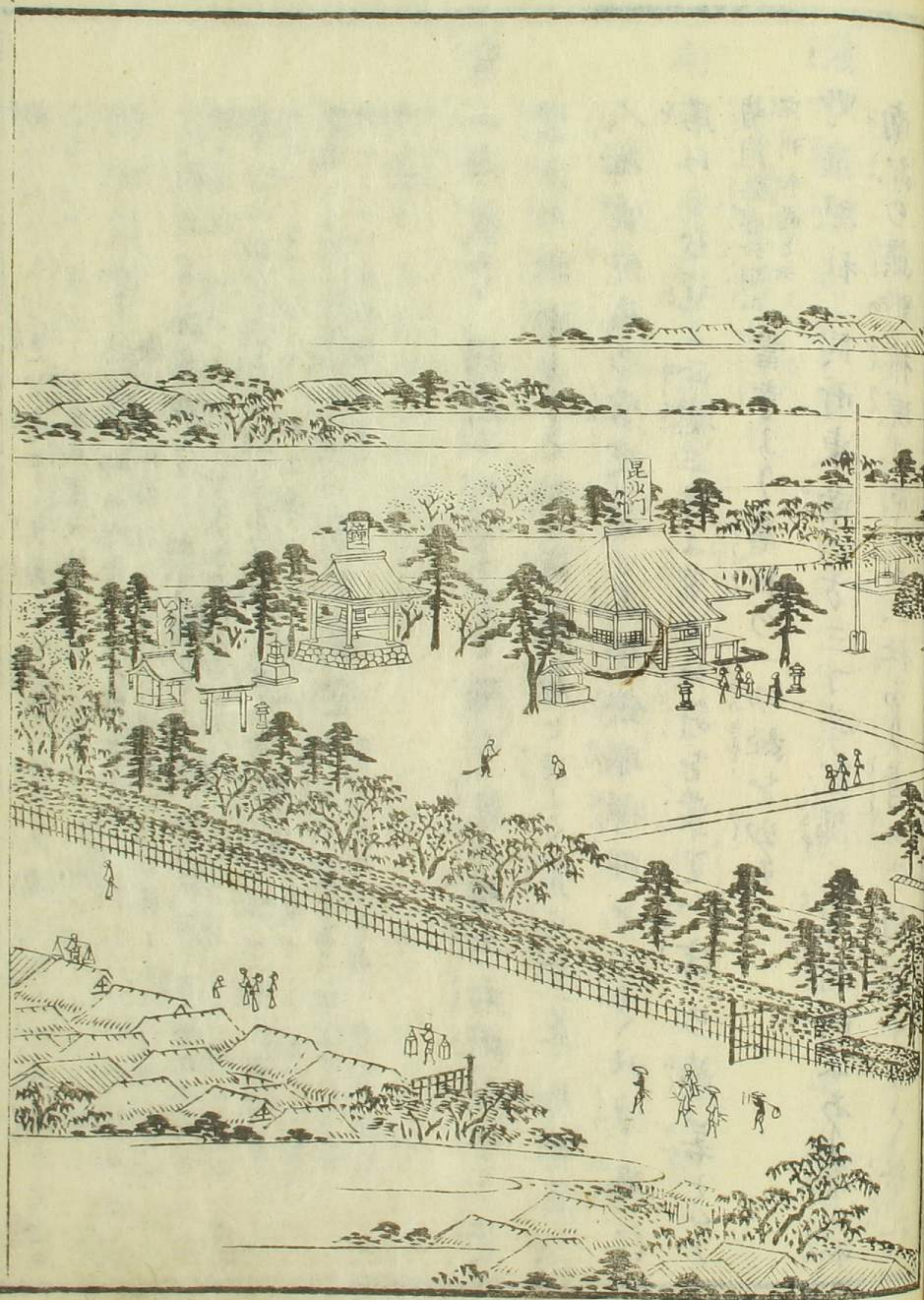
龍山家小傳り後又當寺は常小詣常小詣と云 羅漢堂中興ハ紫銅の釋尊左右ハ

菩薩の像を安置し 鯨鐘樓は掲げ宝永七年十一月當寺第八世法蓮社毒

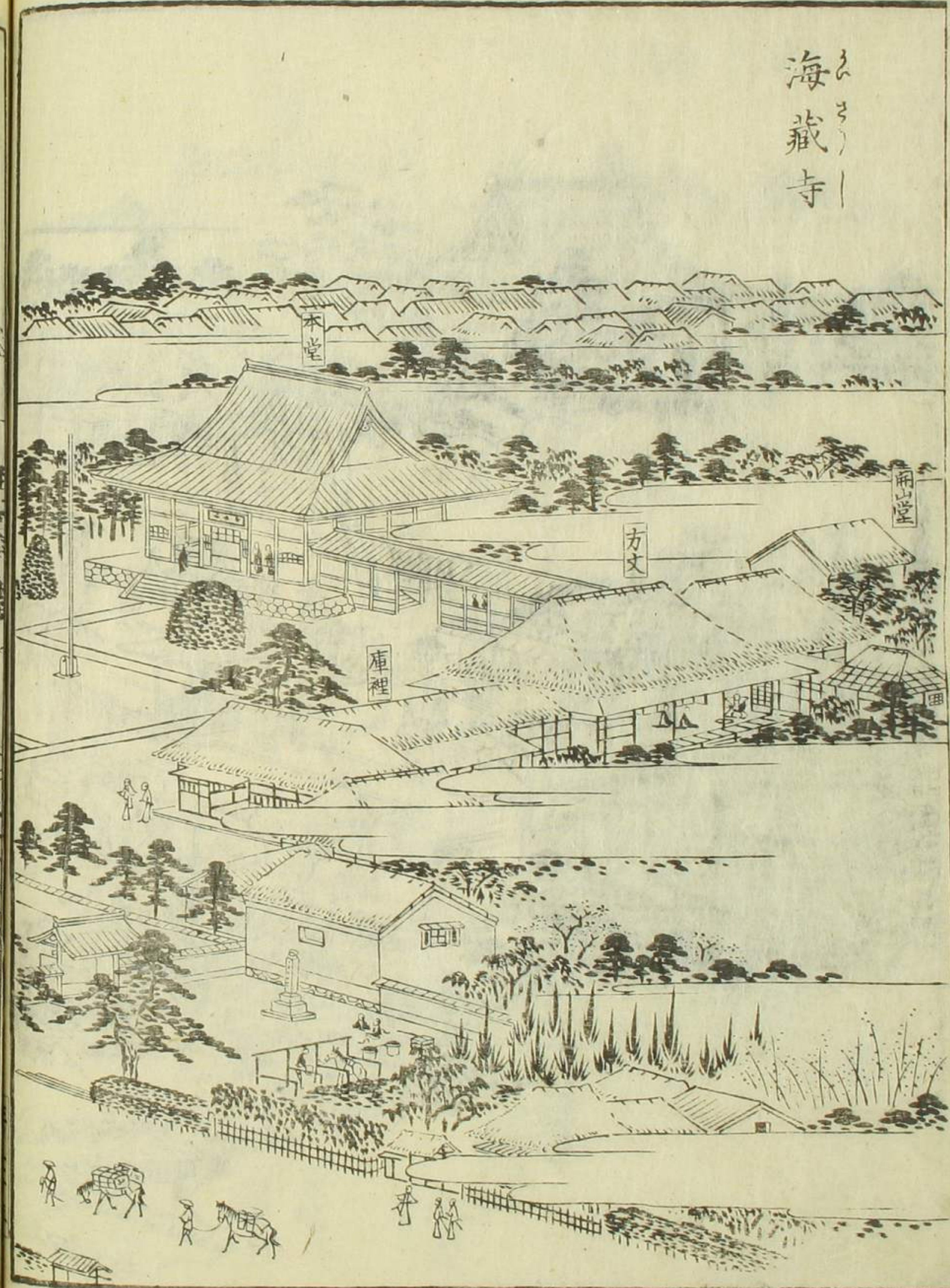
夢中小告く云く我今畜身を解脱せん一面の鏡を携來たり師願ハ

是どかへ夢覺て後枕上ハ一面の





海藏寺



鏡を存せり師是を奇と其鐘を如く終に洪鐘成就を依其證として夢
又その龍女は宝光龍大師と法号と授へらる鏡の面は其号を鑄ましむ
撰地蔵尊 慈覺大師の作ありと云ふ當寺九世順善上人北徳行徳の海濱
湊村の法傳寺のついでに頃中靈應ふりく同所の海岸小
然其撰と歎ひハ則此本ありたふ各とを 百濟稻荷 享保の始和州百濟
記し此梅窓精舎は鎮座ありく永く衆生を 拾櫻 當寺弟二世峰登上人門
度せんとなり依く一社は奉すと云ふ 前中 苗木と云ふひ
親裁りしと云ふ今堂前ハ 虚空藏堂 明塔の興ありや多ハ産條や
存する所の垂枝櫻是なり 作られ

青山海藏寺 同所一町と云ふを隔て乾の横町右側あり黄

檠汎の禪宗やと始ハ海藏庵と号く寛文十一年井伊侯夫
人掃雲院殿の宮建なり 其項錢眼禪師をく此草庵に
居らむ竟よ正徳三年に至り公許を蒙り一字の蘭若とす
菊岡沾涼云岡山 當寺より唐板の一切経を抄せ
宝州和尚と云

熊野推現社 同所東南の方三丁を隔て原宿町ふあり祭る和
南紀の熊野推現は同く三社あり青山の鎮守やと祭礼ハ

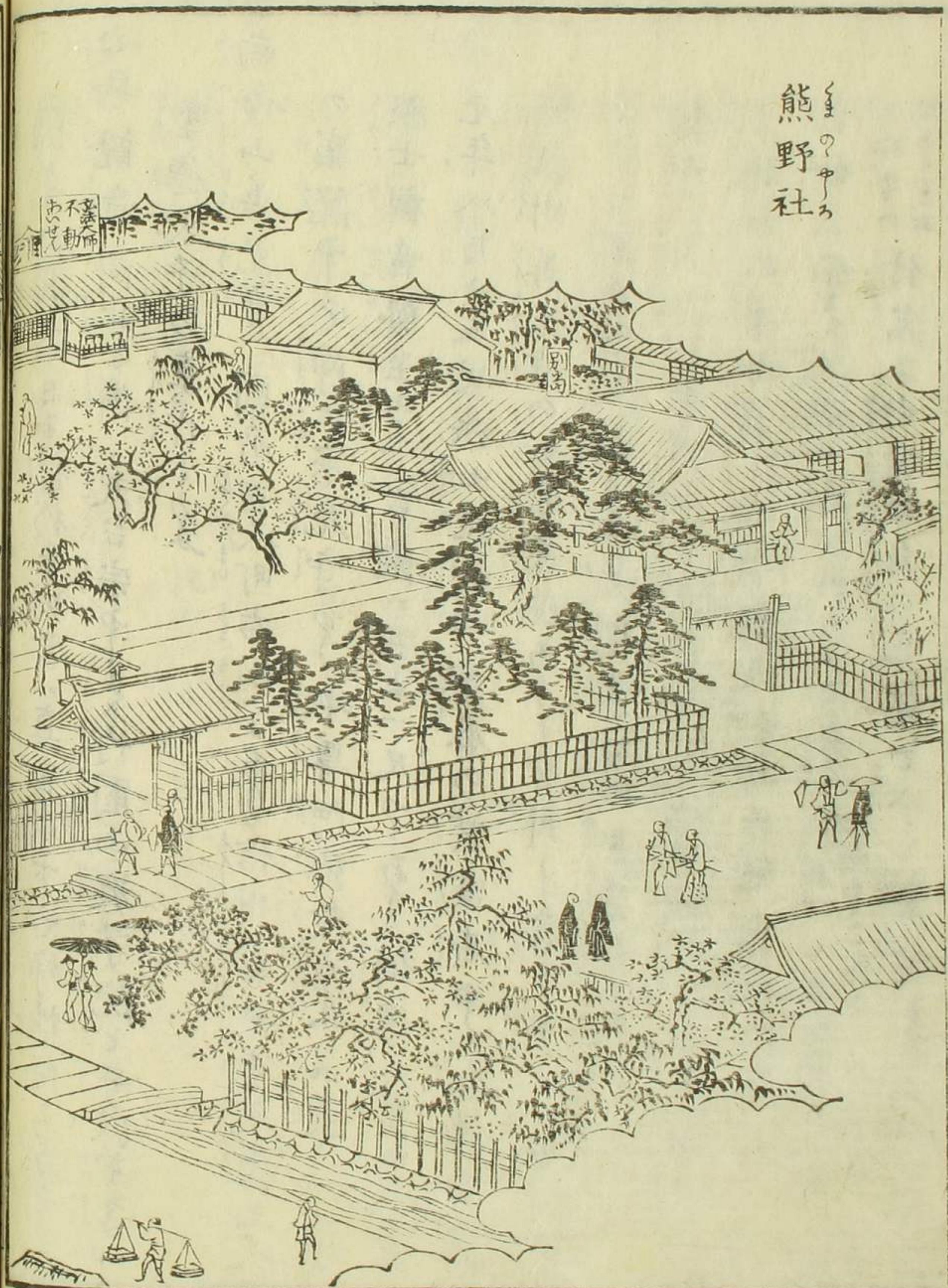
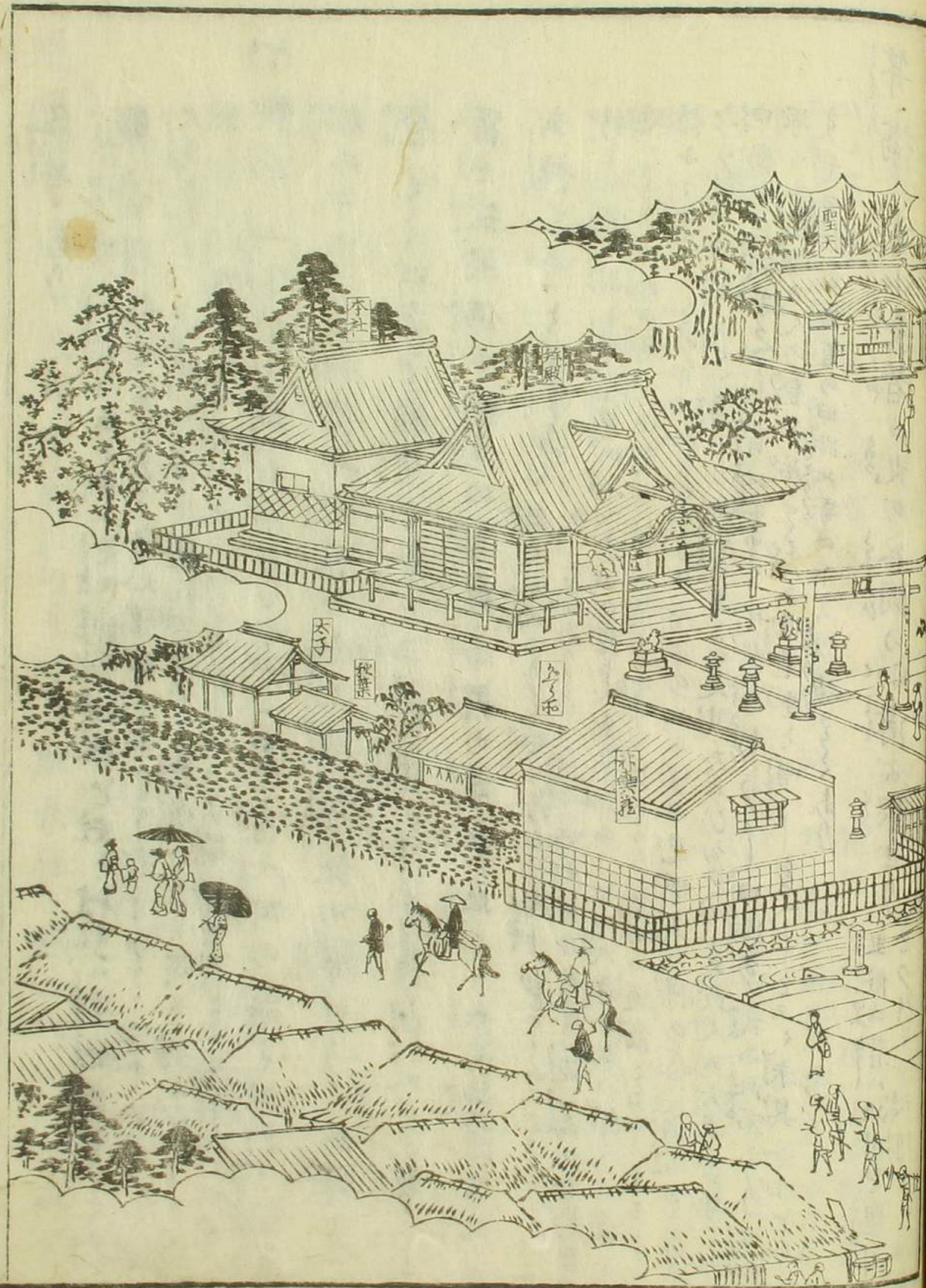
隔年九月廿一日は修修を別當ハ真言宗やと浄性院と号を

心見觀音 同北隣に天台宗やと竹園山教學院と号は本尊ハ
聖徳太子の真作と云ふ

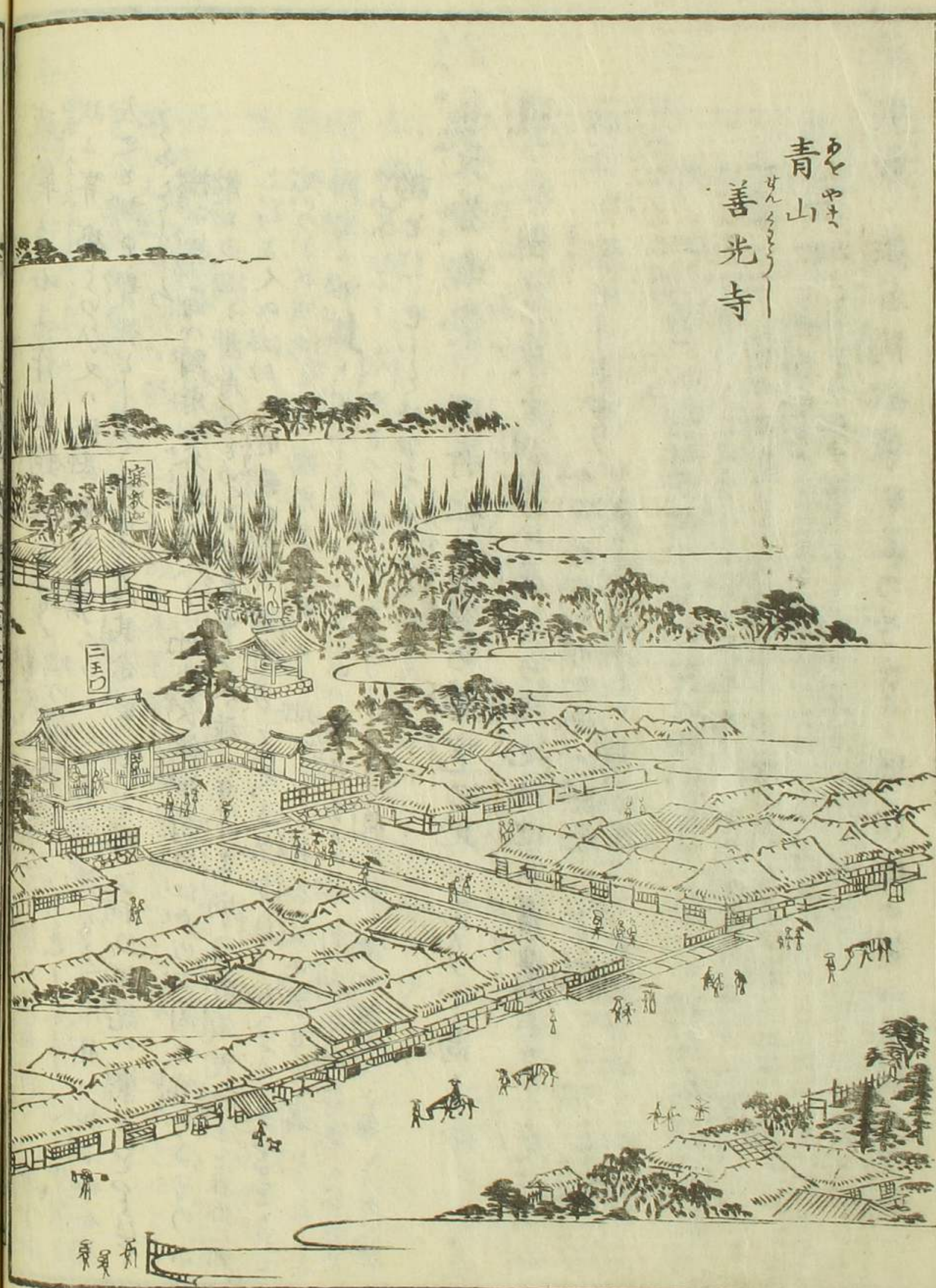
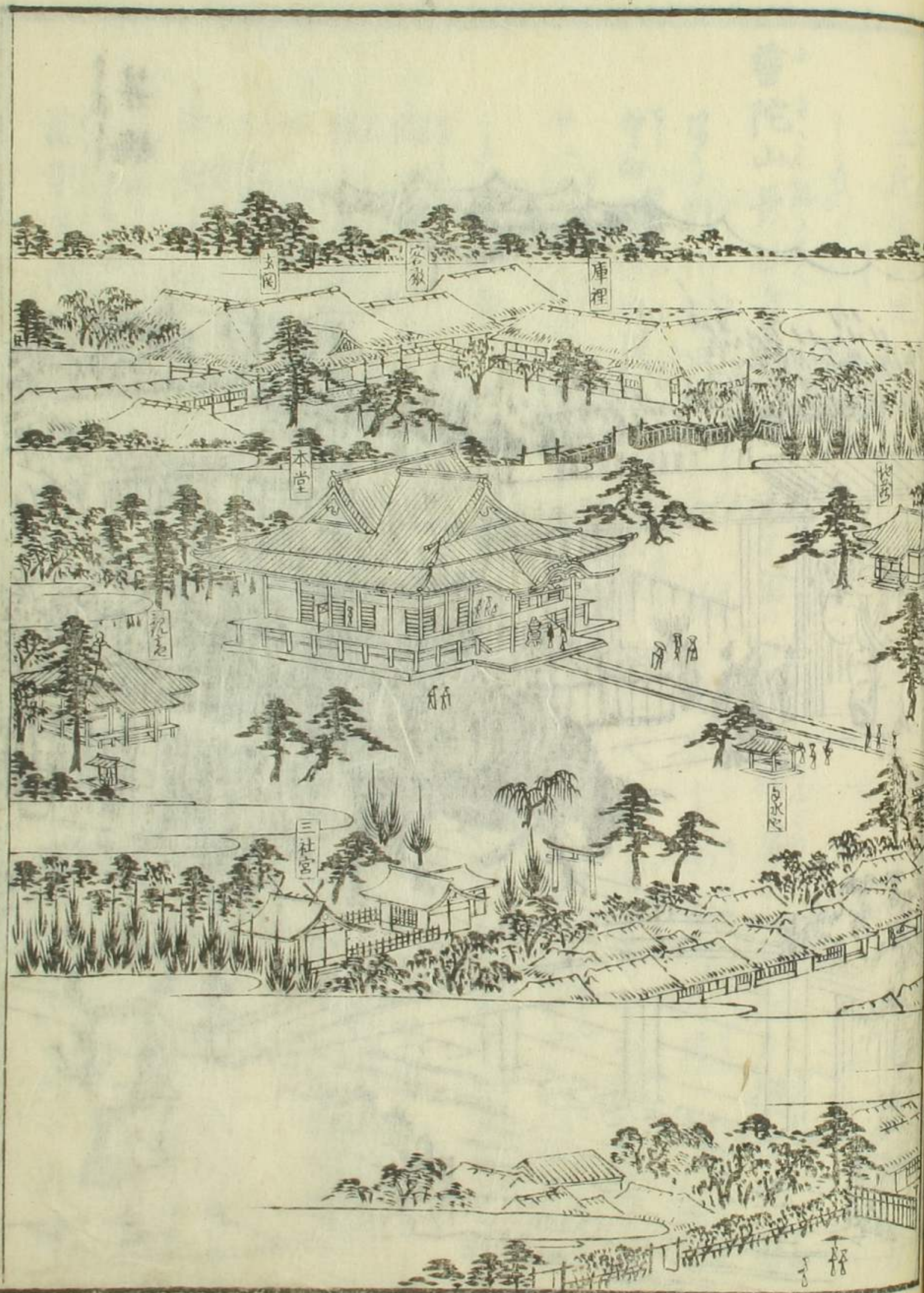
南命山善光寺 同所百人町右側あり 信州善光寺本願上人
の宿院やと浄土宗尼寺あり 本尊阿弥陀め茶ハ長一尺五寸
殿士觀音勢至の二菩薩ハ共一尺二寸あり 稱徳天皇の景雲
元年八月十五夜法如尼和州當麻の紫雲庵やと念佛涌持の
頃信州善光寺の如来來現ありと拜しや直よ一刀三禮
中く其心形と摸る是則當寺の本尊ありと

當寺ハ永祿元年戊午の創建ありと始ハ谷中よりと中興
光蓮社心善知善上人明觀大和尚の時宝永二年

台命は依く此地へ迂されるとあり 今谷中ハ善光寺坂と号ハ其
玉林寺の 什宝ハ中将姫自の毛髪を以く製造する所の六字花
地ありと云

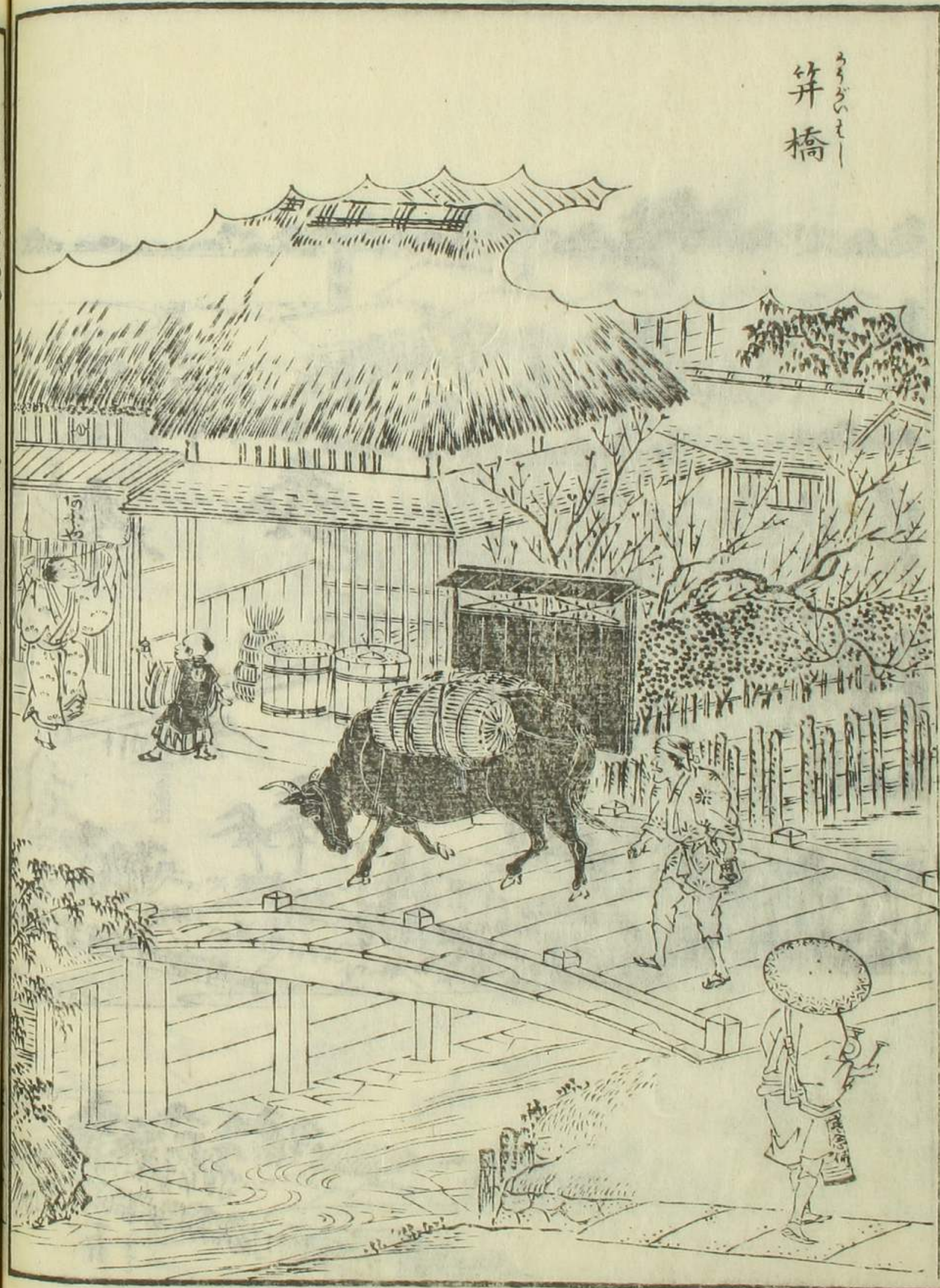


熊野社
の
中
の
社



青山
善光寺

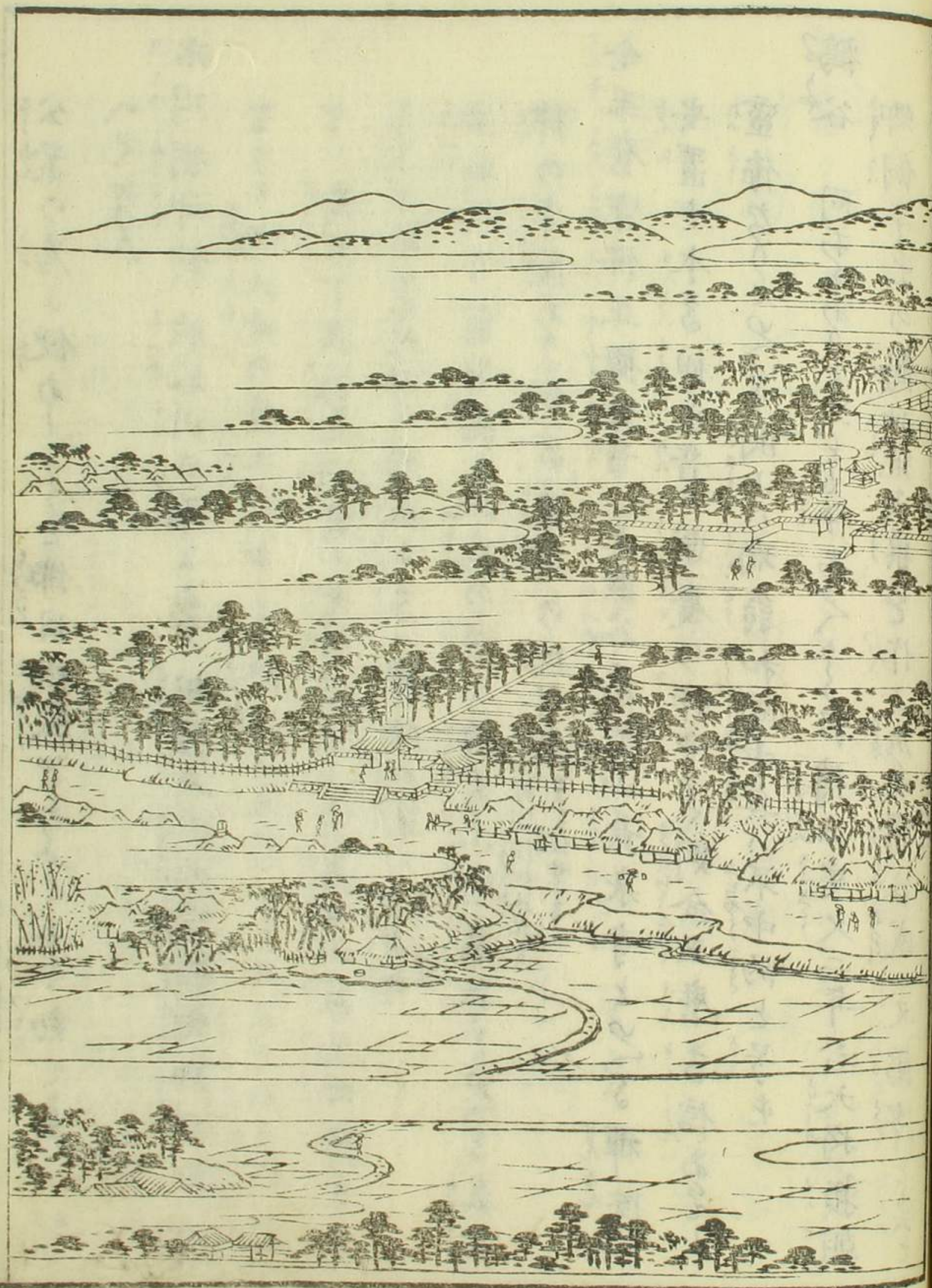
并橋



土民云此地ハ往古渋谷重國旧館の跡とも又ハ富民慶福といひ
 住一跡なりともいひ

普陀山長谷寺

同所ハあそ曹洞派の禪窟中々江戸檀林の一室
 たり野州富田の大中寺ハ属も本寺十一面観音の像ハ和州長谷
 寺の観音の模形中々立像二丈六尺あり歩首の中ハ法丈四寸ハ
 十一面観音の靈像を安置せ則和州長谷寺の本寺と同本の樟小
 一と同作ありといへる岡山ハ門庵宗開和尚より當寺昔を赤坂
 溜池の上ハあり龍雲院といひて天正十二年甲申此地より
 移し寺号をも改むるといへる
 或人云當寺昔ハ山口氏重政の廟基中々
 龍雲院のやきの中ハ建立し母堂龍雲院乃
 古佛倉地ハ姑ノあり希世の靈佛鬼神の像を安し庫中に充満せり此
 一縣ありと云世ハ渋谷長者
 當寺境内ハ古杉老松蒼鬱とて常々寂々寥々くれハ座禪



寺谷長谷波素



公案の為は便ありき佛目祖風をわびくやを勤てよるる
へくなん

永川明神社 淡谷川の端はあを相傳ふ右大将頼朝卿の勸清

なりと則此地の産土神中々祭礼ハ九月廿九日なり此日社前

中々角力を具形を別當ハ天台宗中々惠日山茶王院宝泉寺

と号も慈覺大師の周基并るハ藥師也兼之作者詳

淡谷川寺前を流る此北の端は源秀山室泉寺ととる真言

律の寺院あり閑寂玄隱の地なり近頃法如此立

金王磨守佛正觀世音 上淡谷慈雲山長泉寺ととる禪院に

安置せ本多觀世音ハ運慶の作中々則金王磨多信あり

靈像なりととる関山ハ瑞翁和尚中興ハ不中的と号も

鶴谷 同所ありととる今あくるは傳云建久二年右大将頼朝

卿飼ふ所の鶴此地は兼を作らぬ鶴谷或ハ又鶴澤とも云と

朝霧ヶ滝 是も同所ありととる未だ地を去るは里誘ふ

昔此地は淡谷宗順ととる富民あり女を撫子姫ととる容貌

衆は勝たり一年弥生の頃圓證寺の櫻を看んととる父母其

女を誘引く彼寺は往々朝霧ととる可髪ありととる姫を

意慕し竟思を遂ととる恨も此滝の下は身を沈むととる

其傍は小き岡あり願山ととる其塚ありと云又東の傍は

圓證寺の旧跡もあり

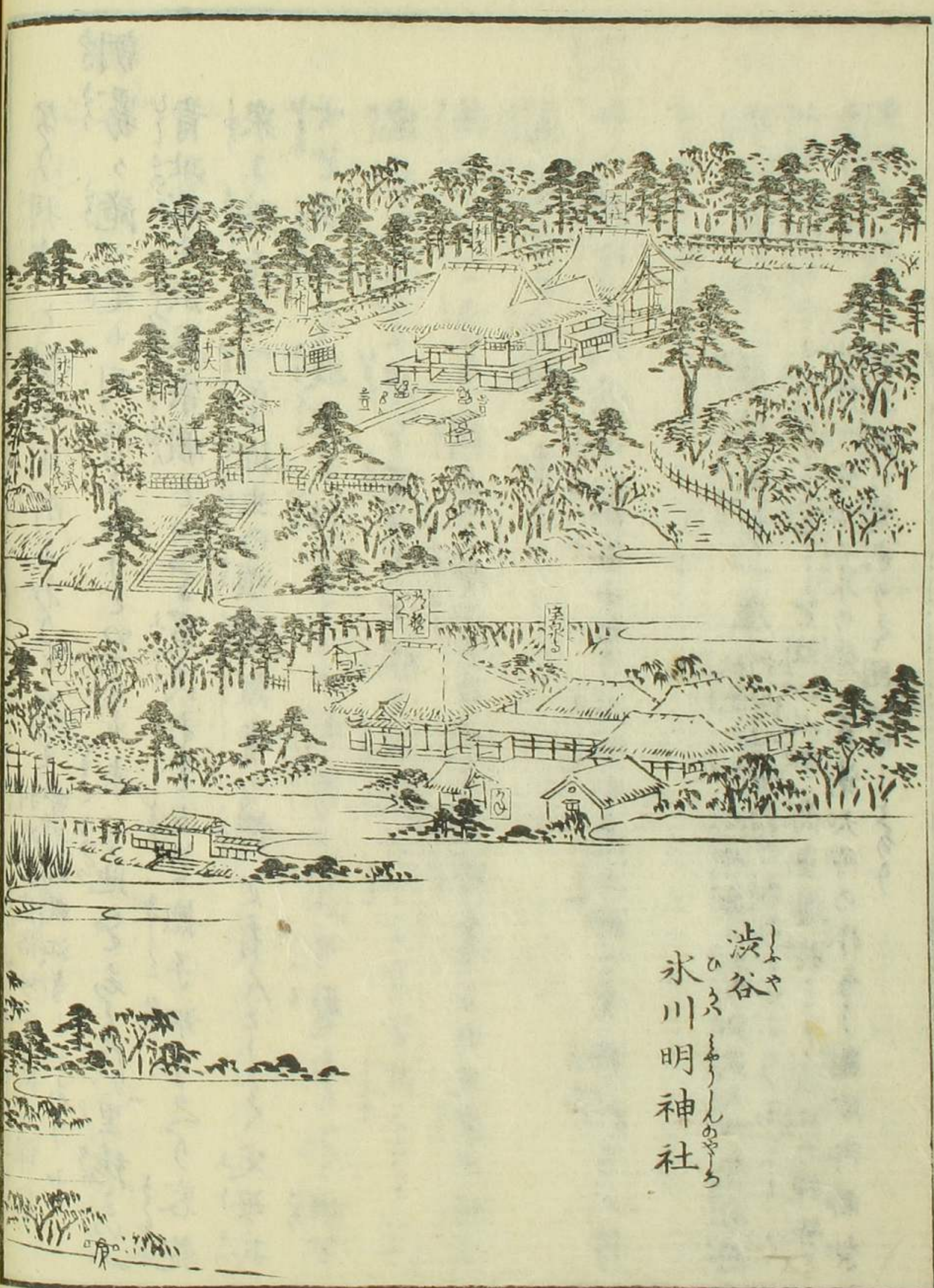
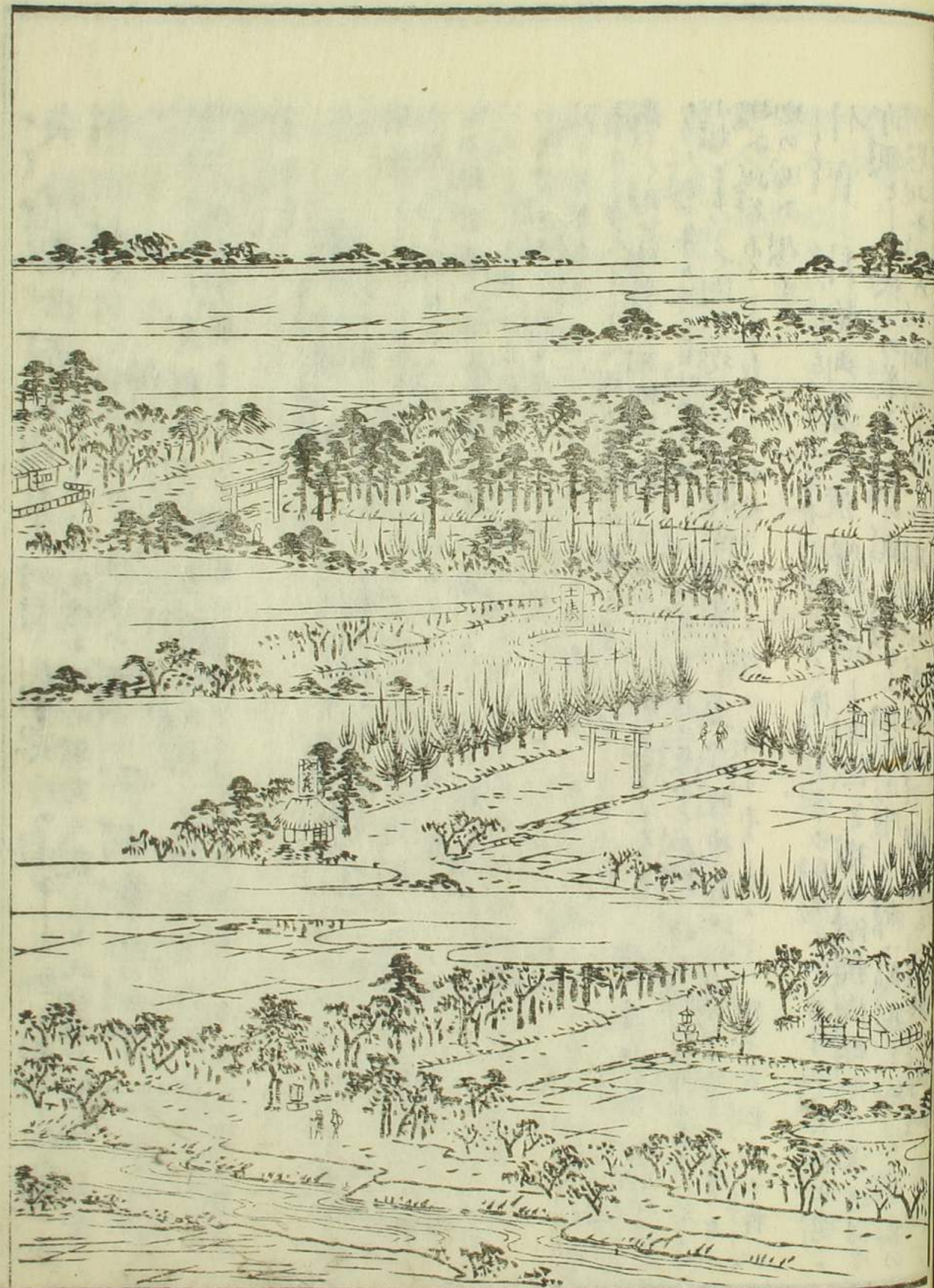
淡谷八幡宮 同所中淡谷あり此所の産土神とを祭礼を八月

十五日なり

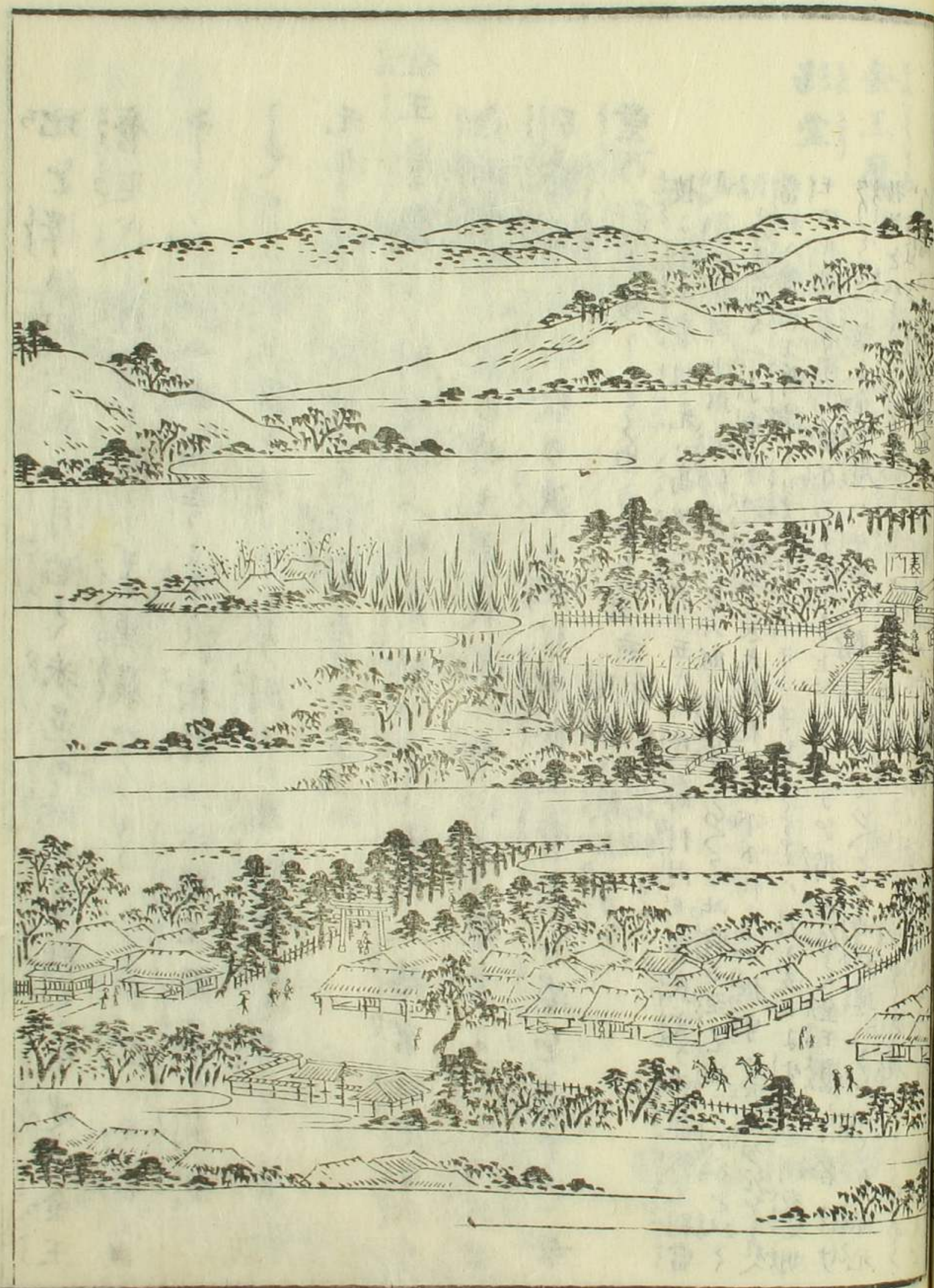
本社祭神 應神天皇一座

山城國鞍馬寺小安置しり淡谷大郎高重護持し當社の神躰と

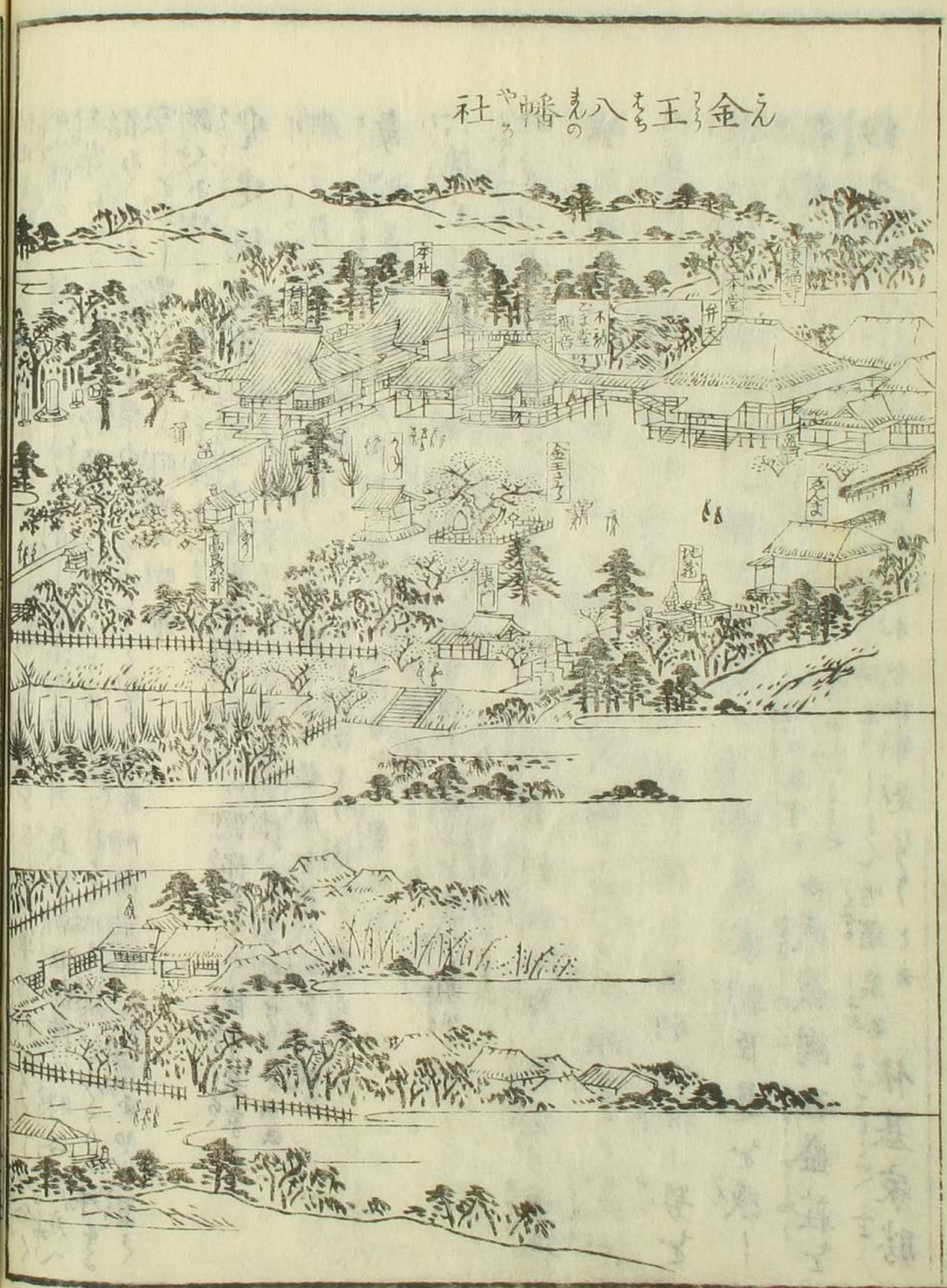
東福寺創建の時彼脚の僧来りて授与せしとあり



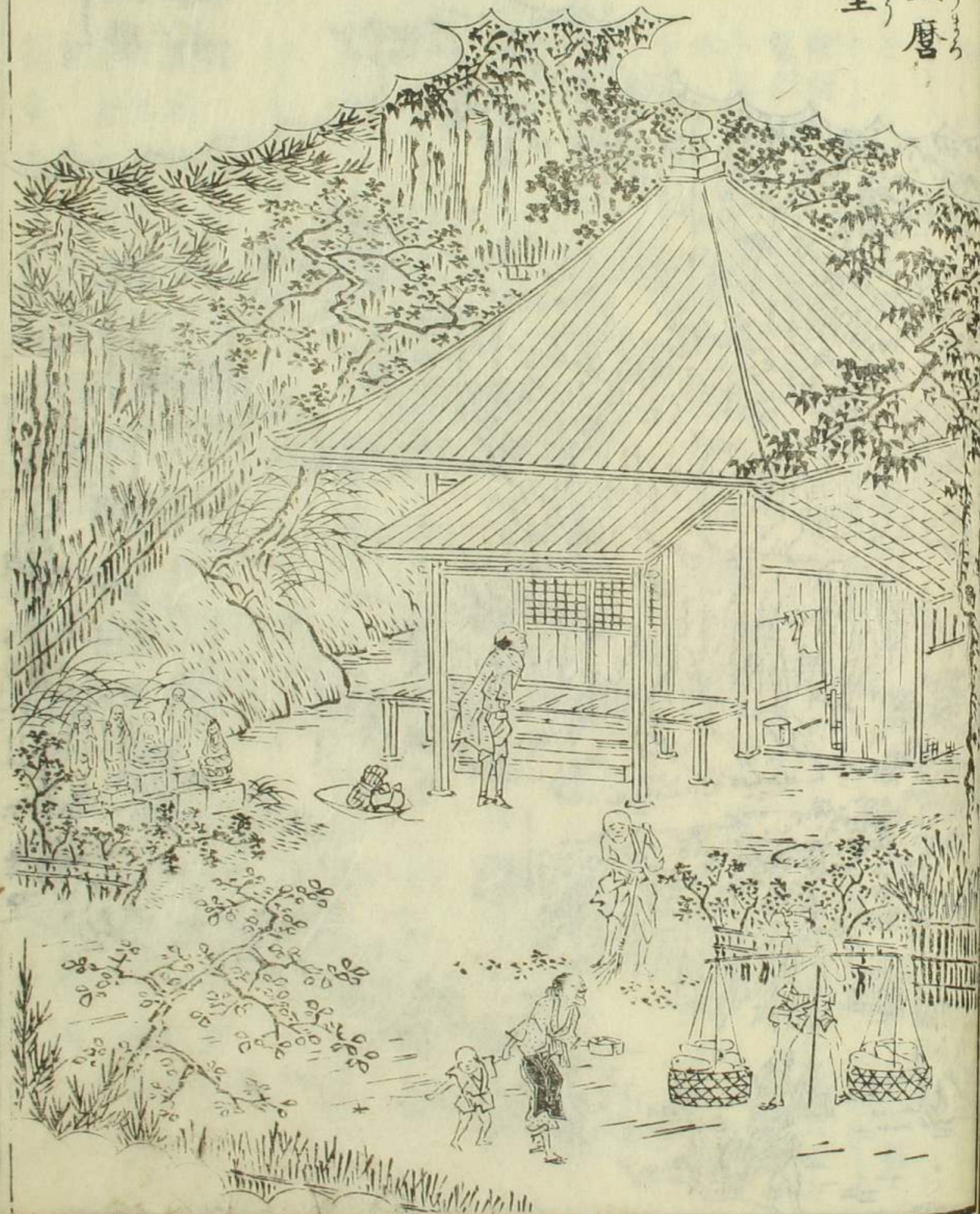
氷川明神社
渋谷
のふもと



えん王金八幡の社



金王磨影堂



地と擇ひ同六年正月始て米邑の地小當社を營建し金王磨迄代々氏神と稱し重嚴なりとて別當ハ天台宗中々洪谷山東福寺と号し相傳ハ六孫王経基の開創にして昔ハ親王院と呼しあり関山ハ圓鎮僧正と号す養和元年百十一歳中々化寂ありしと云

金王磨影堂 同所向小側叢林の中ハあり八幡宮社記云く

金王磨十七歳の時主君義朝の命により鎌倉に赴く頃其母別と惜し悲歎の涙は沈む依金王磨自ら姿を造りて母

堂の許に残しとめると云 其像ハ鐵衣ニカと

按金王磨祖先ハ高望王より五代の後裔村岡五郎良文ハ曾孫秋父別當武基の子同十郎武綱其子と六郎基家とのこ此時小至里始て洪谷を以て此と号同く一子重家河津平三大夫後松五位下小任ト五郎守と云爾カハ此大當社ハ幡宮ヲ祈請シ其ノ永治元年一手とて八月十五日ハ生シ金剛夜文明王の心取リて鹽カアヲ以テ上下の文字を借用シて金王磨トハ名付ケ物語を以テ考ヤシキ金王磨ハ左馬頭源義朝ハ信童ハ度々ハ保元

淡谷下郷所濟乃貢等所被免除也云云

河崎庄司次郎高重宅舊趾 同堀の内あり土俗傳へ云此重國ハ

違論のりあり六郷の河崎へ引移をも其頃此地ハあり

山王の社をも彼地へ引りて其旧地ハ稻荷の叢祠を残り

留めり

姉尾平次左衛門光景旧館地 是も同所あり今も光景馬を冷

たりとて小池あり早魃ゆも潤りあり霖雨ゆも溢り

なり常は岩間をとり清冷ゆも傍は駒繫榎と称する

あり光景愛せ安達粟毛とて駿足と繋ぎて水を飼ひ

しとあり

甘露水 同所あり里俗傳へ云天慶年間六孫王経基朝臣此地ハ

旅宿あり頃此水を採く味美ゆも甘露のめくありと褒詞

ありとあり名とせりとそ

玉池 同所あり里人云天文の頃天下大旱魃一河水ハ

流と絶一池沼ハ平地ハ異あり時此水涌出する常ニ

倍せり此里に住る一女子水を掬んとて水器の中ハ鞠の如ク

一顆の宝珠を得り玉精其女子ハ託して云く是ハ古れ八幡

宮の神器なり大永の兵火をさけ此井中あり直ハ神祠ハ

収むへとあり依里民大ニ恐れ謹く是を神祠ハ収むるとそ

此宝珠今淡谷 此故ハ玉の井とも唱へり

神 仙水 八幡の西あり相傳へ往古空鉢仙人此谷ハ入く不老

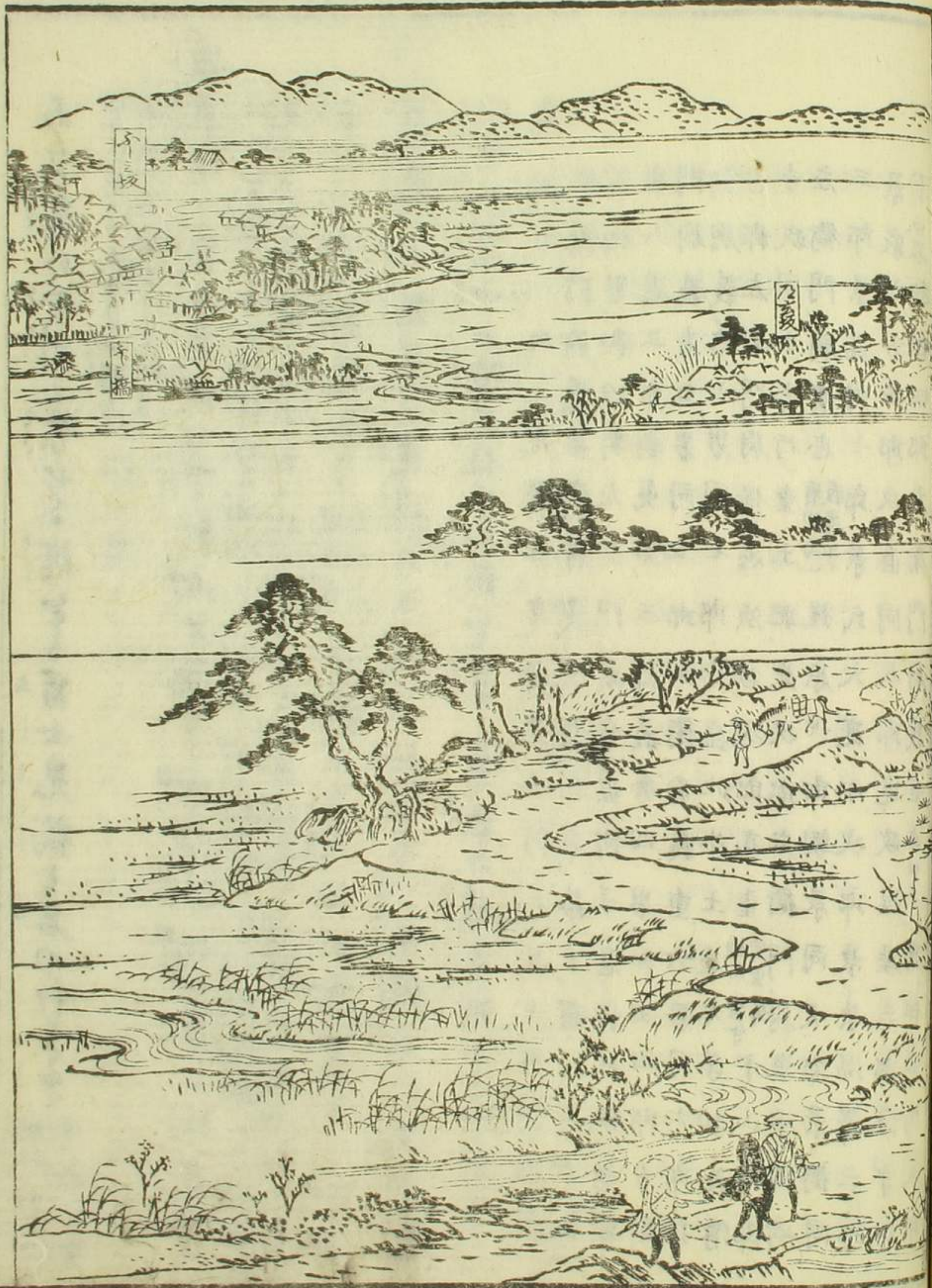
長生の仙丹を煉りて靈泉なり故ハ神仙人谷とも云とあり

鉢山とのめ法道仙人の鉢此雨ハ自ら飛来る故ハ号とそ

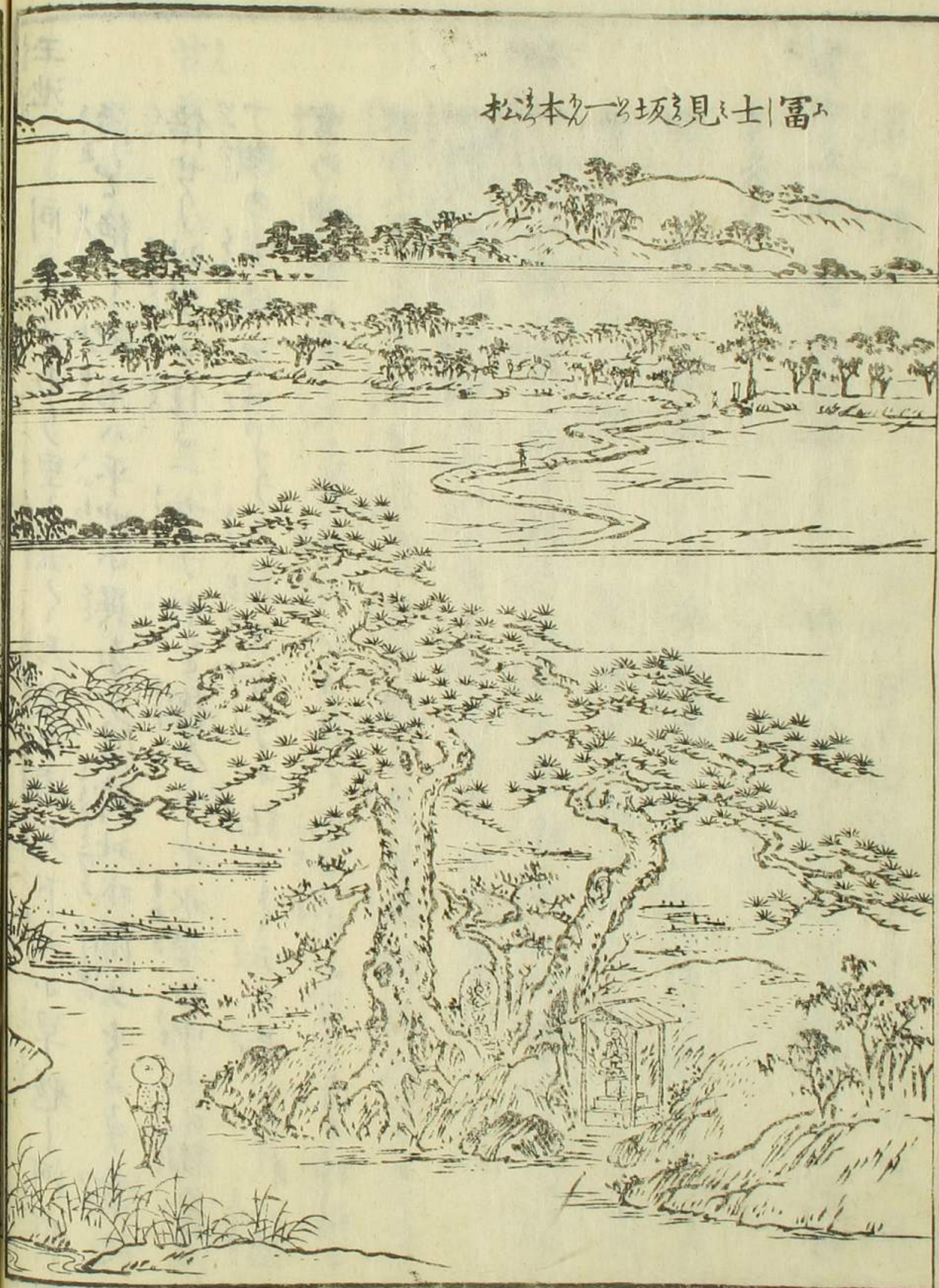
とあり

富士見坂 淡谷宮益町より西へ向ひて下る坂と云斜ハ芙蓉の

峯ハ對ハ小岩とそ相模街道の立場中へ茶店酒亭



富士見坂一本松



あり麓の小川に架せる橋をも富士見橋と名つけしと相州街道の
中坂の敷

四十八ありとあり此富士
見坂其首ありとあり

道

玄坂 富士見坂の下耕地を隔て向ふ方西へ登る坂をいふ

此坂を登る程三丁程あり直路ハ大山道中三間茶屋あり登戸の
渡まゝ二子の渡へ通す右へ行ハ駒場野の所用を登る前通北澤淡島への

世田ヶ谷へ行道あり道玄坂ハ里諺云大和田氏道玄ハ和田

義盛一族なり建暦三年五月和田の一族滅亡其残黨

此所の窟中小隠れ住て山賊を業とを故小道玄坂といふをかり

東鑑廿一云 建暦三年癸酉五月二日壬寅和田左

右衛門尉義盛率伴黨忽襲將軍幕下謂伴與力來

若嫡男和田新左衛門尉常盛同子息新兵衛尉朝

盛入道三男朝夷名三郎義秀四男和四郎左衛

門尉義直五男同七郎兵衛尉義重六男同六郎兵

衛尉義信七男同七郎兵衛尉義重八男同八郎兵

古郡左衛門尉保忠肥谷次郎高重時重守中平岡

重政同太郎重忠實子氏大庭小次郎景兼深澤二

左衛門尉盛同七郎政直門尉義直門尉義直門尉

三郎景盛同七郎政直門尉義直門尉義直門尉

景家大田方五郎政直門尉義直門尉義直門尉

下景和太郎政直門尉義直門尉義直門尉

益重被討取父義盛年六十七殊歎息於今者願合戰無

能義所從云同男五郎兵衛尉義重年三十四六郎兵衛

名三郎義秀三郎秀盛五郎兵衛尉義重年三十四六郎兵衛

勢五百騎船六艘又新左衛門尉常盛四十二山内

先次郎左衛門尉新岡兵衛尉義直門尉義直門尉

郡左衛門尉和田新兵衛尉義直門尉義直門尉

戦場逐電云云

治兼四年八月廿二日三浦次郎義澄同十郎義連大和和三郎義久子息義成

和太郎義盛同次郎義茂中畧三浦を以て道玄と稱し或人云道玄を

以て道玄と稱し或人云道玄を以て道玄と稱し或人云道玄を

道玄物見松道玄坂を登る七町あり西の方同一街道大坂

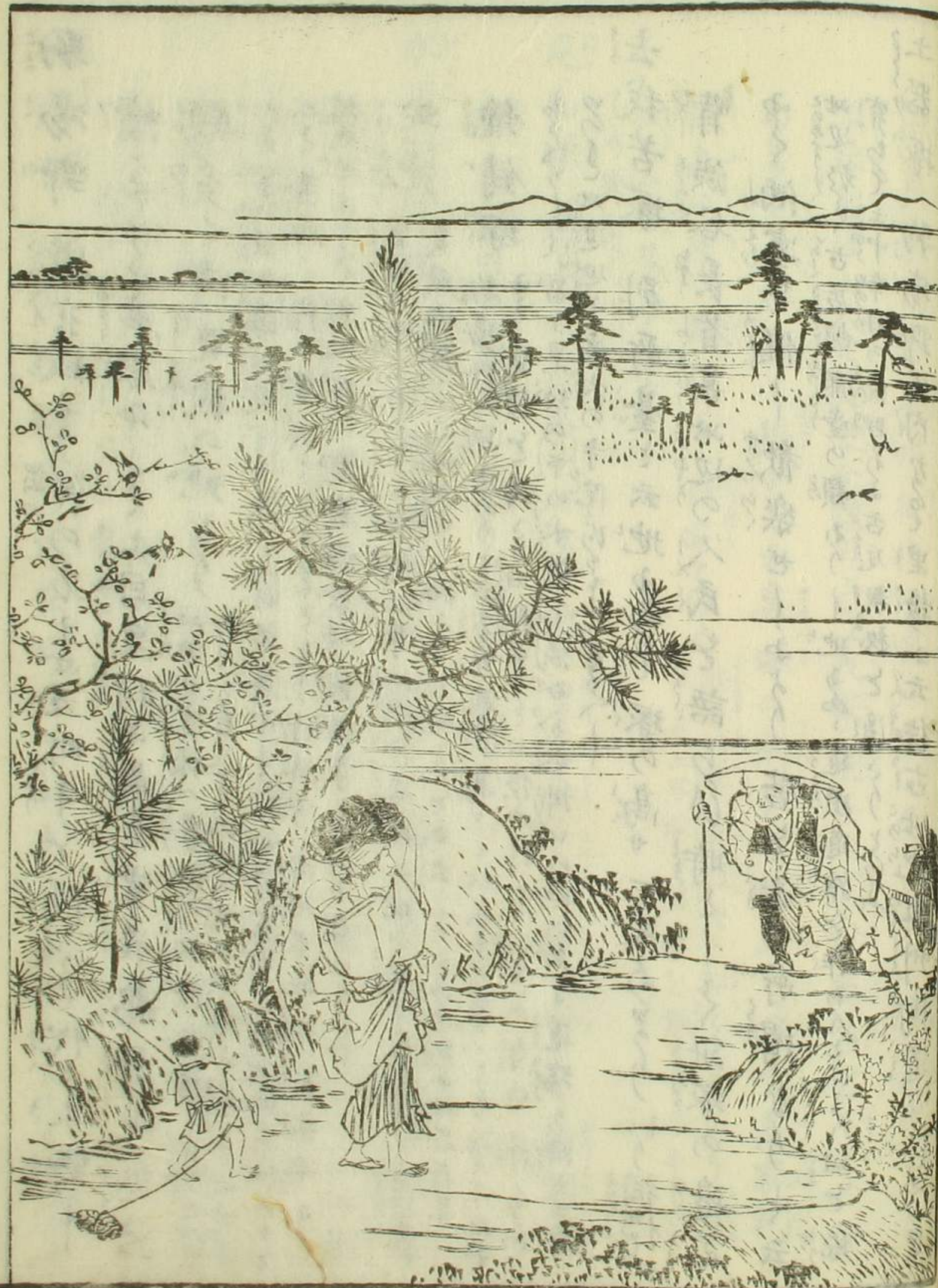
と云あり此方右側小あり一が明和の頃枯りしハ伐と

と云本の圍五と程あり根より三丈と上わく東西ハ廿間と南

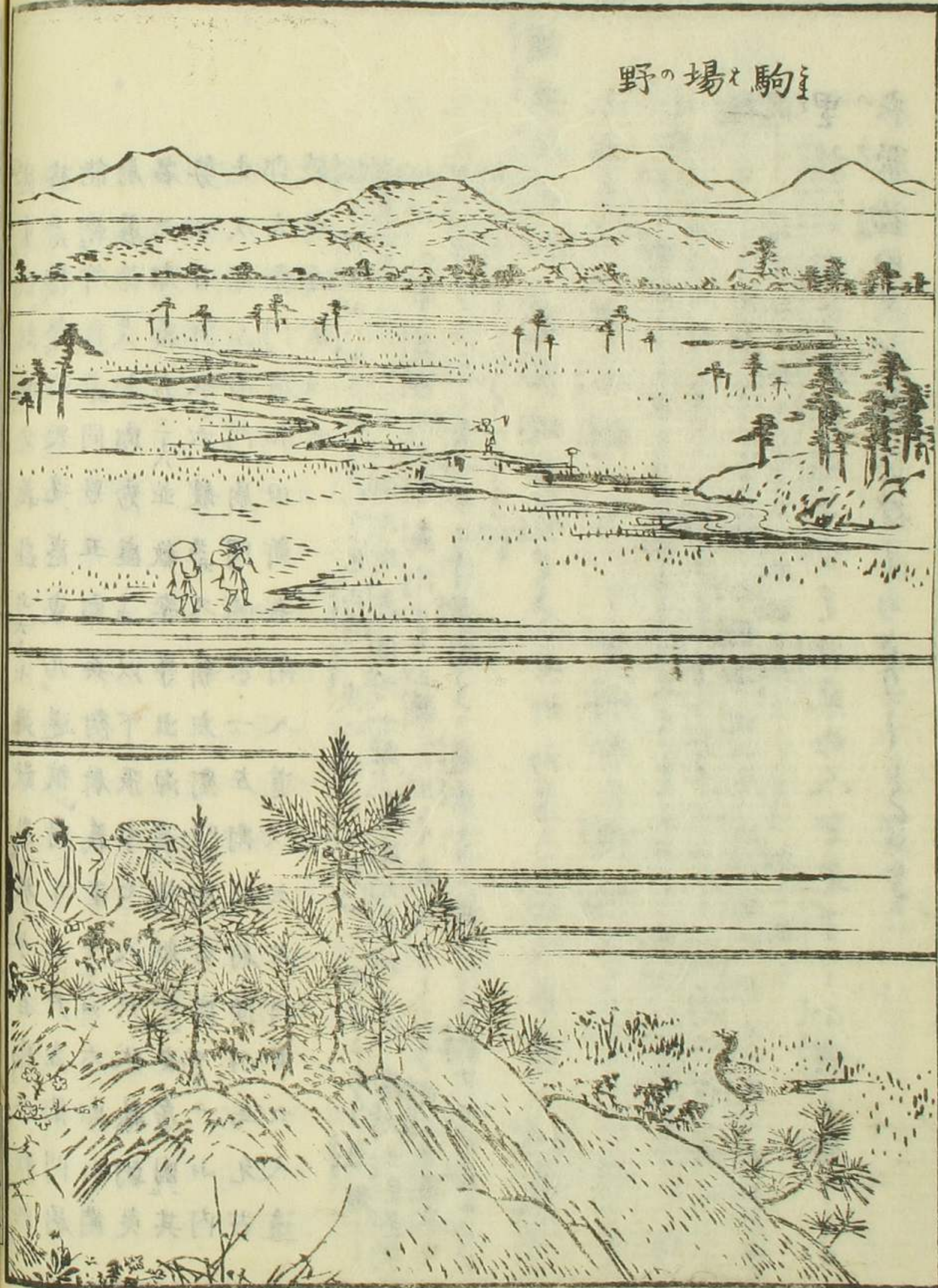
混下道玄と稱し一本松と稱しこの松と別

里諺云道玄此松樹を登り往來の人を見下し小賊を命し

衣服物の具を奪ひ採しめりしとあり



野の場と駒



駒場野 道玄坂より乾の方十四五町と隔る代々本野

續々々々々々廣原中々々上目黒村小属屯雲雀鷓野雉兒

類多々々々遊獵の地なり此地の官林ハ享保の初津狩場ニ定せられたり又此地の里正加藤氏某々小田原

以々々々居一終々農民々々々々人の後裔中々々小田原落去の後此地は縁ありを

蛇池 官林の中よりと云享保三年此地津遊獵の地ニ定せられたり

鐘鑄塚 駒場野の中よりと云方九尺許高サ七八尺許なりと云此の寺の

去我苦塚 別所臺と云地ありと云塚の高サ一丈ありと云相傳ふ

昔波谷長者某此辺の人民を語りし時と云此塚の邊に

酒宴を催し歡樂せしふより 苦と去の所謂なりと云

此辺に古居館佛堂の類あり地あり近頃道路を作らんと云此と堀

土器塚 駒場野の内なるを里諺に云往古此地奥州街道なりと云

源義家朝臣奥州征伐の頃此地に至るも酒宴あり

土器を後土人爲此地に埋り義家朝臣の武功英名を云み此

わもろと土器塚と稱せと云其塚の側を同勢山と稱ふ義家朝臣

供奉の輩の居たりと云此の地を

往古ハ馬なを埋り

足毛塚 宿山と小地名稱する地の里正金子氏構の内より頼朝卿

乘せり所の芦毛馬の斃れを埋藏せり旧跡と云

氷川明神祠 駒場野官林より此方の岡にあり祭神素盞鳴

命一座天正年間甲州郡内上の原と云る地ありと云加藤

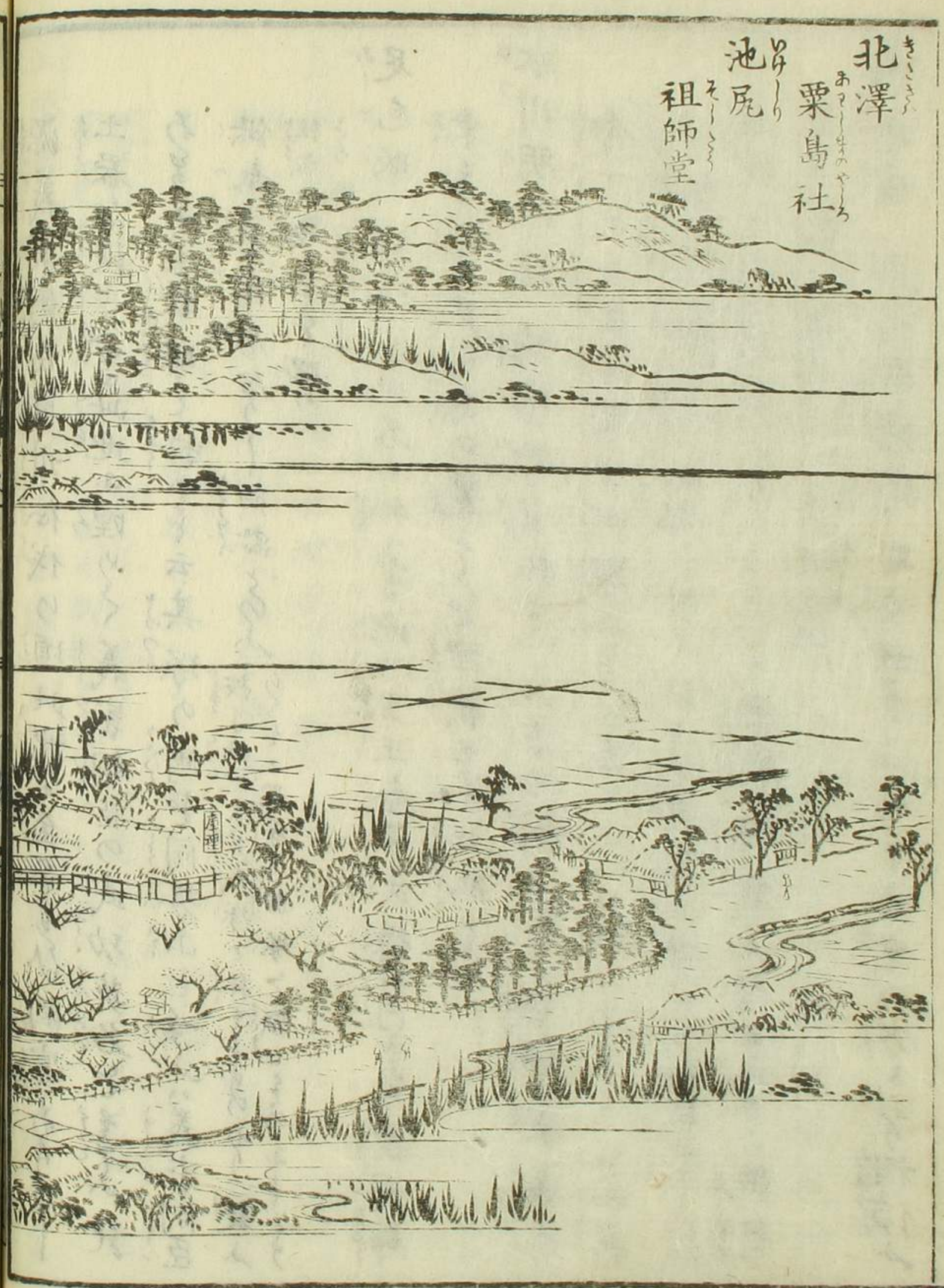
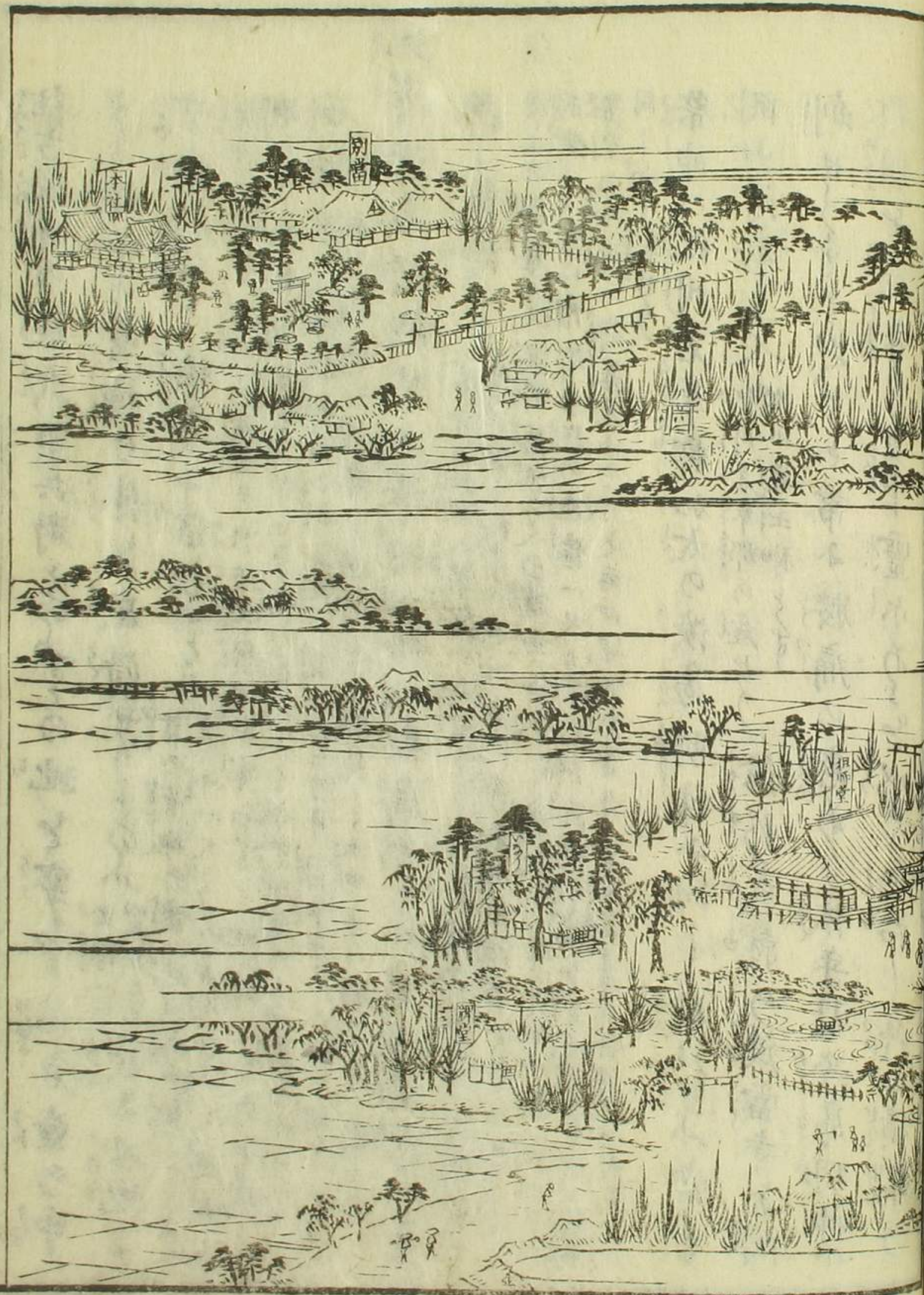
氏加藤氏の先光の此地に移り住む頃産土神なりと云ふに

此神を勧請なりと云るを祭礼ハ毎歳九月廿九日執行

天満宮 同所駒場野道玄坂より一町半斗東の方より相傳ふ

此神の氏子ハ古より疫災の

患と云ふと云ふ

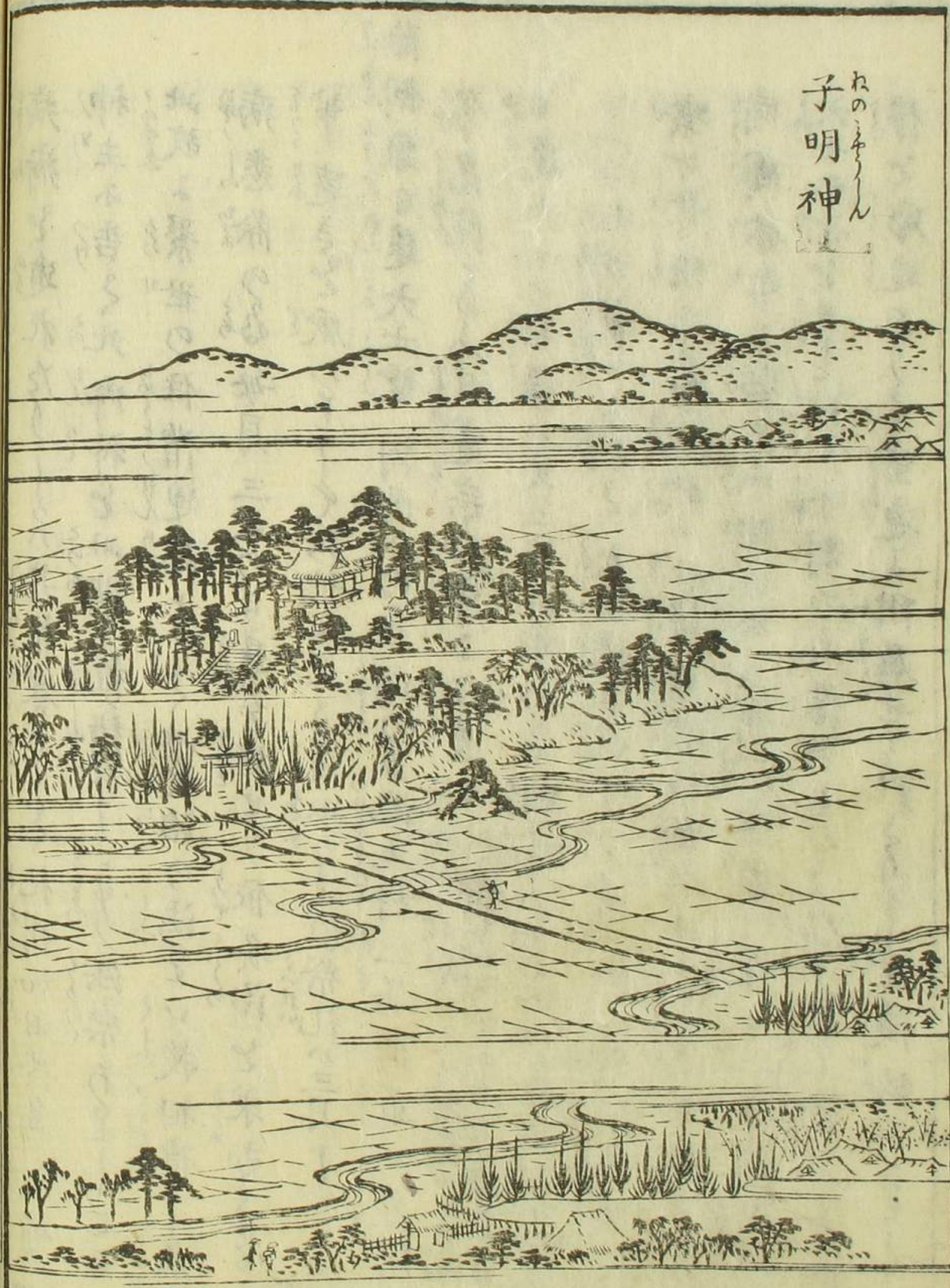


北澤
栗島社
池尻
祖師堂

往古此地の農氏市兵衛との地の地を穿ちて小き壺の中
より印子の菅神の像と感得せりとの事
昔の菅神の像ハ賊の所奪せられたる
宮居と宮々鎮守と崇むると云
菅神の像と宮中安置を往古神所と堀穿れり
其松宮居より半丁西の方あり今中川
石劔同社地稻荷の祠は長二尺二寸半圍本あり八九寸廻りあり
北澤淡島明神社 北澤村八幡山森巖寺との事 浄土宗の寺
院勸請す 浄光院と稱す 越州黄門秀康卿の法号を採り寺の号と
同創恵心僧都の作の座像一尺五寸の阿彌陀如来を本尊とし世田谷大丸の辺
同創西と稱せり
祭神ハ紀州名草郡加太の淡島明神同 相傳ハ當寺
岡山清誓上人紀州名草郡の産なり 修形成就の後當寺を創
創せしむると 常小腰痛の患あり依年月淡島明神ハ
祈願と籠まり夢中靈ハ ありと云々灸治ハ 終ハ 積年の

病病を道れたるハ其報賽と云々紀州加田淡島明神の
神主ハ告ク 此御神と此地ハ勸請ナ あり法樂ありと云
此故ハ累世の住僧連綿と云々此灸治の法と口授相傳ハ衆
病悉除の爲毎月三八の日是を施せり依灸治を求むると云
華遠キ 遠キ 厭ハ 此地ハ至る者少くハ祭礼ハ三月十九日と云
除劍難日蓮大士堂 同所八町斗南の方池尻村二子街道の右側
常光院ハ 日蓮宗の寺ハ安置セ 此寺ハ日義上人の開基ありと云
日蓮大士の本像ハ丈二寸二歩あり相傳ハ文永八年辛未九月
十二日相州龍口ハ 於テ 大士殊小伏せんとせられ時刀尋段ハ
壞の奇瑞ありと以終ハ北條時頼の赦免あり誅を道と云
同國依智ハ 移リ 本間六郎左衛門重連ハ 家ハ 入リ 重連
大士の化と云々大士手刻の自像をありんすと云依自ら此
像と彫造ハ 重連ハ附屬せられしを後故ありと云

子明神



當寺は安置せしむるを靈驗照くさる故小指人常絶す

正一位子明神社 二子街道下馬牽澤邑道より左の方耕田を

隔て丘の上より別當八天台宗宿山村壽福寺より兼帯に

馬牽澤舊跡 同所子明神の前今田畑とある地の旧名なりや

今ハ上目黒世田谷へ跨り都て上中下と三に分れたる

邑名とあり里諺云文治年間頼朝卿奥州征伐の時没谷

八幡宮へ恭籠あり其時荏原野より東條芦毛の馬を撰

んで献せられんと此地を牽れと云ふ頭よりあり是を

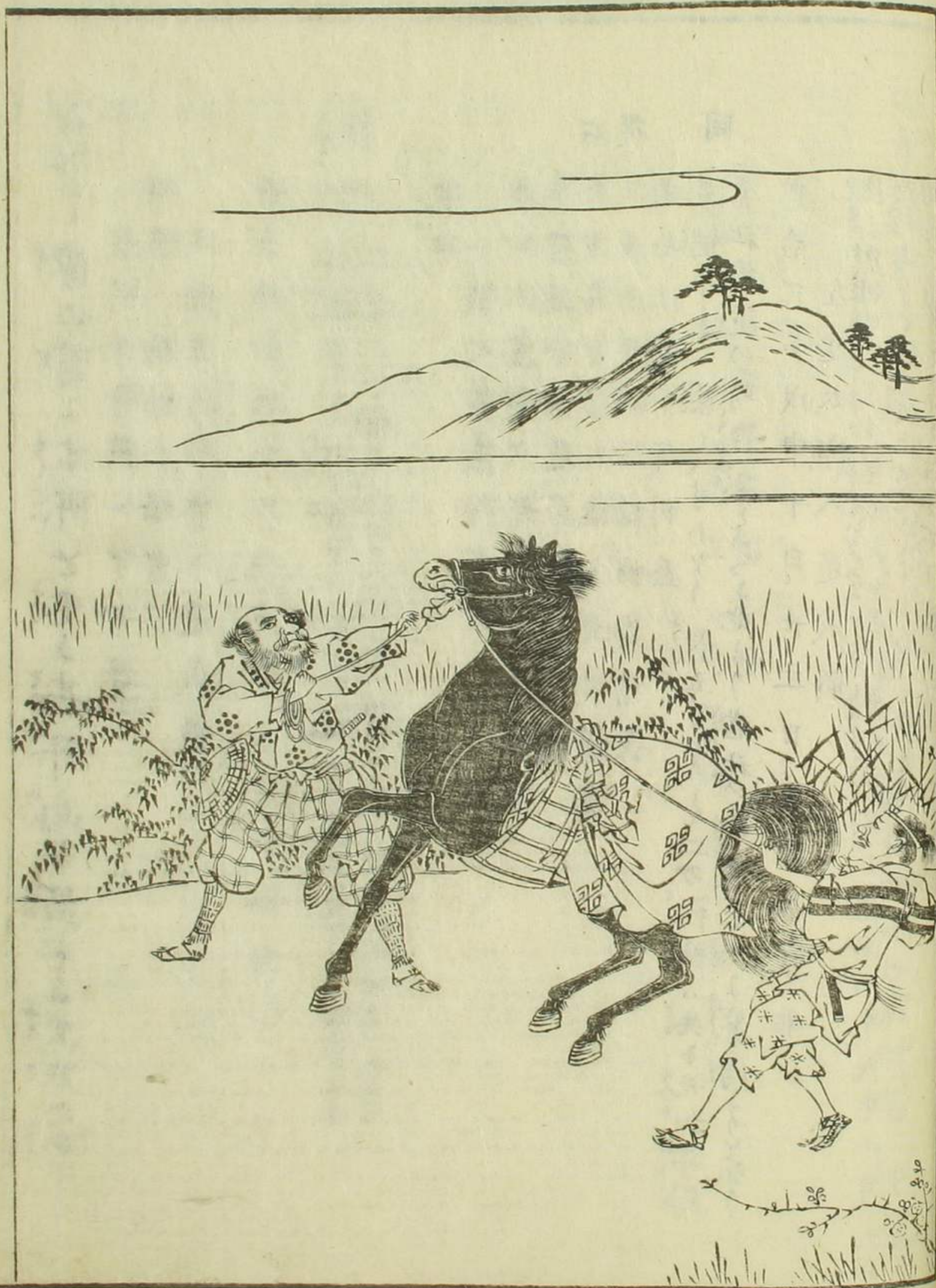
止られと云ふ或云頼朝卿御狩の時この所より馬を獲きて

下と照合せしむる又云頼朝卿の御馬を蓄ひあると必崇ありと云ふ

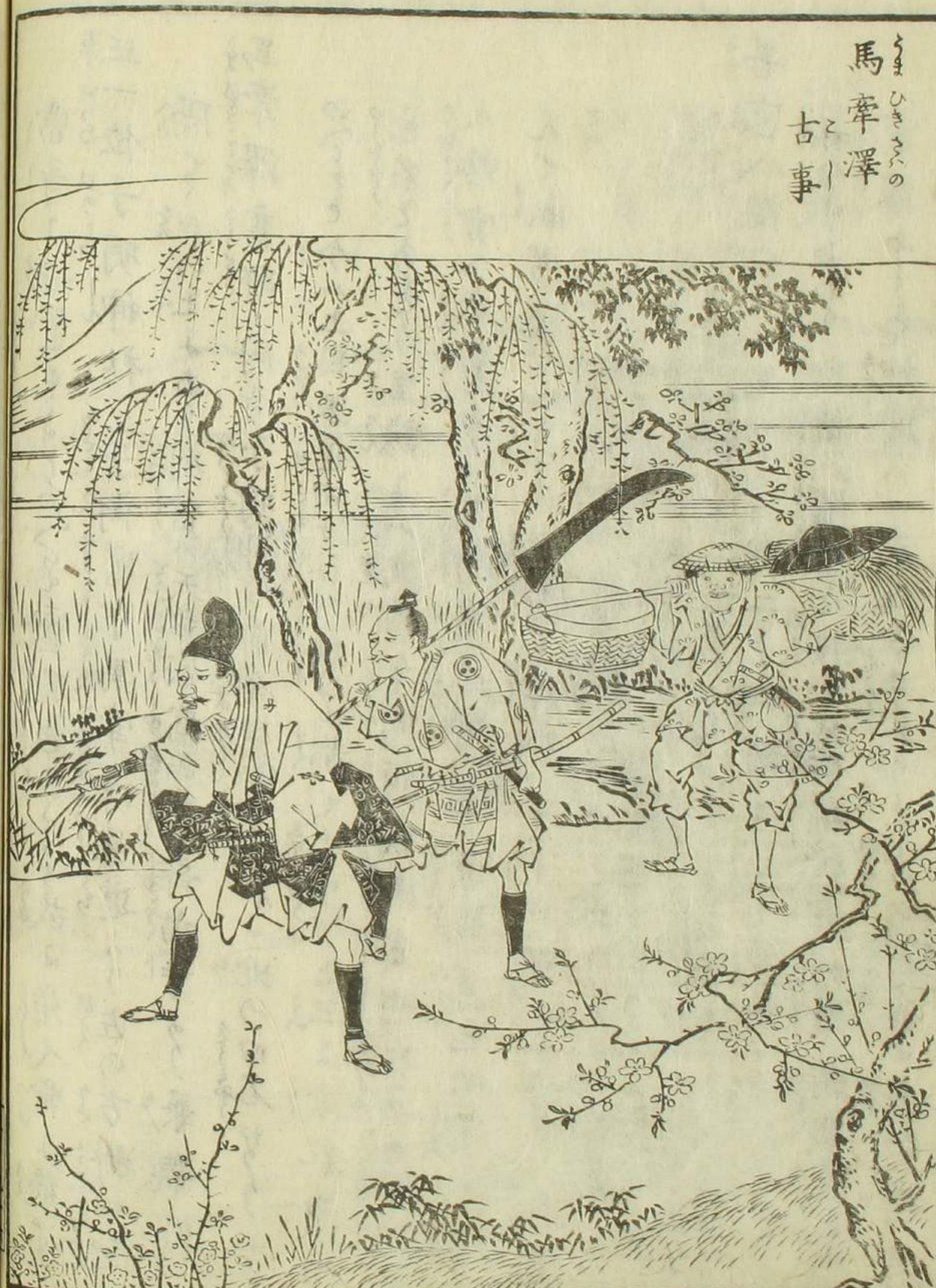
若宮八幡宮 上馬牽澤村二子街道より右の方三丁斗入る小き

森の中あり駒留八幡宮と称も北條相模守時頼朝臣崇その

靈像ゆゑ神躰ハ一寸五分ありと左の所より弓を持し



馬うま牽ひき澤さゝの
古ふる事こと



像の背は木牌を建てる其牌面に銘する文左の如し

最明寺時頼公守本尊
經塚 駒留八幡宮
北條左近太郎入道成願

奉安鎮所 德治三戊申年十月廿三日

經筒 紫銅中合目と八銚少く留るものと合はくもれども
柄楨しと銚の跡の存せり圍と五寸六分長五寸あり

敬白

八幡大菩薩御寶前
奉如法書寫六部妙法蓮華經
奉讀誦妙法蓮華經一千部
志者為身心大施主現世安穩
生善所親類安福壽增長
南無法界平等利益

同 後右 當社修造の時徑塚と二の徑筒ハ共天和年間
當社修造の時徑塚と二の徑筒ハ共天和年間
當社修造の時徑塚と二の徑筒ハ共天和年間

德治三戊申十月廿三日 沙弥見佛

按皇朝年代記皇代記是院年代記等德治三年戊申十月九日
改元あり延慶とせしむるありと將軍執權次弟ゆを十一月廿五日
德元とありて延慶とせしむるありと將軍執權次弟ゆを十一月廿五日

田中辨財天祠 同社地あり常盤御前此地に崇ると云一説小常盤
背面ハ左の如く記あり

香林院 海岸實樹大坊
田中辨天之施主 常盤御前御法号也

按上馬牽澤村の隣村若林村小香林寺と云一説小常盤
寺に常盤御前の靈牌墳墓あり過去帳に香林寺殿海岸實樹大坊
天文四年未七月七日あり香林寺ハ即常盤御前の所創なり

社祀云當社ハ幡宮ハ何れの時世の創建なるを去りし
社廟傾廢神躰も又あるを於て然小天和二年此地に領主

大久保侯藤原忠誠當社を修造せんとし其項徑塚と云
地を穿ち土中一の壺を得り又其壺中小銅器あり 前小奉

德治三年戊申北條左近大夫入道成願沙弥見佛等の名を
銘し内小今存する所の神躰を蓋し又其一箇ハ法華經六部を

書寫し又一十部を讀誦する由銘せり依忠誠當社に修造

常盤橋

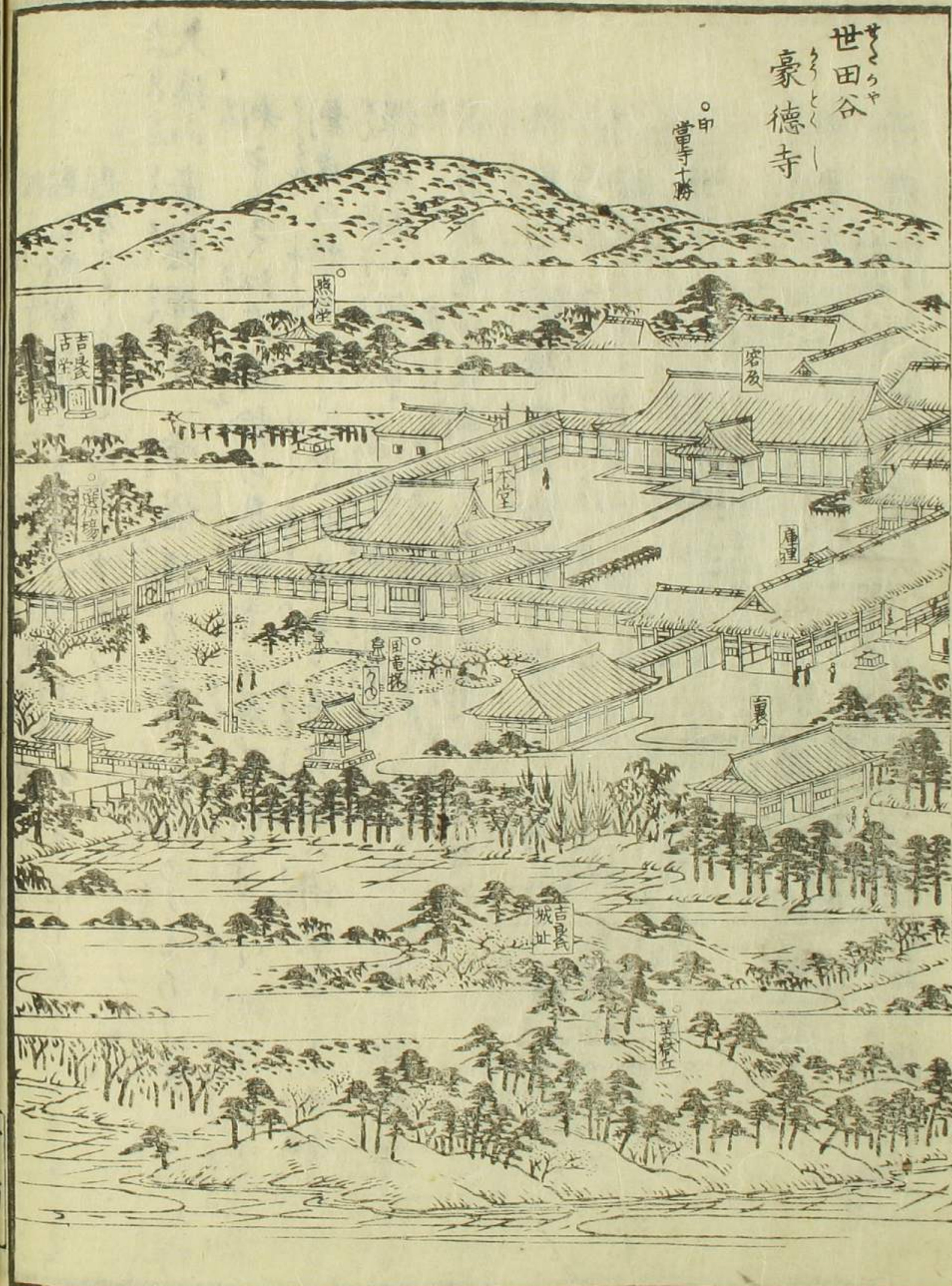


経営落成の日新に法華經六部を書寫して銅壺に収め社の礎下埋藏一駿州建徳寺の僧隆範を以て近宮の式を執行せしむるとの事

八幡山宗圓禪寺同所二子街道の左品川上水の端あり當寺ハ若宮八幡の別當寺なり洞家の禪院あり江戶駒込の大圓寺に屬し本尊の座像の釋迦如來を安置せり當寺ハ北條左近太郎入道成願の開創あり存應林可和尚中興より北條

文保元丁巳年十月廿三日
 當寺開基 心覺宗圓菴主
 北條家孫左近太郎入道成願

長立山常光寺 按卷村世田谷上宿の南あり日蓮宗身延の末より天正十三年乙酉八月草創を開基ハ越後人泉藏院日禮と号日禮泉雲の頃此地青山氏の家より此人嗣を



世田谷
八幡社



照心堂

客殿の左林叢の中あり
吉良氏古塋
照心堂の前
松樹の下あり
古き五輪の

石塔

世田谷所
吉良右京大夫政忠朝臣の墓なり
當寺過去帳前の

開基

久榮理椿大卿の墓なり
弘徳院八當寺過去帳より
文明十二年庚子十二月

古石燈籠

一基
同一墓の前あり
政忠庭中のもの

當寺開基碑

佛殿の西に立る
寛政十一年の冬
當寺十五世靈潭和尚の撰

補助

これと
文あり
往古吉良家小因ある者力を戮せし靈潭和尚の志を

碧雲閣

徳門の名なり
これも當寺十勝の一なり
其の黄鳥哺ハ同一門の

楓樹林

同興あり
左の叢林の中あり
あゝの梅樹を云松柏壇も又同一方の樹林を名く

清涼橋

徳門の前の小川に架かる橋の
名なり
十勝の一なり

當寺ハ文明年

創十二年庚子
世田谷所
吉良右京大夫政忠

久榮理椿大卿

の久創建する所の精舎なり
過去年帳より
文明十二年

直久其法号を採く

弘徳庵と号け昌譽禪師を請く
閑山

其先吉良治部大輔治家上野國飽間の地あり

基氏より
伯母弘徳院殿

世田谷郡を賜り初て移住を夫より

後世田谷殿と稱せり

過去年帳より

文明十二年

庚子十二月二日

閑山

祖とを其始の禪利家 天正年間に至り宗関禪師来り薰席一洞
門ふあゝむ万治年間江州彦根城主正四位上左中将井伊
直孝侯此世田谷の地を賜ふ 或寛永十年 万治二年己亥六月
廿八日逝也 法号久昌院殿豪徳 遺言ありて令嗣直澄其遺骸を
當寺に葬せ故に弘徳を豪徳に更む 弘豪同音 爾後直孝侯の
賢娘掃雲院殿無染了心禪尼先考の冥福を吊ひむたふ
許多の浄資を喜捨し堂宇を経営し三世佛の本像を安
置して良田數十頃を寄らんとす
吉良氏古城跡 豪徳寺構の内右の方より續る地を云
今井伊家の
堀の形二重の残り空堀の跡と云ふ所もあり 其封内一町四方
中々櫓を構へしと覚し跡三ヶ所迄存せり又居館の跡と
稱する所の築地或ハ林泉の形残り水と湛へる地あり
富士見松と云ふ老樹あり其地より斜に芙蓉の峯を眺望せり

此樹なり 世田谷の吉良家清和天皇十世の苗胤足利左馬及義氏の子
三州の吉良と稱せ義徳ハ奥州に居る故に奥州の吉良と稱す是則吉良姓の祖なり
義徳六傳を吉良治部大輔治家と号す治家始武州世田谷城に住す時
田谷御所と稱せ又六傳を吉良政忠と稱す法号を同春院とす其後頼久の世
至り吉良家ハ三州東城西城の外に号す 宜く時田に改むるに
治命ありて 時田と号す 則久良 郡の藤田村に住す 其地ハ
小田原北条家關東を領せし頃ハ藤田村に許す 其地を領せし
領とも其貫高ありしす 今世田谷領と稱せ 村數五十七箇村あり 其項一圓町
宮坂ハ幡宮 同一寺より西の方北岡續りあり 其間三町計を隔つ
鎌倉鶴岡ハ幡宮の摸中々 勸請の年歴詳ならず 天文十五
年吉良頼貞當社を建立すと云 或ハ義家朝臣勸請せしれ 御神
義家勸請とす 祭礼ハ八月十五日や 社司大場氏の奉記
社内に存せし櫻ハ頼貞親植と云ふ 當社建立の棟札に注し 頼貞の花
頼貞ハ頼康の始の名あり 頼貞ハ頼康の始の名あり

廣戸備後又三郎正之碑當寺佛殿の右にあり正之は駿州の産也
柳宮社稷の臣なり高祖五郎久行江州廣戸郷を管領する因氏より永祿十三年己巳召ふ應しく兩當家より仕まり後仕を致して世田谷の地より退居し慶長十七年壬子正月十日行年八十八歳申す終る依り當寺より葬せり延宝八年の冬孝行行隆正武正次等とて立す銘せり

吉良氏古塋堂前左の隅にあり頼康の古墳も當寺にありとの一説も定あり
鶴松山實相院登戸通達世田谷元宿の左の裏通弦巻村より

曹洞派の禪林中て同所勝光院に屬を當寺ハ世田谷の吉良家七世孫左兵衛佐氏朝閑居の旧跡中々其閑居の号を学翁斎と稱せしと云学翁斎卒去の後学翁斎ハ慶長八年癸卯九月六日卒とあり息

頼久當寺を閑創りて法号實相院殿学翁玄誓大居士の文字を採り寺号を用ひ天永琳達和尚閑山とて或ハ應天和尚と云ふ

本寺阿弥陀如来作詳なり
学翁斎の墓碑境内にあり又當山閑關鶴松院殿快窓壽溪大姉と稱する石塔並ひ立し鶴松院何人なるものと云ふとあり

可尋氏朝ハ吉良左兵衛佐頼康の養子中々其川の一族堀越治部少輔貞基の次男と云ふ駿州瀬名陸奥守一統の弟なり

弦巻郷 世田谷より此地ハ昔桑原右京進とてこの人の所領なり
由永祿二年小田原北条家の所領役帳より云ふ

世田谷八幡宮 同所より相傳へ八幡太郎義家朝臣の勸請なりと傳則此地の産土神中々祭礼ハ八月十五日なり

龍華山永安寺 長壽院と号し天台宗中々東嶽山に屬せり
本寺子手觀音ハ惠心僧都の作なりとて閑山も清仙上人

俗姓ハ二階 閑基ハ鎌倉公方源氏滿朝臣なり中興閑山ハ東海堂氏なり
石井内匠兼雄法名を良賢居士と号し法印俗姓石井

龍華樹 堂前櫻樹を号し今ハ枯る當寺の閑山清仙上人鎌倉大藏谷永安寺の旧地より遷し
右の谷を云往古永安寺ハ源氏滿朝臣の菩提所ありと云

石井氏移塋碑 本堂北の側より
相傳鎌倉公方氏滿朝臣左馬頭基氏應永五年十二月四日逝去

あり永安寺殿壁山全公と号し仍鎌倉の大蔵谷に新に一精舎を造り直し其法号を採て永安寺と号し建長寺純曇若和尚を請し寺主たりしむ譚周應夢窓國師の法嗣なり夫より後建長寺瑞林菴の開祖あり満兼朝臣持氏朝臣相継て重修ありし永安寺十一年二月十日持氏朝臣此寺に於て自害せられしハ菅領上校憲実其男成氏公永壽王幼稚なるに依り暫く難を美濃國に避り然し嘉吉元年京都將軍の命を奉り再び鎌倉に歸入りあふとて上杉の両執事良もそれハ上を蔑し権柄を争ひ闘諍遂に止時なく亨徳四年六月十六日今川工總介より鎌倉を追補せし當社宮殿民居に至り迄悉く灰燼となり永安寺も又廢を思ふに於て足利六世の繁昌一時に滅し都會空しく草莽此地となりしを爰に二階堂信濃守なる者あり持氏朝臣に仕へる不二股肱の臣なり永亨の時公の使臣悉く永安寺に死す

信濃守一人公の遺命を承りあつを以て俱に死するものと免さるるに適し其後裔孫名ハ某法名清仙と云者あり永安寺を鎌倉幕府世々の墳壘安鎮の地たりし荒亡年久し兵馬馳走の巷とあつを患へて終に再復の願を發し延徳二年三月勝長壽院の門主寺記持氏公の季子との命を奉りて此武州中丸郷大蔵村ハ其名鎌倉の旧地也同しを曰扱し禪刹一字を建立し鎌倉幕府世々の神主を安置し寺号をも又永安寺と稱す門主某の功を奉り長壽院と云當寺の天正年間當寺第六世良深より以後台密の二教を改し堂宇を修補を然しとも柴椽草堂のなかりしを明曆の頃石井兼忠とつる人其父良賢居士の没後追福のため堂塔を重修し佛殿と莊嚴を是中興開基なり

不動明王画幅妙澤華聖護院道與准后開眼せられしと云侍入即紙中ハ華押を注しあり

大野新兵衛 大工石渡

帶刀先生義賢之墓

大蔵村石井土の内殿山といふ地の東南

農家清水氏の宅地の傍あり

清水源兵衛とあり八則土人ハ大将塚と呼べり

東鑑曰 治承四年庚子九月七日丙辰源氏木曾冠

者義仲主者帶刀先生義賢二男也義賢者久壽二

年八月於武蔵國大倉館爲鎌倉惡源太義平主被

討亡于時義仲爲三歳嬰兒也乳母夫中三権守兼

遠懐之道于信濃國令養育之云云

相傳此地ハ義賢居館の旧址なり故ハ殿山の称ありといふ

天明年間此地の農民清水氏義賢の塚をあそき

古カ及び砂金の類を存せしとありこれと祟あり

年間石井氏某法名良覚と云一人京都より此殿山の地に移り住む

土人云く同所新坂の上神明宮の殿ハ或伊田中務大捕兼紀と云人の居跡

大六天の宮あり此良覚の靈を祭ると云

なりといふ

按石井家の先祖良覚ハ武州久良岐郡益利谷の伊丹氏より小田原へ属

一考す

大神山宮の殿山の神あり永安寺より別當兼帯を神本ハ

石井神社 弦巻村あり西南の方大蔵村石井氏某の地ハ

郡屬を明暦より己降 祭神詳なり 寛永年間石井氏兼忠社と

多磨郡に入たり 舊地石井土あり今の地へ移り稲荷を相殿ハ合祭せり又近世

故あり同兼昌磐井と斎の假名ハ違へとも其訓の相似と

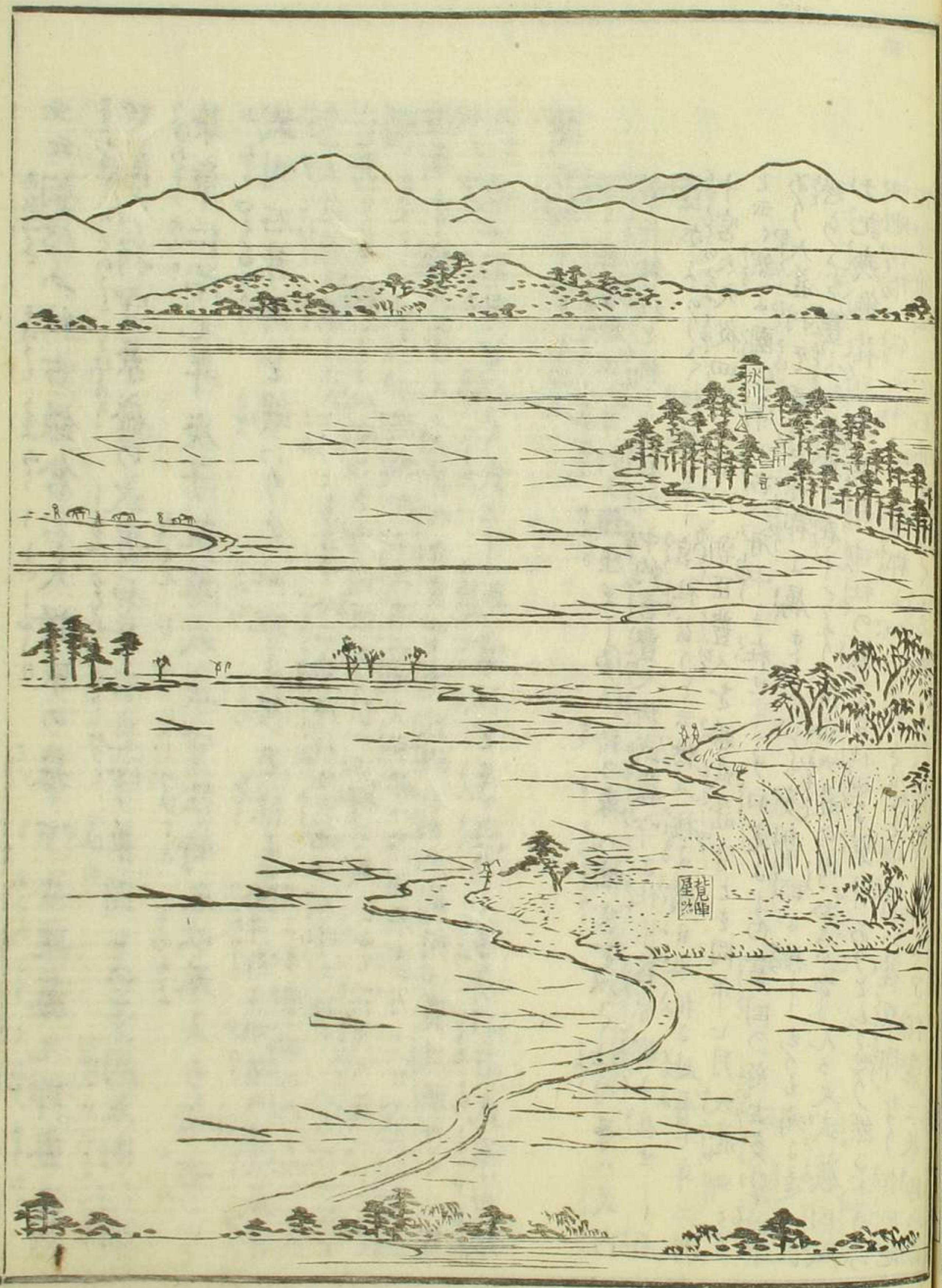
以奇稲荷と称せりといふ 土人云當社ハ武蔵國荏原郡二

座の内延喜式神名帳ハ載らざる 磐井神社是なりと 石の文字

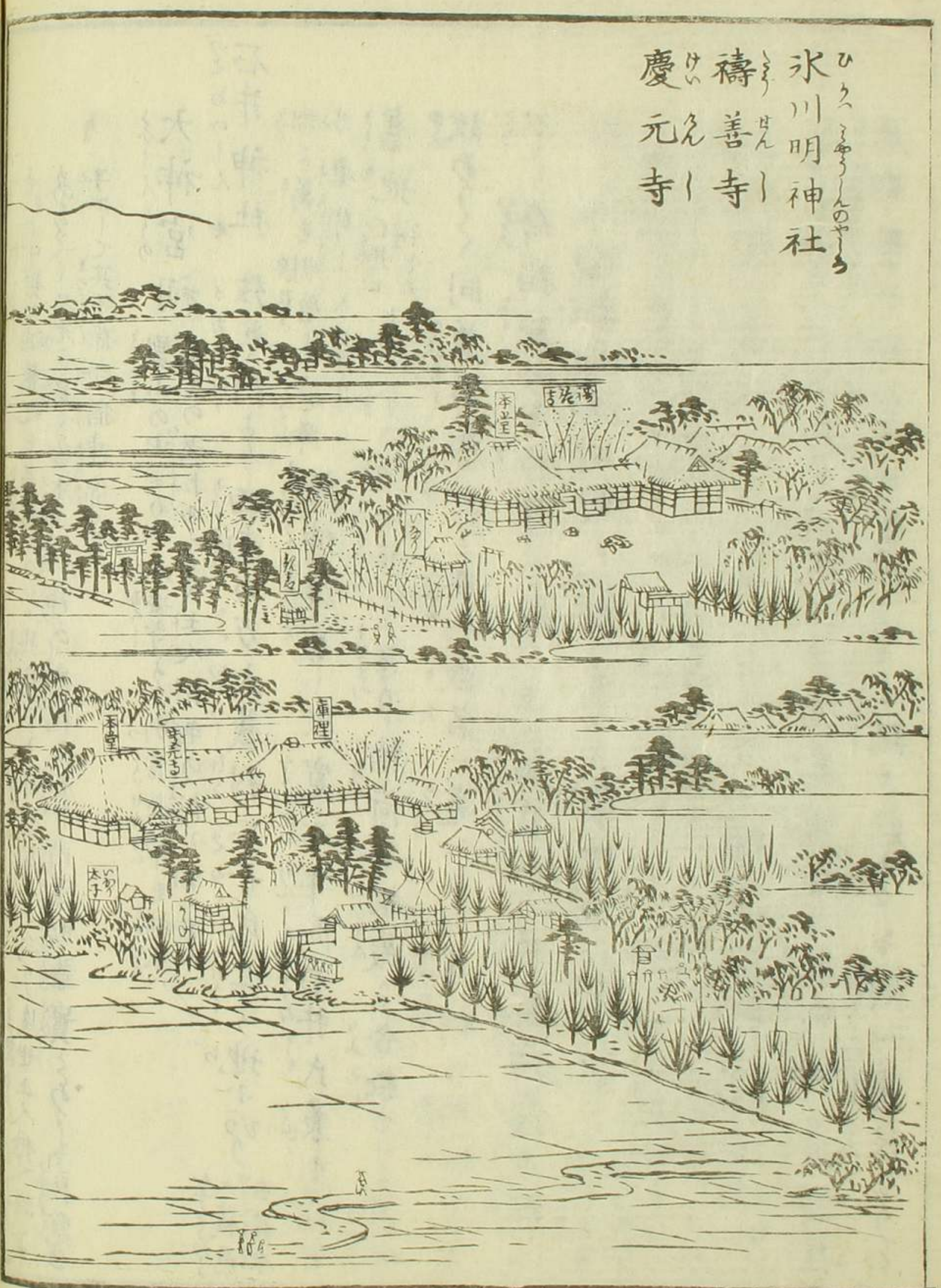
日本紀等ハ伊弉或ハ伊波ともあり一字二訓なり土人云磐の文字最筆畫多

改めり 舊地ハ今の社より七八町を隔て 同邑石井土谷

原郡磐井神社の辺磐井ありと記されり 則此靈泉ありと



ひくしんのかみ
氷川明神社
禱善寺
慶元寺



未成佛の道と問なる同十三年辛巳正月廿四日行基菩薩
此地に至るたふひ地藏の像を彫刻ありてを貧女と与て
曰く此地の則を有縁の霊地なり汝直に精舎を営む一吾
其勝地をトキ一柱杖を以て地上に畫し一是を定め
敷と云其依て貧女の其項世に地蔵尼 薙染し寺院建立の大志を
企つ同郷の富民秦氏某なる人糧財を喜捨一田園附一
これ精舎僧坊悉く落成一称名散花梵唄の声絶るなり
然る建武二年の兵乱に堂宇悉く灰燼となり一己降
本寺の假草堂に安しなり一遙の後世田谷の吉良氏不
測の靈夢を蒙り大に崇敬ありて寺院再興あり一と竟に
天正の頃小田原北条家没落の後吉良氏の家も共々七ひり
しあり其後漸香花の備もあらずなり今僅に草堂
一字を存するの

往古堂舎兵火のあふ灰燼せし頃此寺は自ら火焼と
通れ多ひて恙なきに後此里に住る川辺氏某妻の

観

其頃田園等を喜捨し奇瑞あり一報恩の念永世當寺の檀那となり
音寺 吉祥院あり八町と云西の方宇奈根村あり當寺ハ
永正年間天台の沙門實海 河越喜多院弟十四世なり 創建する所の
寺院あり深大寺に属す本寺十一面觀音の本像ハ傳教大師
の作なり故に寺号とせりとの

昔ハ相州小田原ありて圓正寺と号
兵火ふせひて廢す

荒井對馬治義墓 當寺にあり相傳ふ治義天文中上野國新田あり
天正元年癸酉二月十七日没する由碑面より此地也

永

劫山慶元寺 華林院と号觀音寺より七町あり西の方喜多
見村にあり淨業の精舎あり木机の泉谷寺に属す
本寺 阿弥陀の座像ハ一尺計あり一惠心僧都の作ありと
云開山ハ真蓮社空誓上人と号せり當寺ハ江戸遠江守の後裔
江戸刑部補頼忠の子を江戸攝津守朝忠と云此人も頼忠は同
属せり頼忠の次男勝重と云勝忠より江戸氏を改め其米邑喜多見の地名を以て氏

喜多見若秋守勝重と云ふ小田原没落の流遊家なり御當家ニ属し喜多見
樓下江ノ浦當家ニ居城の地なるを以て喜多見と云ふ地を改めし勝重の二男喜多見
五郎左衛門重圓其子若秋守勝重と云ふ地を改めし勝重の二男喜多見
重政より遂其家滅す喜多見氏建立の寺院なりとのみ
天神森 慶元寺の前小高き岡あり
北見氏陣屋の跡なりと云
歌枕天神と号し
奇枕の采由 天王を相殿とせり
相傳往古澤庵和尚環南宗寺ふ
勸請せしれと兼應年間喜多見久太夫重勝大坂あり

項神木の梅樹と共ふこの地は移し自の園中ニ勸請を天神
森其田跡なりと云神影ハ画像なり古土佐の筆と云後故
あり此地石井兼重の家ニ傳へ梅樹も又自庭前ニ遷りたり
一後兼重の子通兼と云人大藏村の永安寺ニ安置せり

なり故ニ永安寺ニ神木の若木ありと
除蝮地神符 北見村の内宿と云る地ニ住る農家存藤伊右衛門
某家ニ傳へ毎歳四月八日は此神符を猪人ニ与へ蝮蛇に
殺れし人此家ニ至り禁呪を乞へハ忽ち之を痛を去毒を消

甚奇なり其神符ニ永祿二年未九月廿日存藤道善
藤原忠嘉再改之と注したり

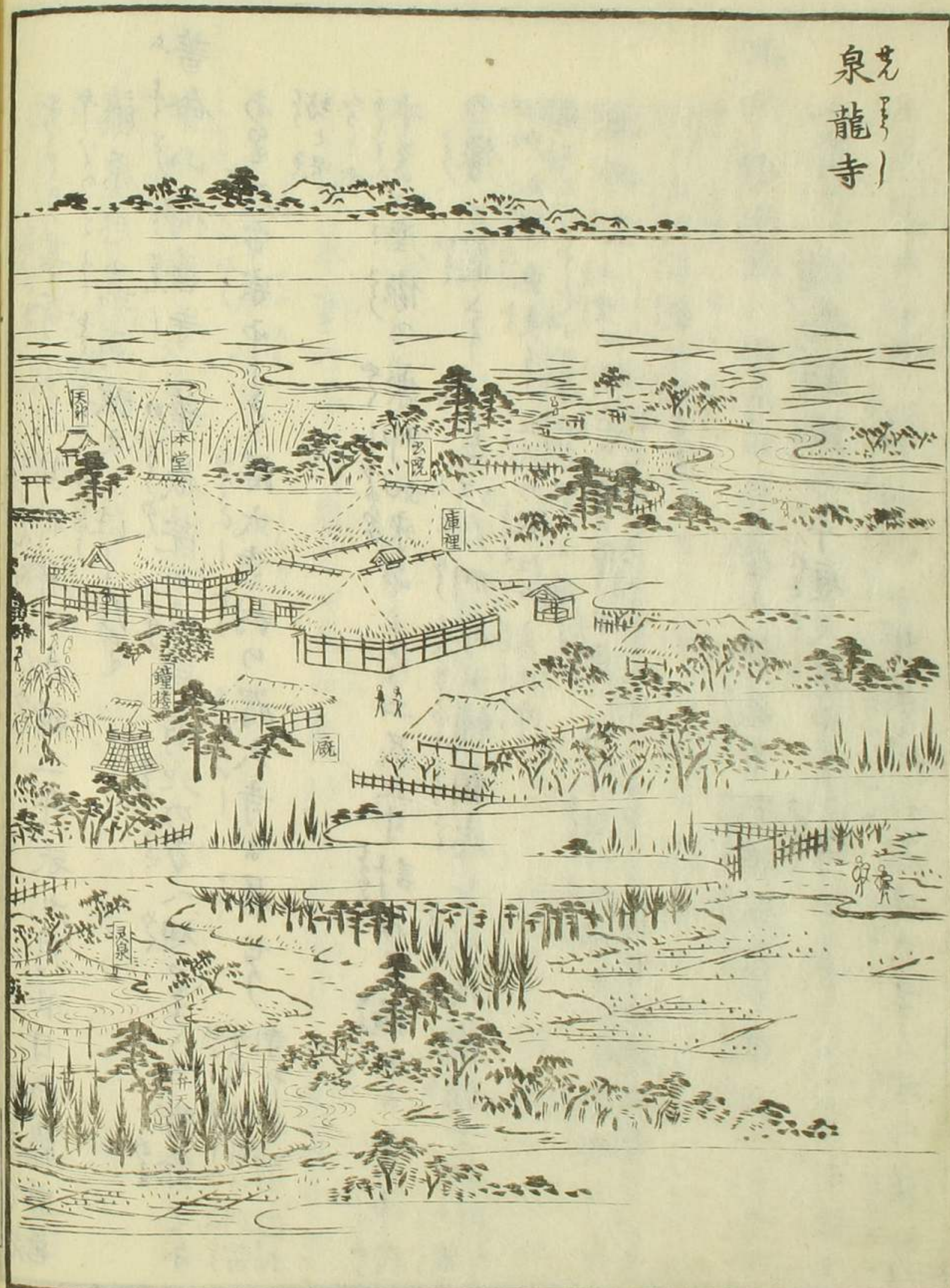
普命山禱善寺 華藏院と号同所北の方へ廻り三町餘あり
あり天台宗中々深大寺村の深大寺ニ属せり
氷川明神の別當
寺やと昔ハ宮本

本座の像の薬師如来あり二尺五寸計あり脇士十二神符
の像を置り往古江戸刑部少輔頼忠を以大檀那と云
江戸太郎重長より五代の孫江戸彦次郎
常巻の子やと小田原北条家は属す

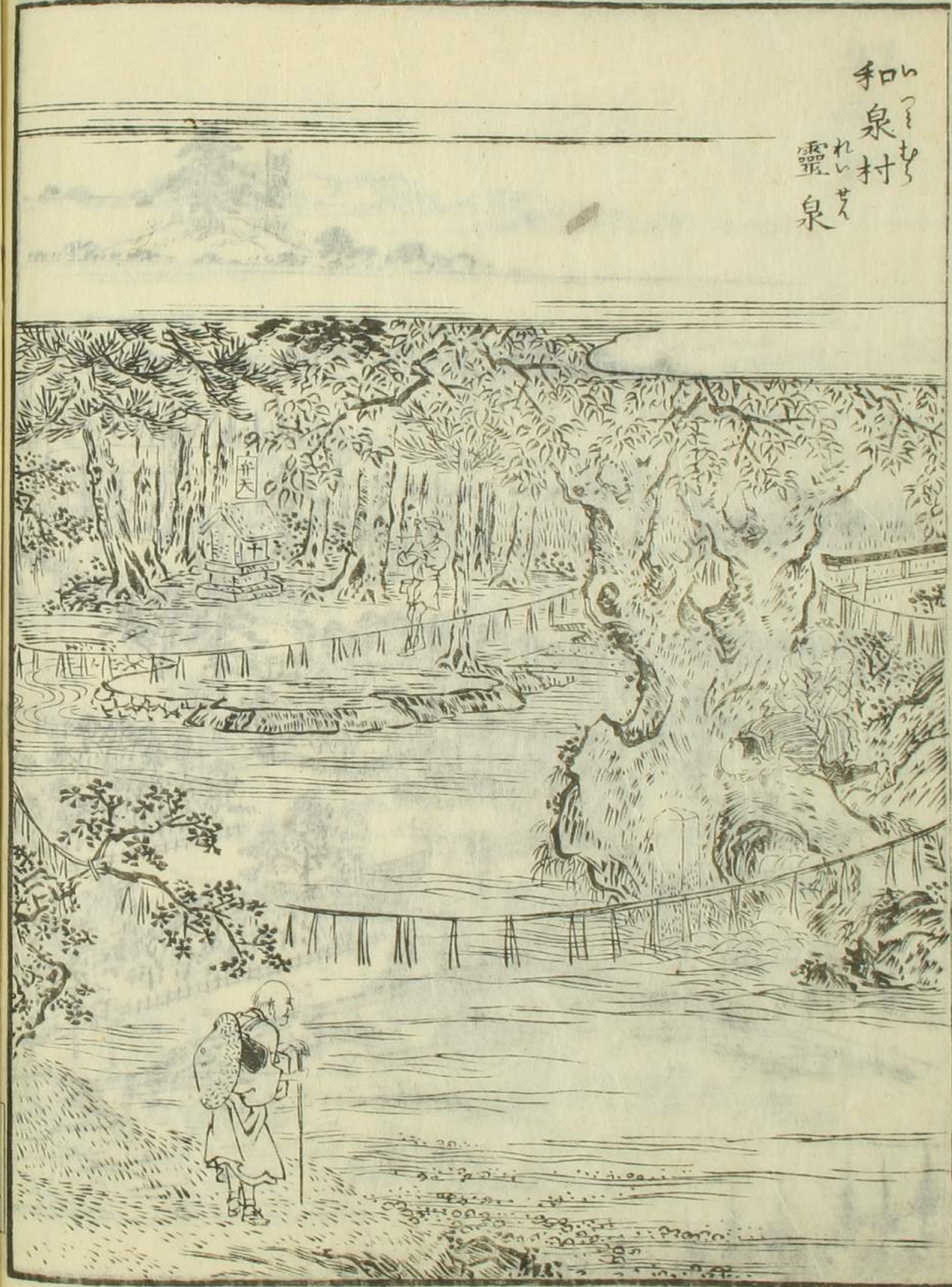
薬師堂 本堂の前左の方あり立像一尺八寸計の本像中
故道俗宿薬師や茶と
作者あり左

氷川明神社 同所の左に並み禱善寺別當奉祀を祭礼ハ九月十
八日なり相傳勸請の年歴久遠なり詳ならずと云ふ永祿十

三年庚午四月江戸刑部少輔頼忠社を建立せし頃の梁牌



和泉村
靈泉



一枚當社に存す
寛永二年戊丑五月江戸氏の遠裔喜多見
勝重當社を重建せしり

梁牌銘曰

別當宮本房

代官 杏取新兵衛

奉 聖主天中天 加陵頻伽聲
再造水川明神社 頭一等敬禮
哀愍衆生者 我等今輔賴忠

大工石渡
鍛冶正吉

同背面曰

于時永祿十三庚午歲卯月二十七日

武州下多東郡中丸江喜多見村

江
石華表 左右石柱の美應三年甲午九月喜多見氏久太夫重勝同五郎左衛門
重恒等建立せり
馬頭觀音堂 華表の右の方にあり喜多見重勝の乗馬の斃れしを
埋藏し觀音を崇むるとり
戸遠江守旧館地 水川明神の社地より一丁計巽の方小
篠の隈雜乃を名づく今ハ除地とす延文三年十月十日

竹澤右京亮と共謀と矢口の渡中へ新田左兵衛佐義興と
亡したり江戸遠江守是なり其の弟二巻矢口明神の

雲松山泉龍寺 氷川明神より八町を隔て西北の方和泉

村あり曹洞派の禪刹なり相州高座の宝泉寺に属せり

本寺釋迦如来の坐像ハ八寸計あり脇士を阿難迦葉此

像を置くも脇檀は聖觀音の像を安置せ良辨僧都の

作ありと云當寺ハ良辨僧都の草創なり往古ハ法相華嚴を

兼く大伽藍なりとあり中興を鏡叟瑞牛和尚と号し相傳

孝謙天皇の御宇天下大旱暵す依く良辨僧都請雨の

法を修せられ奇特あり清泉湧せると云即門外南の方ハ

有る靈泉是なり此地と和泉邑と名けり此清泉は又小田原

靈泉徳門に并び右の方ハあり觀の樹根あり湧出

沸く此池水つる早暵を枯らす此近里悉く耕

田の用水ふ引とせし寺号も此靈泉に依く名付と見え

池の中島ハ蛇形の弁天の像を安せ宮居

經塚寺ハ後の方用水堀を越く一丁あり良の方畑の中あり少き岡の

明應六年己丑月十六日あり又一ハ上は梵字を刻し下は六字名号を記し左右ハ

松本山廣福寺 昔ハ稻毛山と号し菅村の内府中往來の

道右の方四町を隔てあり新義の真言宗なり三ツ瀆の

高勝寺に属す本寺五智めずハ座像九尺計あり岡山を慈覺

大師中興ハ長辨阿闍梨と号し安貞元年丁亥

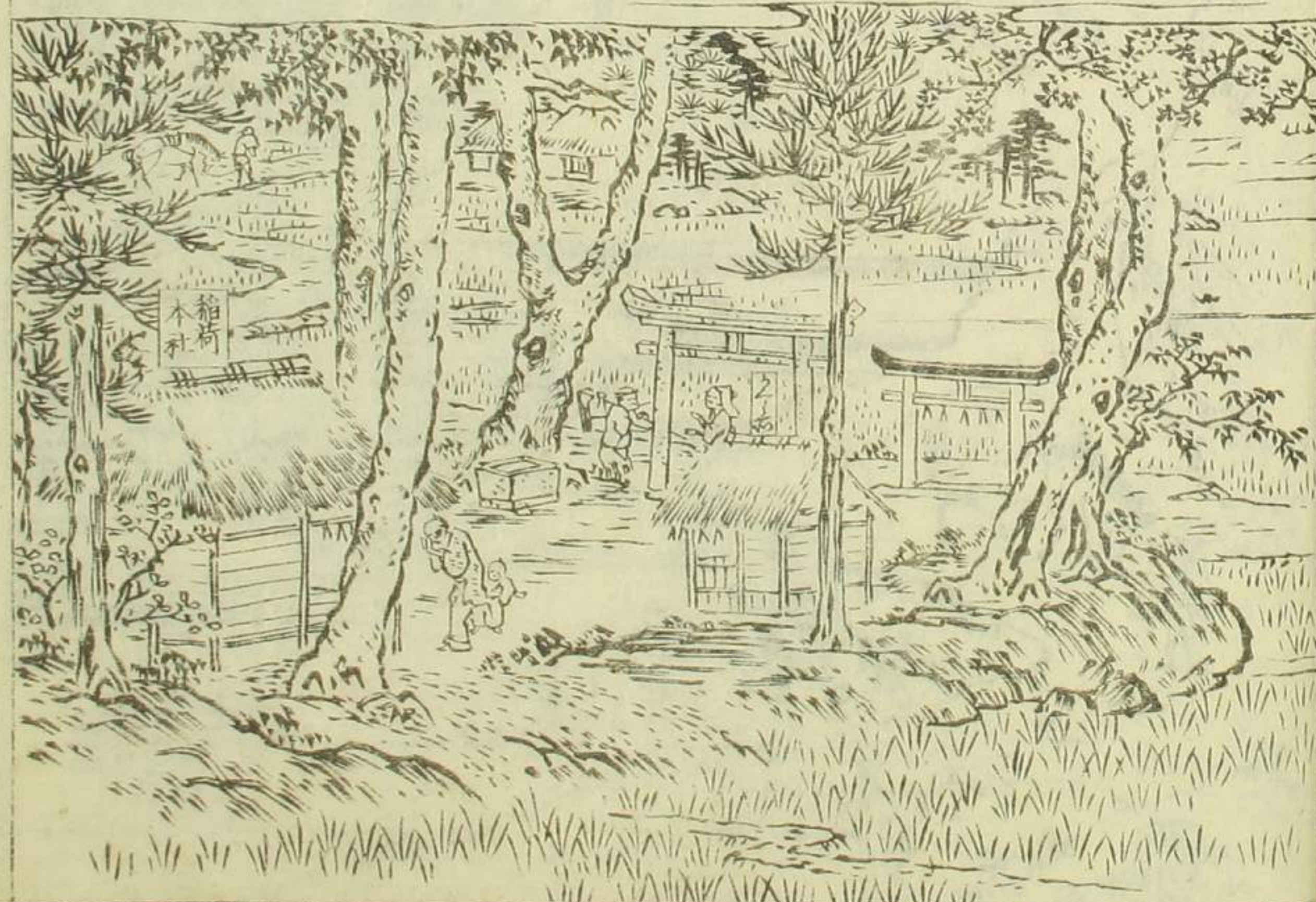
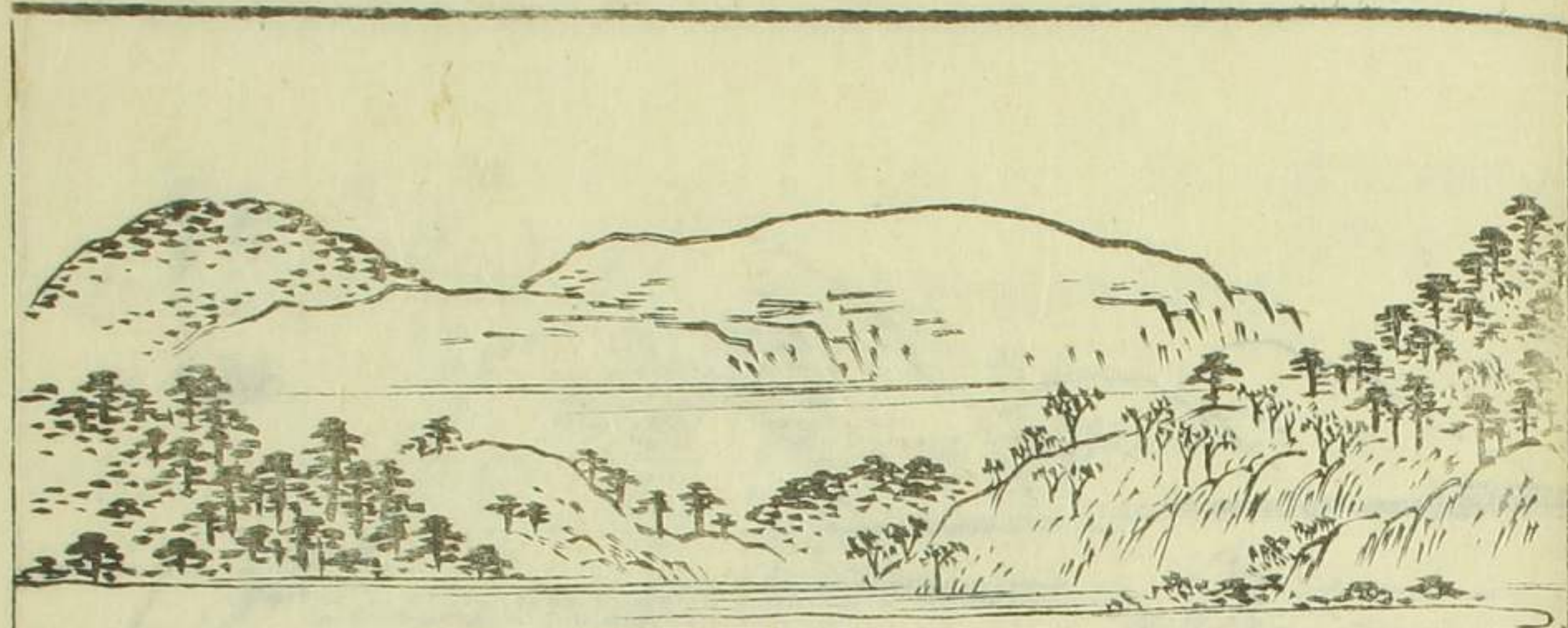
觀音堂本堂は後の山の上あり本寺の觀世音の像五寸あり此堂中

重成の肖像あり重成以下の位牌を置く

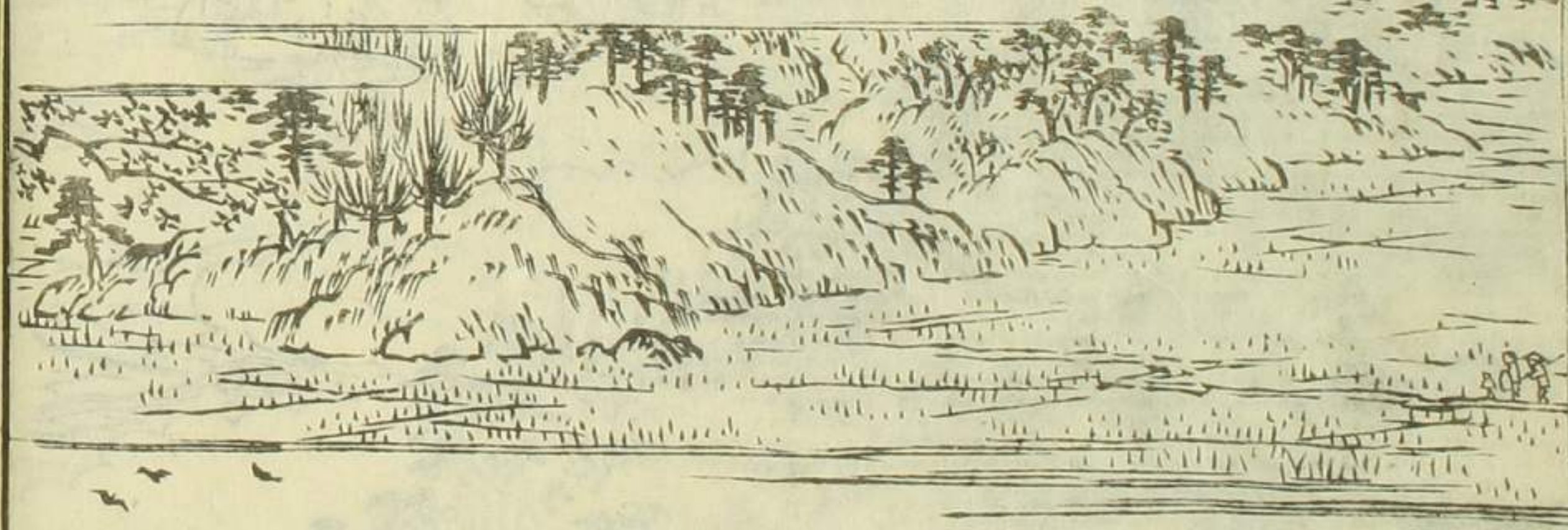
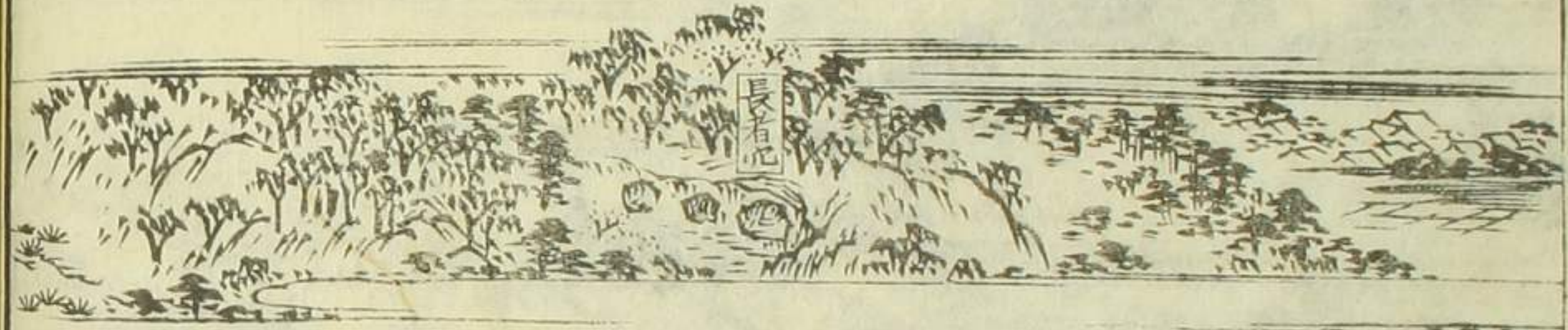
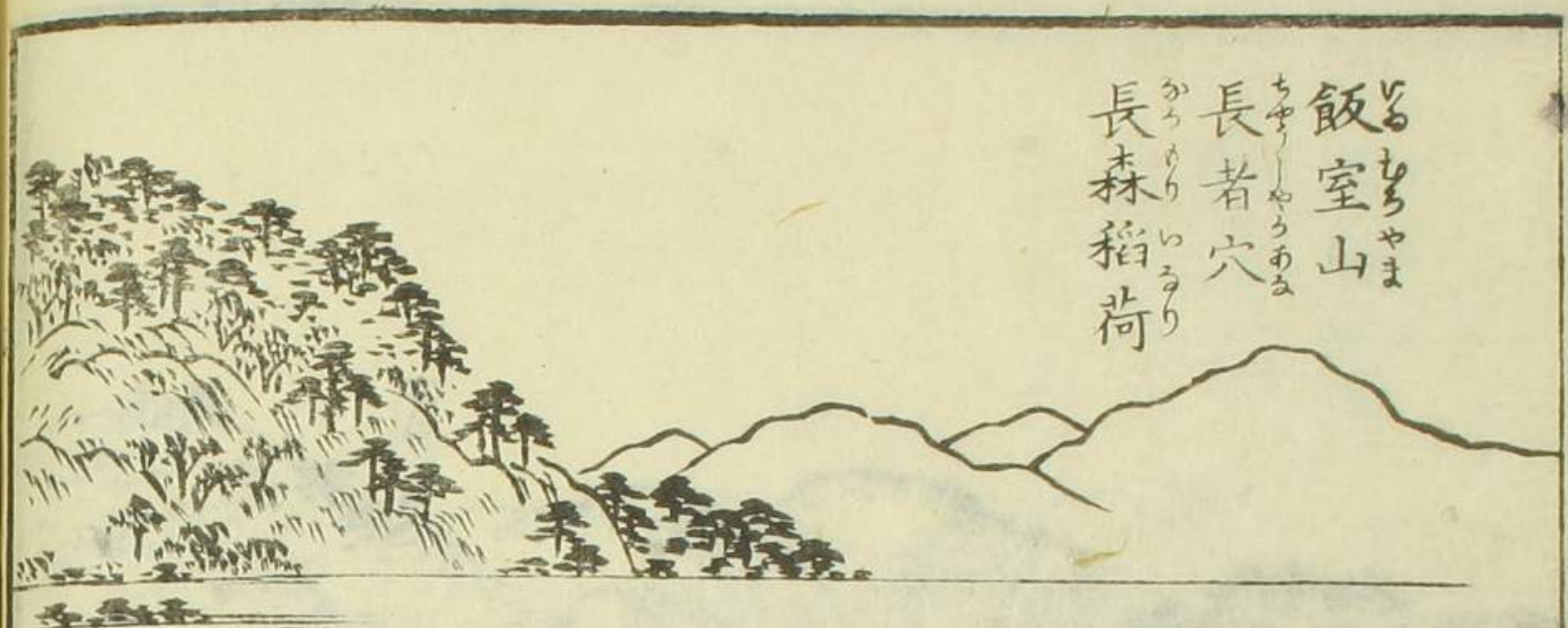
稻毛三郎平重成禪門法名道全名の上丸の中ハ上羽蝶の

元久二乙丑年六月廿四日

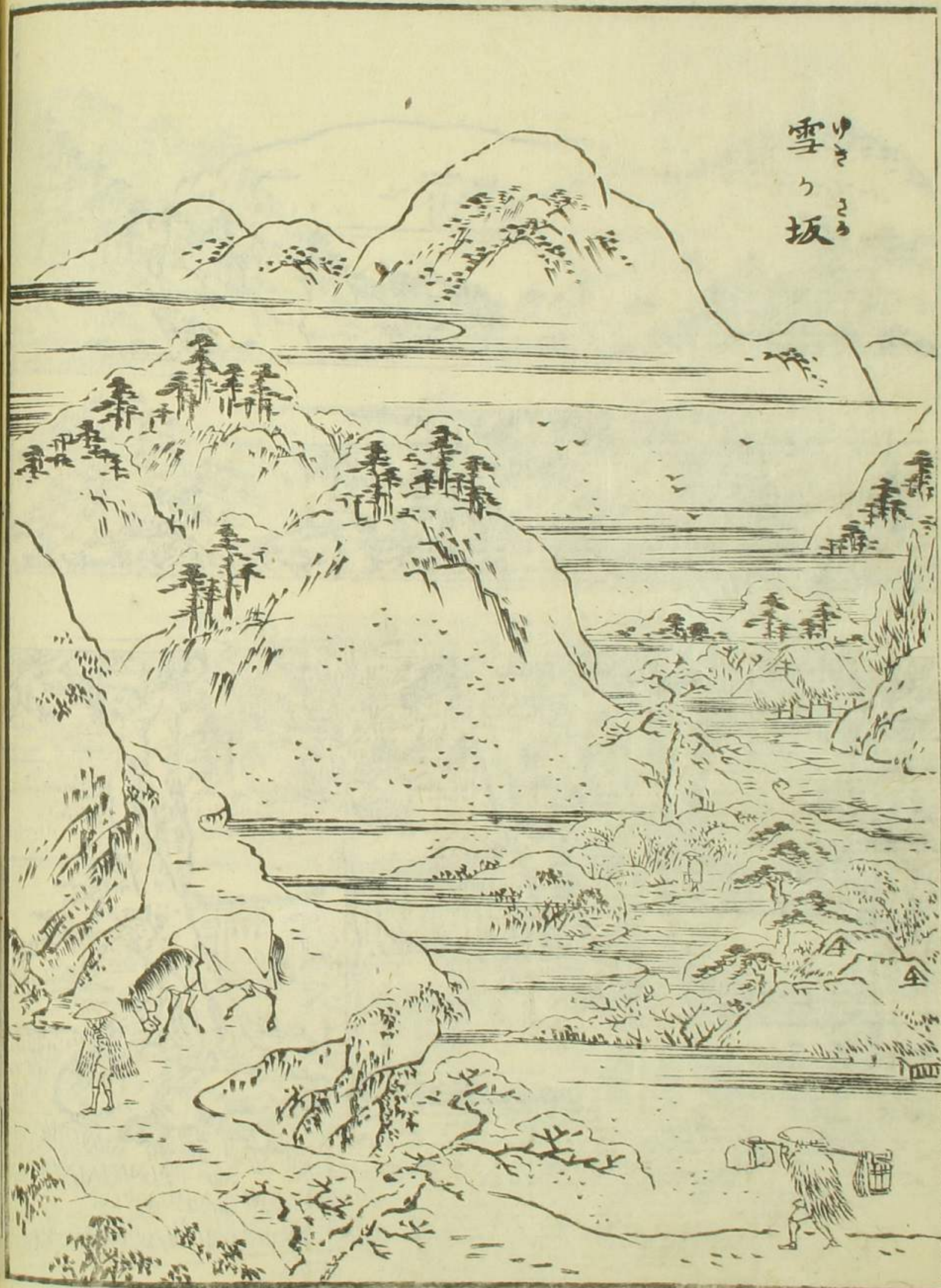




飯室山
長者穴
長森稻荷



雪ヶ坂



其餘重成の父小山田別當平有重法名寂照同舍弟榛谷四郎平重朝法名諦悟
同朝の榛谷太郎平重秀法名蓮厨同小次郎平重秀法名如月一子小澤次郎
平重政法名真悟等以上五人の靈牌ありつと元久二年し丑六月二十三日を
又同日形を注す追て考ふ
月忌日を注す追て考ふ

按元久二年六月北条時政の室牧の方小山朝政を誣訴を請け重忠父子を
誣せしむと計議あり同北二日由比濱に於て小山朝政を誣せしむ同日申刻二侯
河小右の重忠愛甲三郎季隆を前中として誣せしむ後小次郎重秀ありし
郎後等自害せしむる北三日又鎌倉中騒動を三浦平六兵衛尉謀く榛谷四郎
重朝同嫡男太郎重季次郎秀重等と経師の谷は誣せしむる道大川戸
三郎の誣せしむる子息小澤次郎重政ハ宇佐美与一誣せしむる由東鑑
えとて何れも此時死せしむる重成の一族あり大系因東鑑等あり
重季とす同小次郎靈牌ハ重秀と一系因ハ重季重と作る考

一室圓如大禪定尼

建久六乙卯年七月十四日

か注せし靈牌あり寺僧も其人とあつとて東鑑に因り考ふ即稲毛
三郎重成の室なり明け
東鑑曰建久六年乙卯六月二十八日辛巳稻毛三
郎重成妻北条殿於武蔵國病惱太危急之由飛脚
到著下略息女殿
同書曰同年七月四日丙戌稻毛三郎重成妻於武
成國他界日來病惱頻雖加鶴療終被侵風病畢重
不耐別離之愁頗倦勇敢心忽遂出家云云

稲毛三郎重成墓

觀音堂の後の方山の上あり小き五輪の石塔あり半土中埋れり

當寺境内ハ櫻樹多く春時爛漫なり故ニ近邑の土人閑花の時を待湯く此地ハ至る宴を催し遅々々々春の日も夕暮惜く思ふなり

韋駄天宮 廣福寺の前の小路を隔て向の山の中腹あり廣

福寺奉祀するあり韋駄天の像ハ廣福寺の佛殿小安

置せり祭礼ハ九月十五日小修りす

按此地の小名を稻の目と称し或人云延喜式神名帳ニ武蔵國男余郡稻賣神と云云又神名帳頭註ニ稻乃賣神ハ稲田姫乃あり疑わらる當社往古ハ稻乃賣社なり後世稲田姫と韋駄天とを混して誤りたり

升形山 廣福寺より南の方の後の山を云稲毛入道重成居城此

旧趾中々山頂八町四方あり外ノ形状を云此山あり号々

重成ハ小山田別當有重の子北条時政前腹の女の聲なり

秩父大夫重弘ノ甥重忠從弟中々頼朝公の幕下小屬なり

稲毛の地と所領とも然し重成ハ重忠と日頃不和なり牧の方也

共ニ時政ニ諛しこれハ元久二年乙丑六月廿二日重忠野心此企

とて時政勢を向けく畠山一族を誅伐を重成親族の好を忘れ

重忠と諛害せり天道ノ肖の罪道々々終ニ和田義盛大

河戸三郎宇佐美与一等を以て武蔵國へ發向せり同廿四日

稲毛入道父子を誅せり東鑑北条九代記等の書ハ云

たつ稲毛と稱す地尤廣大なり登戸の渡より川崎の邊まで地甚く稲毛

下野守伯父甥の所領稲毛庄十二郷あり又小田原記ニ信玄江戸を廻りて小田原へ

押寄むとむとのみ茶下ハ夫の渡を舟にて稲毛の平間と云地ハ長尾村

十六郷と追補すあり又永祿二年北条家の分限帳ニ竹内本月小倉長尾村

田中分鹿島田端宿中田分鹿島田中村分矢向平間孫屋経久未長久本小田溝口平の村

高田等ハ稲毛の内と證又同項北条家の武士行方輝明連の家

臣田島兵部左衛門之房横山式部弘成駒林圖書定朝等皆此地に伴

飯室山同所左の山嶺中々山頂小七面富士浅間を勧請す

長者穴 同山の東の裾あり入口ハ一間四方ありなれども窟中甚廣く

同程の巖室ニ川並ひあり土人も名義をあるすと云

長森稻荷社 同所四丁計と隔て菅生村府中往来の街より右の
方蒼林の中より同所日蓮宗安立寺奉祀せし

祭神長森稻荷明神右星夜明神左海光曜明神 以上
三神

券族の神長現金狐神渡一銀狐神阿通相狐神阿参玄狐神阿権白狐
神以上五神

相傳元祿十年伊豫國宇和島の浪人相馬左仲とてこの

花浴より一頃鳥羽繩手にて一人の美女と逢ふ其美女の云く

我ハ伏見藤森長森明神の臣渡一銀狐神と称せりとて靈尔

あり翌の十一年の夏四月廿日又神告ありと任せ江戸小至り麻布

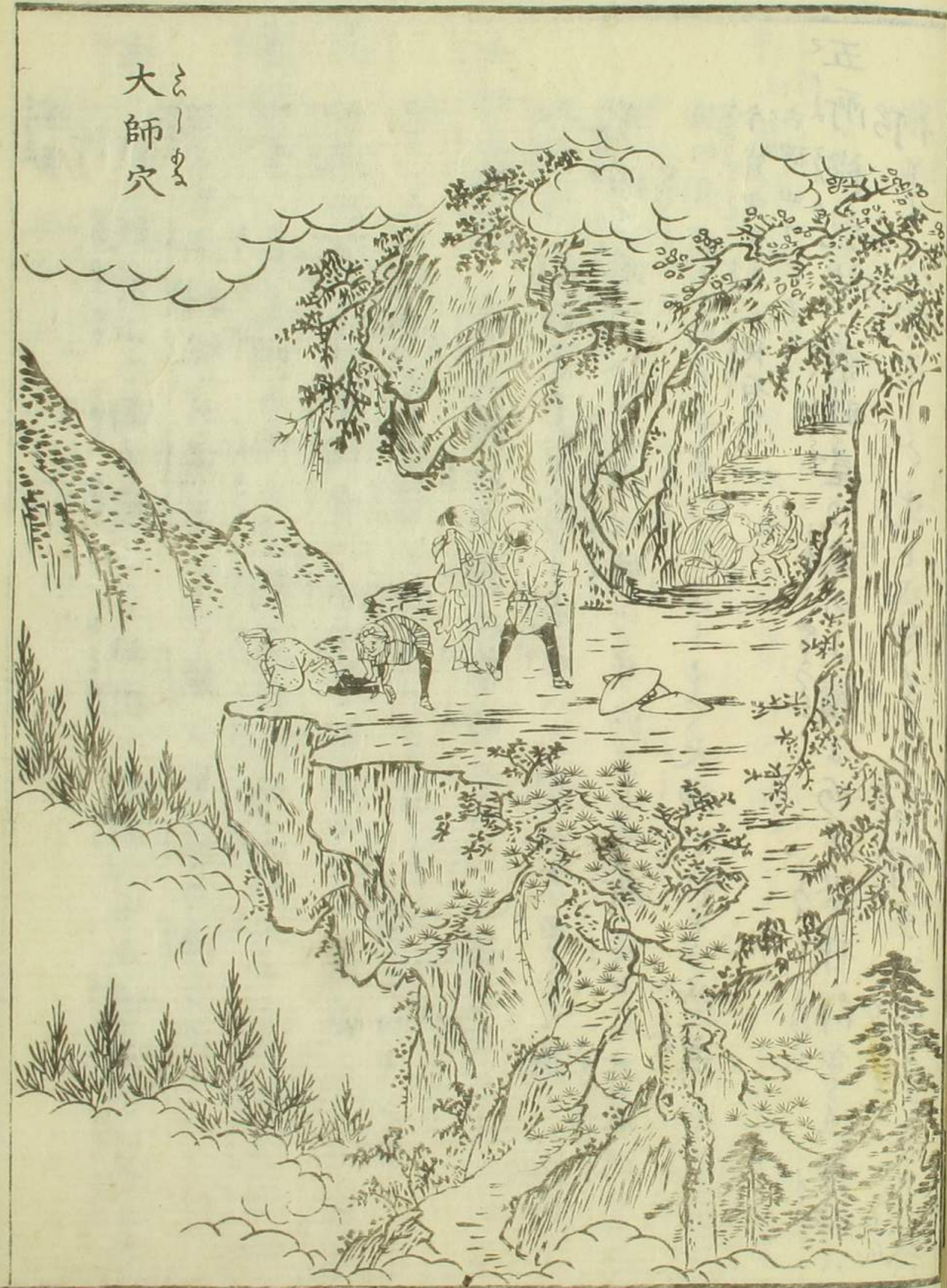
日ヶ窪に住る中原与兵衛といふ者の家に勧請なり大奇瑞

靈驗あり然小正徳五年の夏の頃左仲没するの後一子如藤次と

て者此御神と讓請く多信を終小元文五年十一月安立寺の

主僧日現上人此地に遷しその法華勧請の御神とな

せり 中原与兵衛の御神あり有偶次兵衛といふ人此神とて多信一稻穂あり
銀封御羅等と感得せ奇瑞あり今こり安立寺に収めく稻荷の



大師穴

室敷

雪^{ゆき} 坂^{さか} 飯室山の南の續^{つづ}り曲折^{まが}して西へ下る坂路と云登戸の

辺^へより平村^{ひらむら}辺への通道なる頗る美景の地なり

薬師堂^{やくしどう} 長尾村の内二子街道の右側山の上より本^{ほん}茶師

如来の靈像^{りやうざう}ハ影向寺の本^{ほん}と同一本^{ほん}なりて慈覚大師の彫造

なりと云^い秘佛^{ひぶつ}なりて常^{じょう}小^{せう}拜^{らい}するなり

大師巖室^{だいにんいわむろ} 土人^{とにん}大師^{だいにん}穴^{あな}と称^{なづ}ふ薬師堂の山の後西向のありあり

入口^{いりぐち}ハ一間四方をわたりあり空中ハ二間四方なりて高サも相同^{おなひ}

享保の頃一人の山伏心願のより^{より}なりて断食^{だんじき}なり此窟中ハ一七

日の間^{あひだ}竈^{かまど}なりと云^い傳^{つた}ふるのより^{より}なりて大師と称^{なづ}ふる所謂^{しゆゐ}あり

今窟中ハ青^{あお}石^{いし}の古碑^{こひ}四五枚あり

五^ご所^{しよ}権現社^{けんげんしゃ} 薬師堂の南の山續^{つづ}り祭神^{まつりかみ}詳^{しょう}なり神^{かみ}躰^{たい}ハ

何^{なに}れも座像^{ざざう}なりて丈七八寸なりて烏帽子^{かぶと}を冠^{かぶ}りて或^{ある}ハ

僧形^{そうぎやう}のものありて都^{みやこ}て五^ご躰^{たい}なり

正月^{しょうげつ}二日^{ににち} 桃樹^{ももじゆ}の枝^{えだ}を伐^きて弓^{ゆみ}と^と箭^やを放^なげり旧式^{きうしき}の祭^{まつり}也^{なり}

杉山明神祠^{すぎやまめいじん} 相州厚木街道溝口の驛^{えき}より左より入^いり十六町^{じゅうろくちやう}なり

南の方久本邑より上^{かみ}の宮^{みや}と称^{なづ}ふるハ別當^{べつたう}龍^{りゆう}臺^{たい}寺^じ

慈覚大師の作^{つく}り西^{にし}の山續^{つづ}りありて其間^{そのあひだ}一町^{いちちやう}を隔^へつ下^{した}此

宮^{みや}も同一^{どうい}寺^じの堂^{どう}の左^{ひだり}の方^{かた}石階^{いし}の上^{うへ}より祭神^{まつりかみ}詳^{しょう}なり

以^も當社^{あたらし}ハ延喜式^{えんぎしき}内^{うち}同國^{どうこく}都筑郡^{つづきぐん}星川^{ほしがわ}邑^{むら}鎮座^{ちんざ}の杉山神社^{すぎやまじん}の

模^まあ^なりて祭礼^{まつり}ハ九月^{くがつ}廿九日^{にじゅうくにち}なり

稲毛薬師堂^{いなげ薬しどう} 野川^{のがわ}邑^{むら}の内^{うち}府中^{ふちゆう}往來^{わうらい}の道^{みち}より三丁^{さんちやう}計^{けい}西^{にし}よりあり

醫王山^{いおうざん}影向寺^{えいけうじ}と号^{なづ}ふ

行基^{ぎやうき}大士^{だいにし}閑基^{かんき}も其^{その}後^{あと}文德^{ぶんとく}清和^{せいわ}兩帝^{りやうてい}沙^さ再^{さい}興^{かう}あり

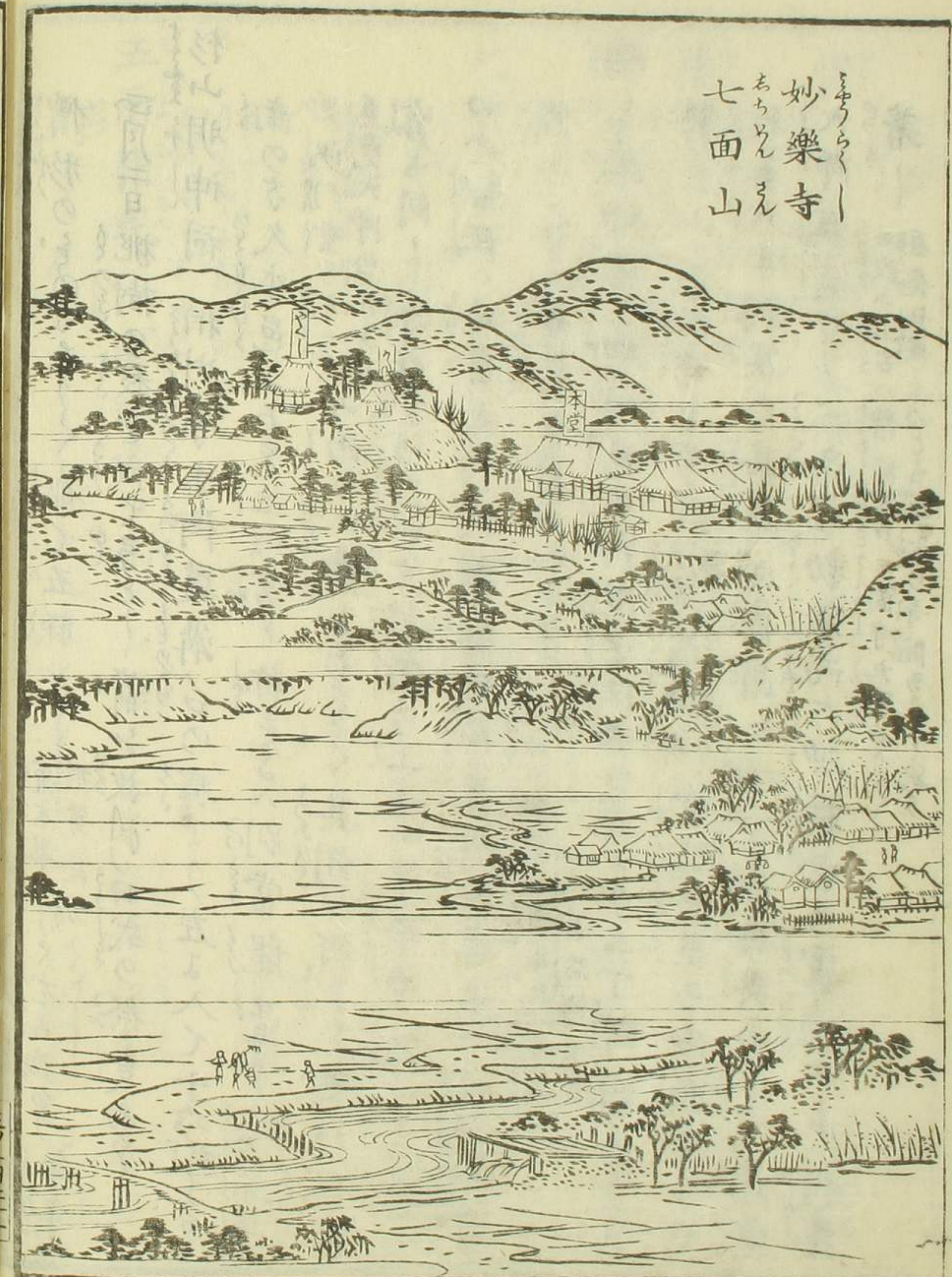
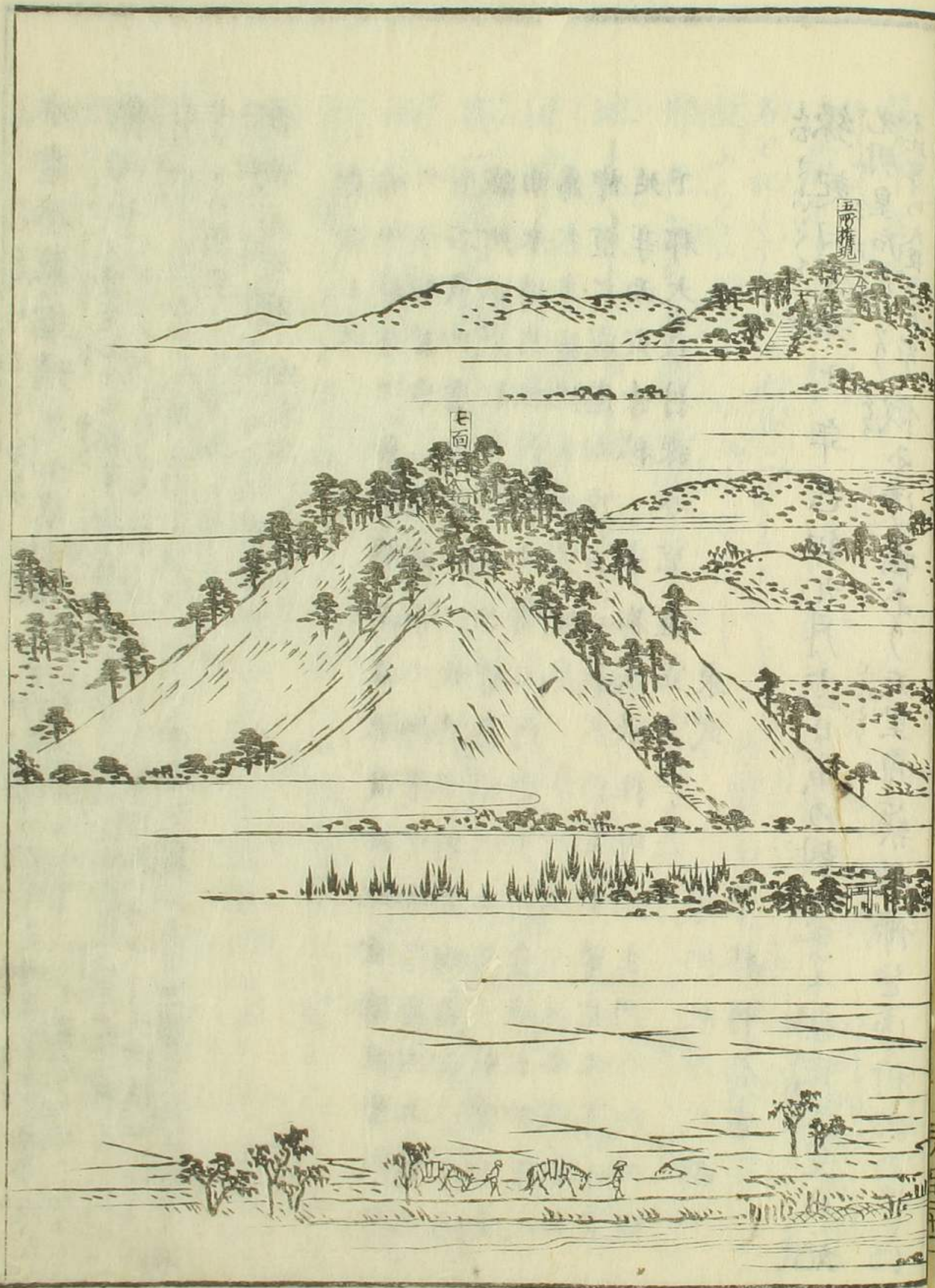
大師^{だいにん}修造^{しゆざう}せり三帝^{さんてい}の勅^{ちやく}願^{げん}兩大師^{りやうだいにん}構^{かま}營^{えい}の靈場^{りやうぢやう}なり

著^{あつ}し

此^{こゝ}敷^{しき}上^{かみ}古^{ふる}僧坊^{そうぼう}百^{ひやく}三箇^{さんかん}寺^じ九院^{くうゐん}あり

昼^{ひる}夜^よ仕^し候^{こう}なり

盛大^{せうたい}の寺院^{じやういん}あり

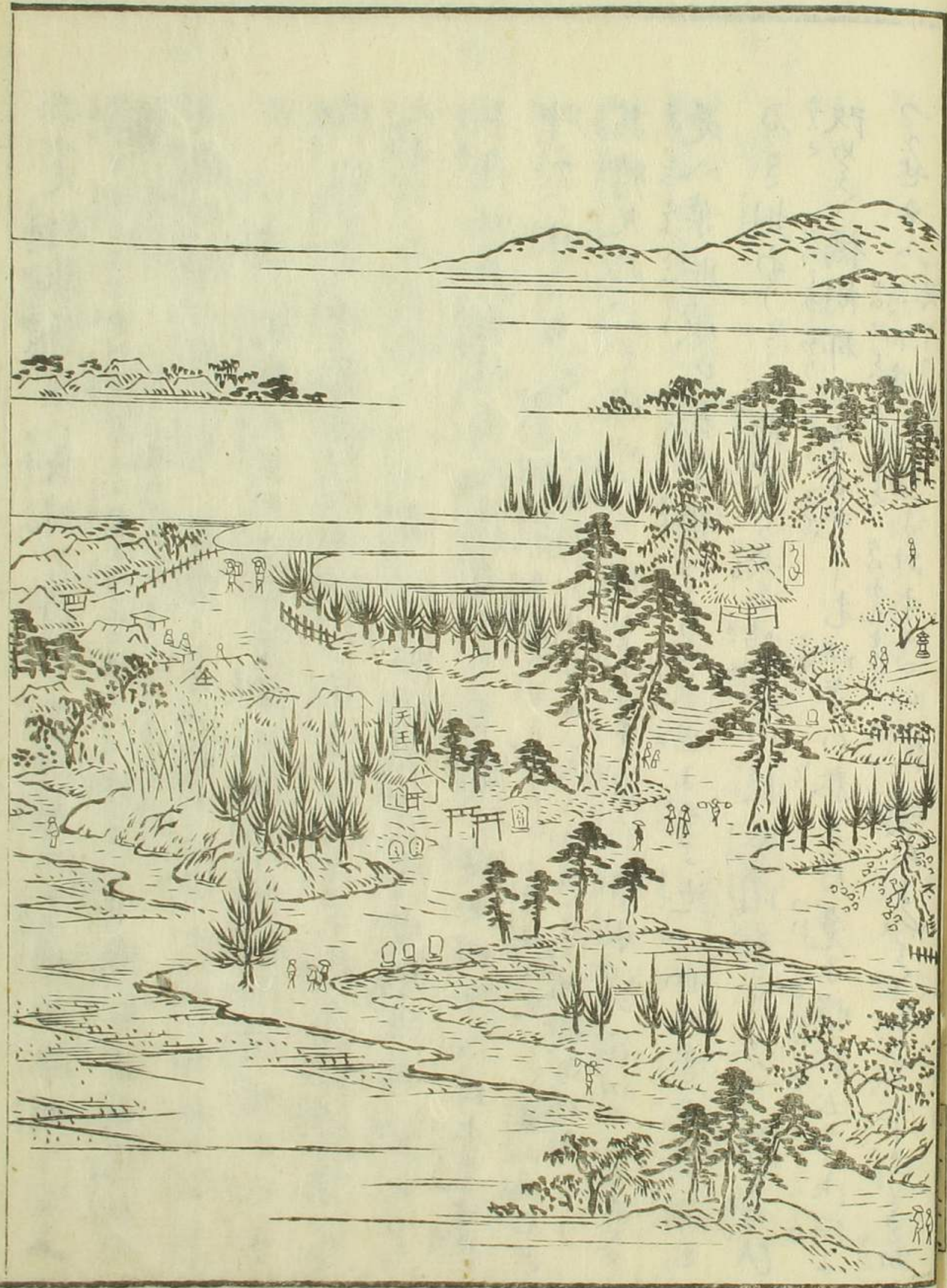


本堂本尊瑠璃光如来
 影向石 又佛足石とも稱す堂前右の方あり
 計の四なりあり常は水を湛へく上小家根を覆ふことを醫王水と稱す
 影向石之碑 其文左のこと

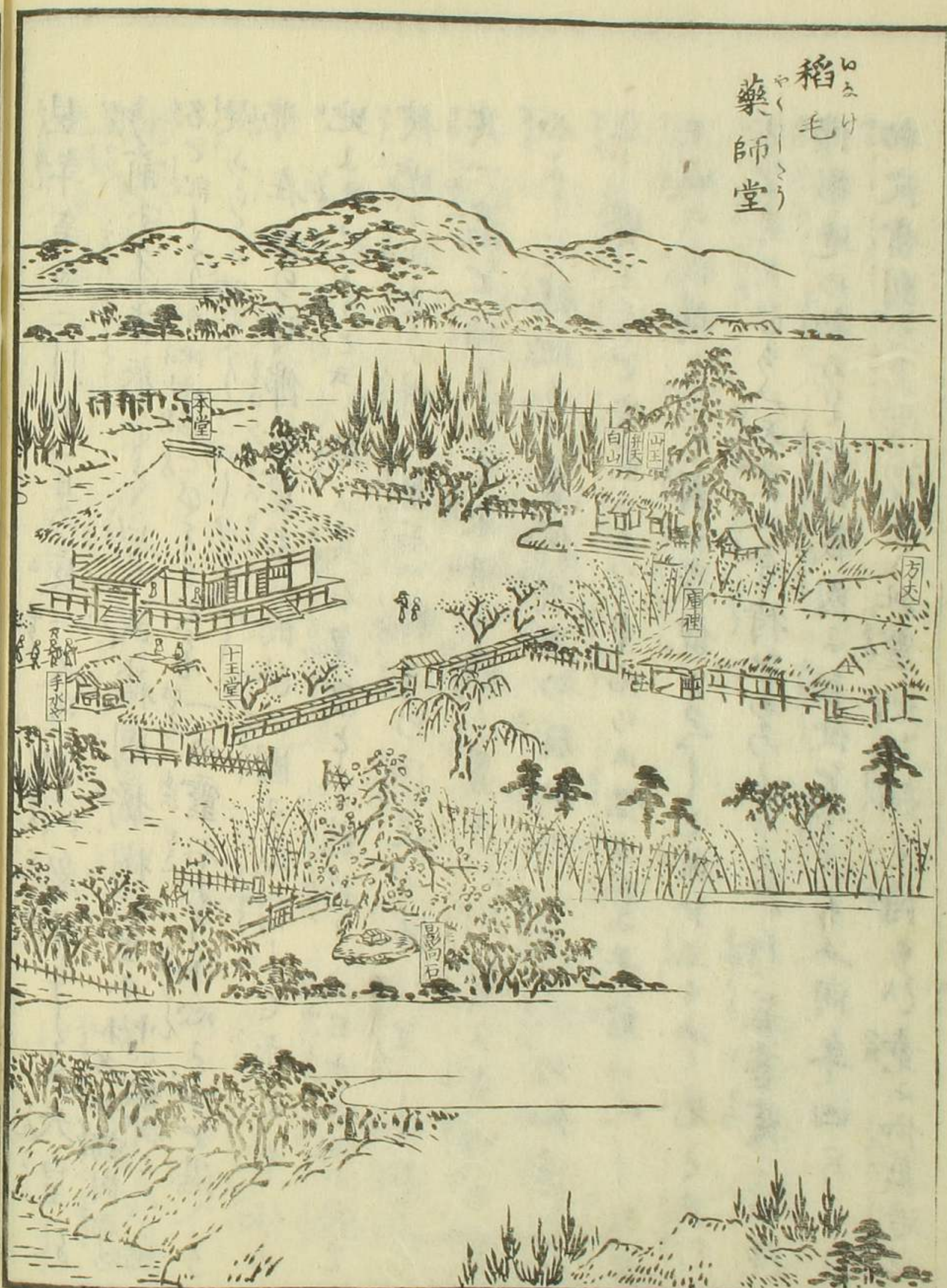
影向石碑
 鳴呼神道之妙聰明正直也哉此地堂構往昔天平
 有石象凹清泉常滿一帝飲其水則沈痾盡愈人々至
 誠所以感於神也矣余曾患眼也多年矣醫藥極術
 而未得其驗偶至此齋之則雙明漸愈雖未如平人
 焉大半獲快矣鳴呼靈泉之妙潤千累也哉敬拜
 神靈之感德而片石以識不朽且表尊信之志也
 延享丙寅季秋 直法眼掛川先生門人 和州城
 下郡大泉村森本 直法眼掛川先生門人 和州城
 東武 菊池政房代撰 平林博信書

縁起曰天平十一年己卯九月十二日寅の討ふ至る聖武天皇の妃
 光明皇后是なり 俄小沙惱あり天皇自薬師佛と沙祈念あはに
 不比等の大臣の二女あり

翌年辛辰二月十二日の夜一人の沙門忽然とて天皇此
 沙前小衣告奉りて曰く武蔵國橘樹の里小
 名と記し今此地名にひらりとて一の靈石あり中心は水を湛へり
 佛在世の時佛此靈石よ向ひ三國に飛行して永く有縁の
 地よ止るべしと云く然らば其石忽然とて飛行して此日本の地に移り
 彼地よ止まり件の靈石ハ釋尊の沙足を捧げ奉り大蓮花の
 其一葉を踏とめく末世は残り置る所實は奇特の靈
 石よして彼地も又靈佛安座の勝利なり早く一の伽藍を建
 立し醫王を安置し皇太后の悩立而平愈あり殊更
 王城の鎮護とて國土豊饒とて坐を立ちて見く其行
 方を見失ひて天皇此奇特をありて行基菩薩は法師
 佛彫造の勅あり又武蔵國に勅使を下りて同年四月八日
 勅使當國小下向りて此靈地を探り得り竟に伽藍造立



稲毛 薬師堂



あり又行基菩薩ハ良材を得て某師佛の像を彫刻しあり
此地と云ひ五十余町其の方小倉と号す地一の池あり此間佛堂造立落成の
後橋樹郡の地を以て寄附しあり時天平十二年庚辰十一月
なり平賀文徳天皇の御宇に當り惟喬惟仁清同胞の太子
清位定の時慈覚大師惟仁皇子の法為ふ種々の祈ありて
天安元年丁丑の八月當山に勅使を立ちらるる堂塔法再營ありて
翌年戊寅初秋悉く落慶して舊觀を復も同年八月本寺を京
師より移しあり神皇正統記卷之六 神武天皇御宇 武烈天皇御宇 武烈天皇御宇 武烈天皇御宇
其時大師曰く我此山の躰を以て靈石靈水四の谷四の峯あり
是ハ葉胎藏の徳を備へて未世に至る迄二世の慈地圓滿を
るを相ありとて勅使と共に歸洛の後奏聞ありてハ天皇再ハ
改め橋樹郡を寺と充しむ此年の春三月竟に惟仁太子清位に
つせあり清和帝 是偏は此本寺の衛護のよとてあり

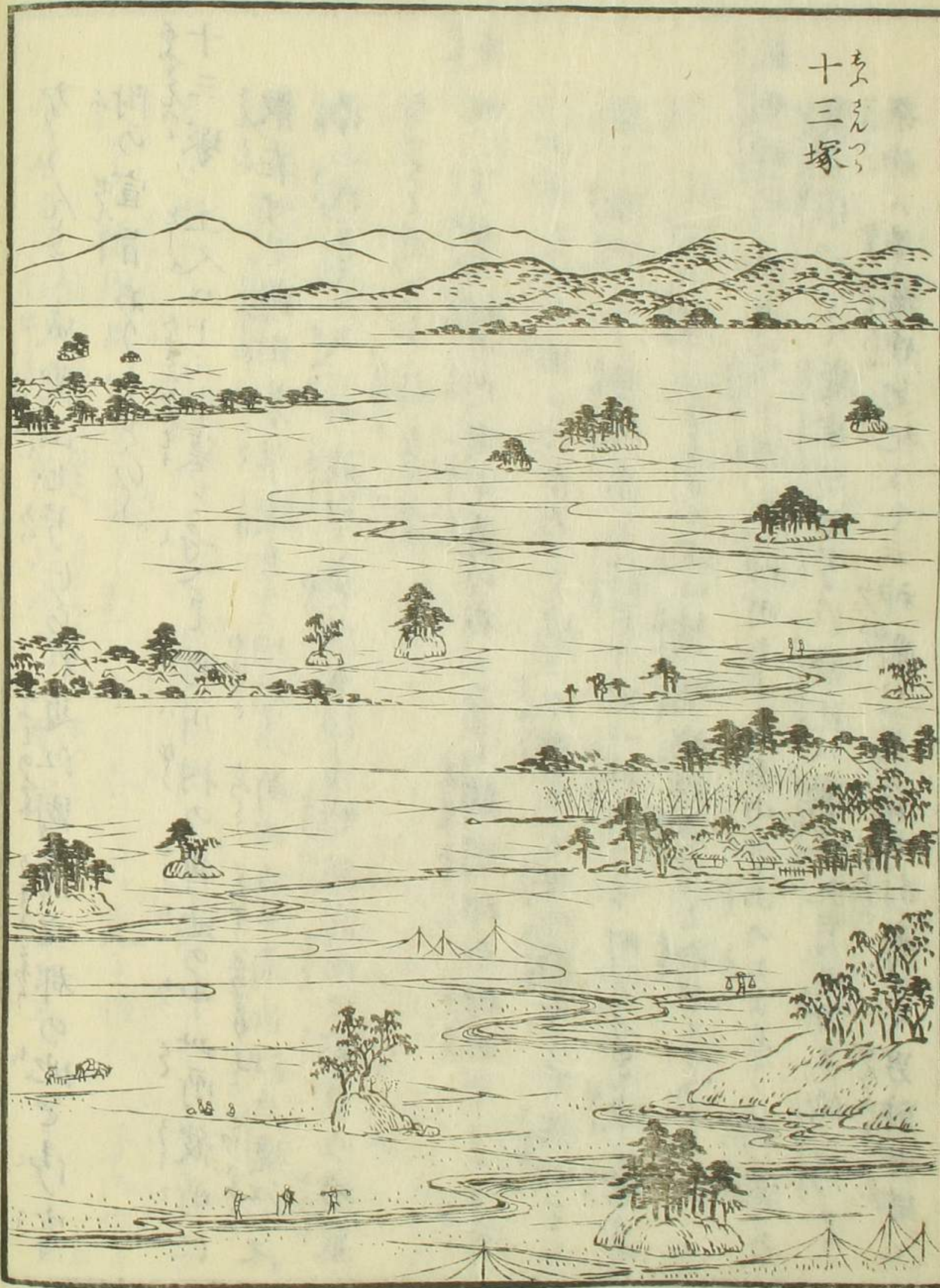
なりんと威徳山と号けられ近江國蒲生郡の地を清寄
附の宣旨ありと云ふ

十三塚 土人ハ十三本墓と号す野川村の耕地の中此所彼所に
散在せる雜樹茅草茂より相傳ふ新田佐兵衛佐江戸遠江守此
為小伐もく矢口の渡あり亡ひあり時随ふ所の家臣の墳墓
なりと云ふと詳なり

舟田 子母口村の内府中道の右よあり橋明神の神田なり長
二十歩をわたり幅十四歩ありあり水田なり舟の形ありて其田を
悉く陸田なり舟河原と稱す地ハ社あり十町をわたり東に當りて
今ハ民村の字とありて次の橋明神の奈下と合せあり

橋明神社 同所府中道より四町あり右の方山の上あり別當者
真言宗なり蓮東院と号し祭礼ハ隔年九月九日ハ修行す
祭神ハ弟橋媛と祀ると云神體ハ一尺三四寸計ありて男躰女躰二

十三塚



軀を安置せり

女肝ハ弟橋媛
男肝ハ日本武尊

勸請の始詳なり此地の人他邦へ

切らりあつた時を必先當社に詣り然して後發足せり此路中過り

とて大に恐怖せり

古文書一通

子母吾村の里正伊藤氏の家に蔵せり昔ハ波口なるなり此書より明けり

波口郷目録

一町 大戸宮 神田

二段 立花宮 神田

領家方 能登出作

宇田壹町四反

田壹町 散在

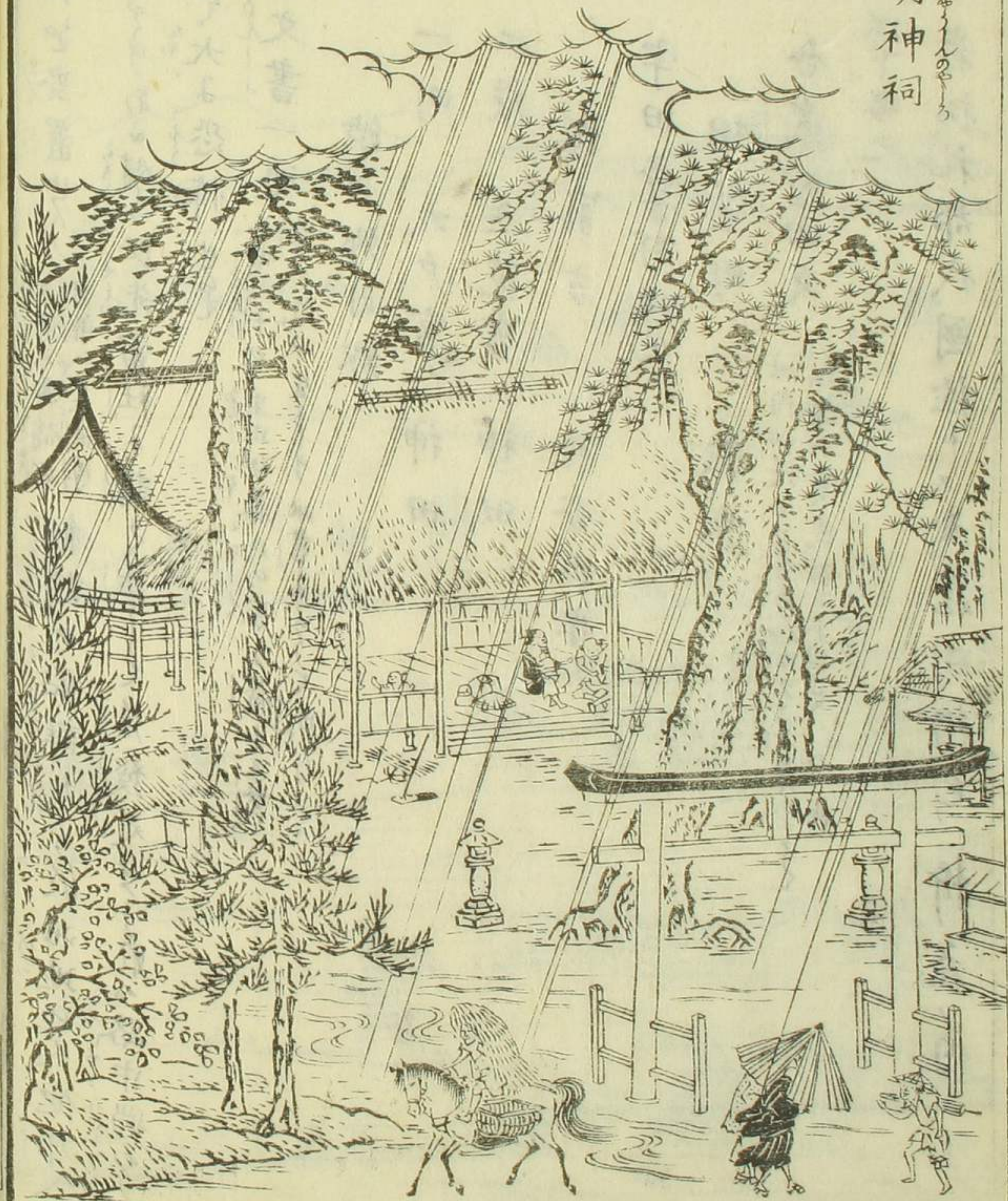
合貳町四反

此内四段小せきあんちりり免のてり
以上一貫貳百三十七文 分錢

以下略之

岩松孔那代國經ノス武藏國稻毛、新庄ノ内

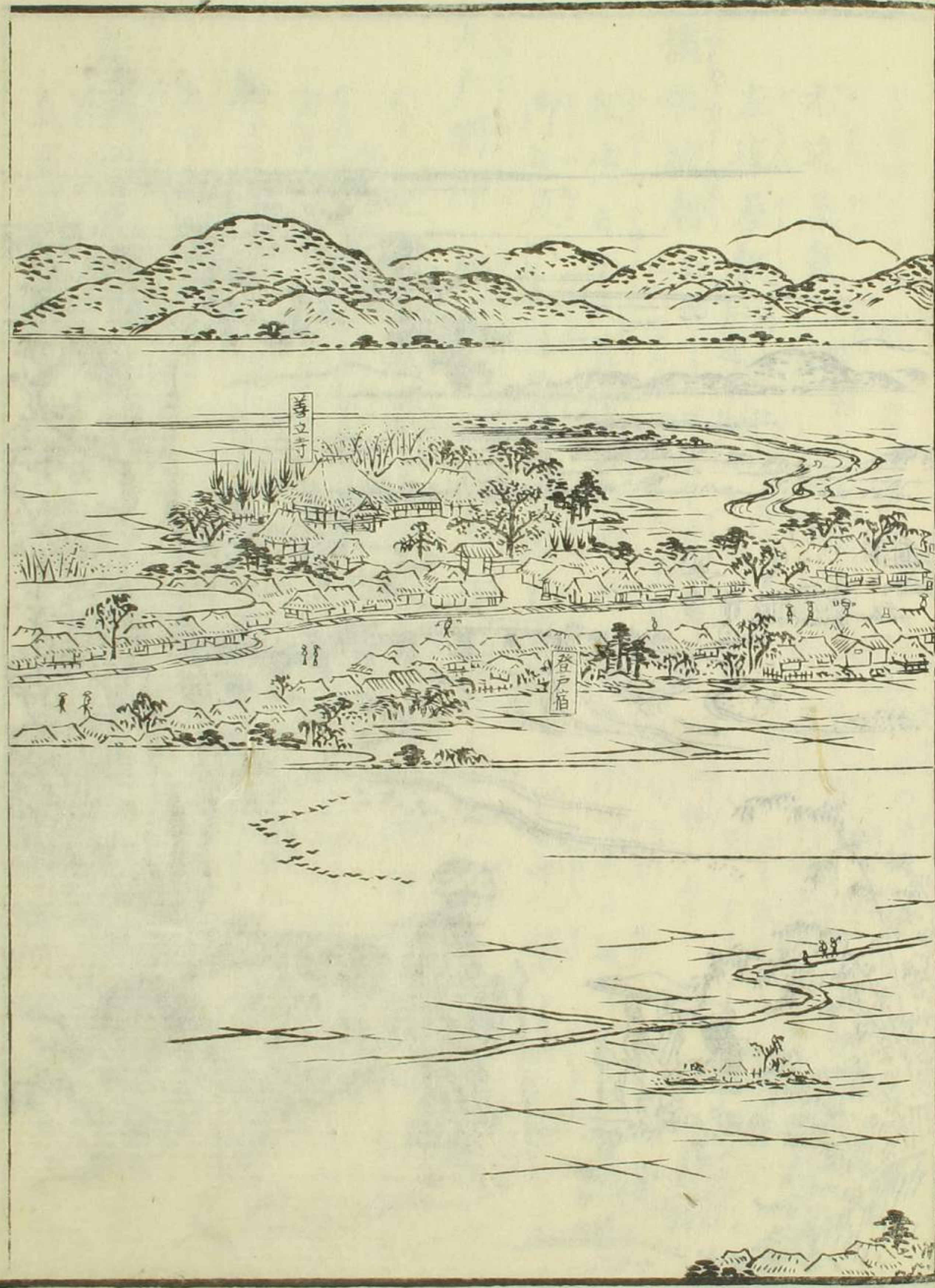
橋明神祠



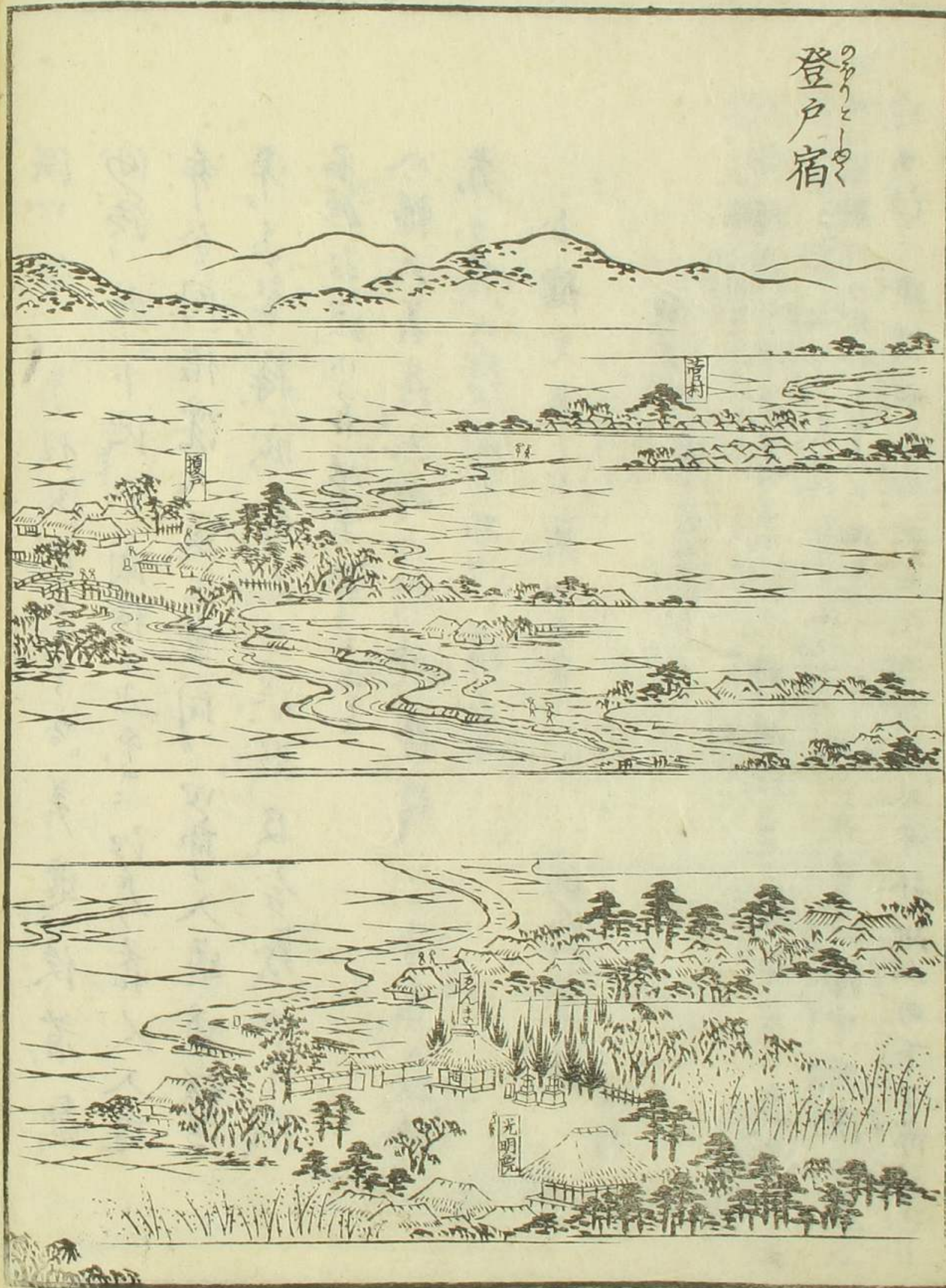
濃口郷、事任、仰下、る、差遣、使者、欲、
 沙汰、付、下、地、お、國、経、り、也、云、江、戸、ノ、薩、人、入、道、
 希、全、同、信、濃、入、道、三、貞、同、口、節、入、道、道、儀、
 率、多、勢、據、城、廓、至、是、非、擬、及、合、裁、
 不、能、お、渡、
 八幡大菩薩六所大明神、序、
 有、
 至、德、元、年、七、月、廿、三、日、
 河、原、
 在、判、

進上
 奉、
 不、

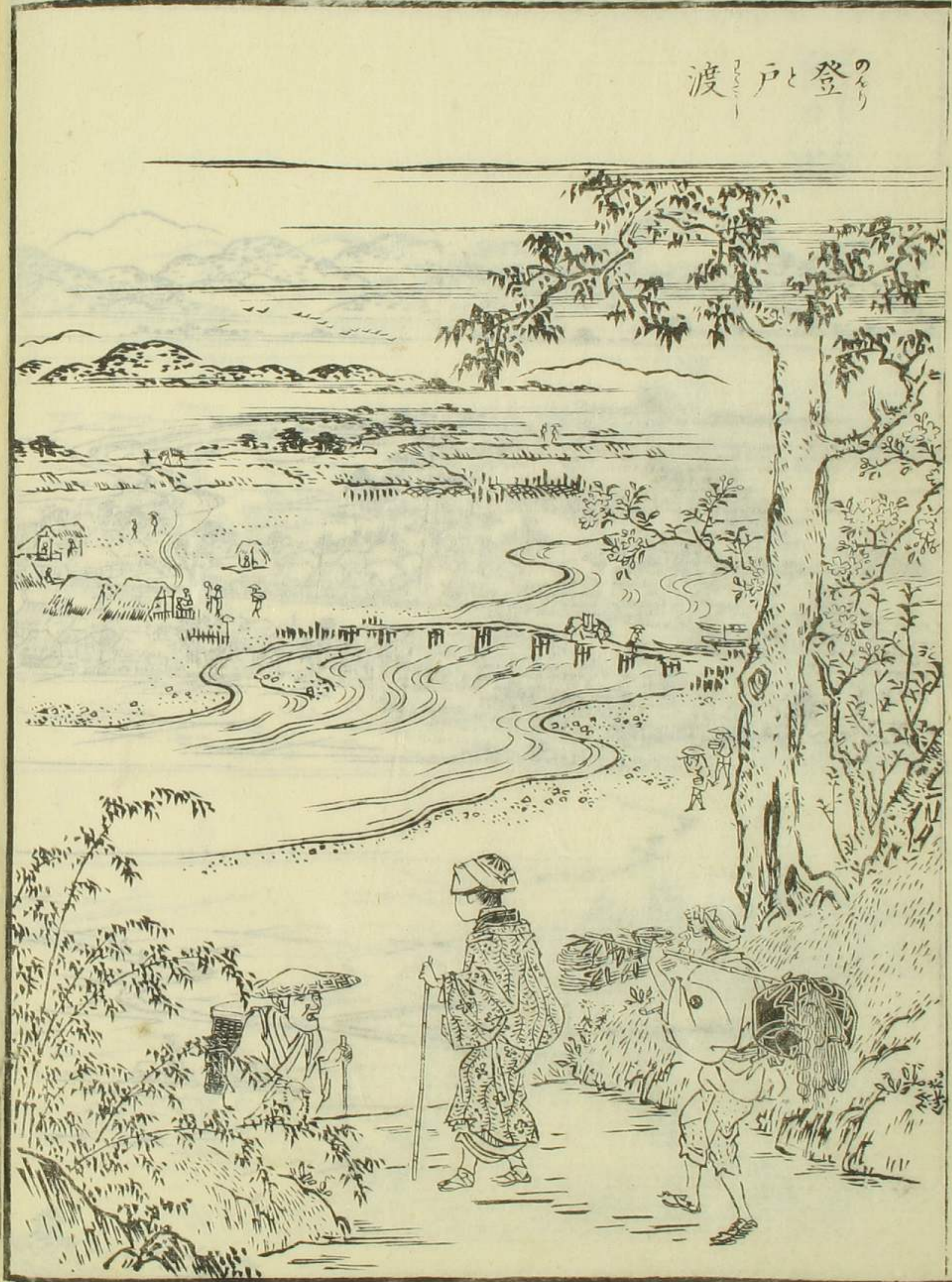
相傳、往、古、日、本、武、尊、東、征、の、時、此、地、より、發、
 先、
 呂、川、神、奈、川、の、地、共、
 逢、
 項、橋、姫、の、序、衣、及、
 武、尊、此、海、中、風、浪、の、難、
 此、山、の、下、
 漂、着、せ、



登戸宿



登戸と渡



とも云てその説一なるに
舟田もその所船の着く

右近屋敷 社地の右より農氏藤七との入居住す右近古ハ當社と奉祀の
左近屋敷 社地の左より今藤七ハ藤七ハ未裔カガリ今猶連綿として子孫繁昌せり

橘姫神廟 社地より二丁を東に當りて山の中腹にあり
相傳日本武尊東征の時此海上逆浪の災に逢りて頭弟橘姫の
御衣及び冠の具を流し寄たりて土中へ収めり今跡ありとのみ

大戸明神 橘明神の社より後へ二町ありて西の方北山の上ハ

あり蓮乘院兼帶す祭神大斗乃辨神を祀ると云 神世社代の中
意富斗能地神とヤチヤチ 神躰ハ一尺三四寸ありて男女の容貌
中々二軀あり 形ハ大斗乃辨神の神影なり 祭礼ハ隔年九月

九日修行せり

龍宿山最明寺 金剛院と号丸子街道の西小杉邑より新義の

真言宗中々江戸愛宕下の真福寺に属せり大日如来此木

最明寺

田園雜記

伊り

里

よ

東

まり

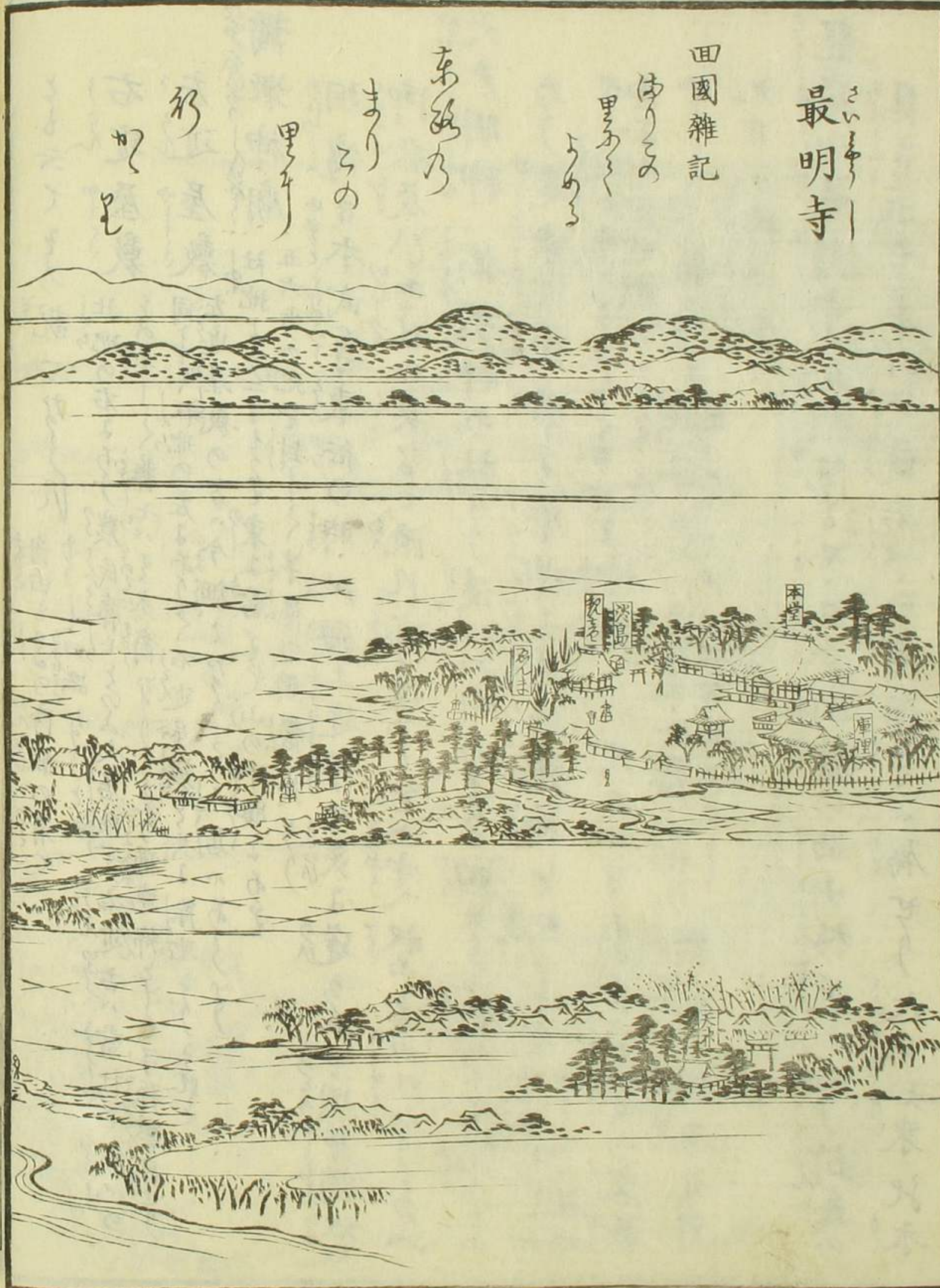
この

里

行

か

も



あ

や

と

あ

れ

あ

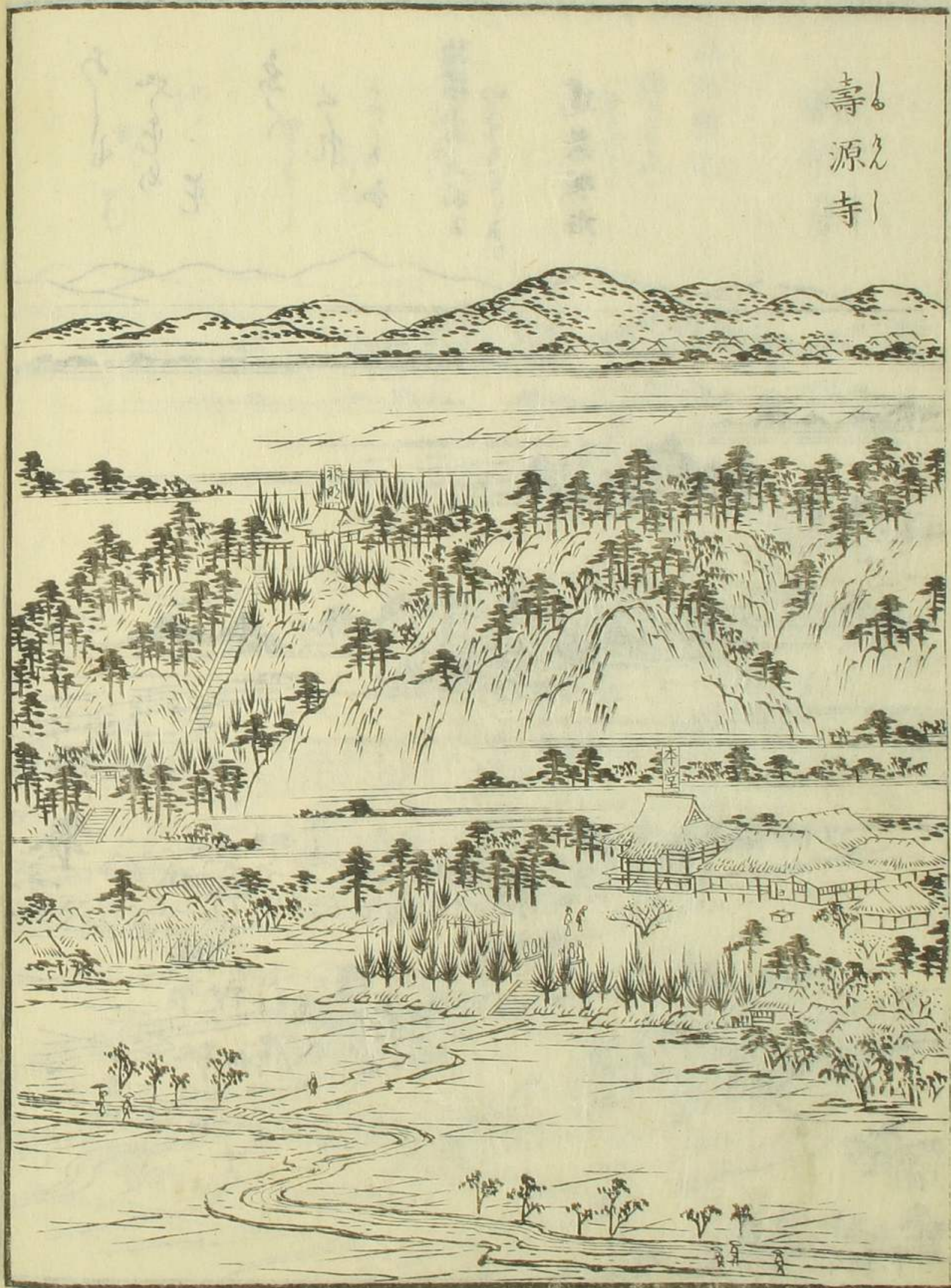
羽

り

道



壽源寺



像を本尊とす北條時頼公の創建なりと云傳へく堂宇に

三鱗の紋を附く元禄の頃洪水の災ありて

普照山壽源寺唯稱名院と号し南加瀬村岡の中腹あり浄

土宗なり四十六世念誓覚栄和尚今の堂宇と堂建く坐像

丈六の観音を安置せり當寺梁牌の銘は建武元年甲戌創

建中へ往古に加瀬山智恵光院新如来寺と号せしとたり

岡山八良山上人と稱す十一世良察上人の項寛正元年庚辰兵

火のあふふ亡ひしなりとあり

東鑑曰 兼久三年辛巳六月十四日宇治橋合戦手

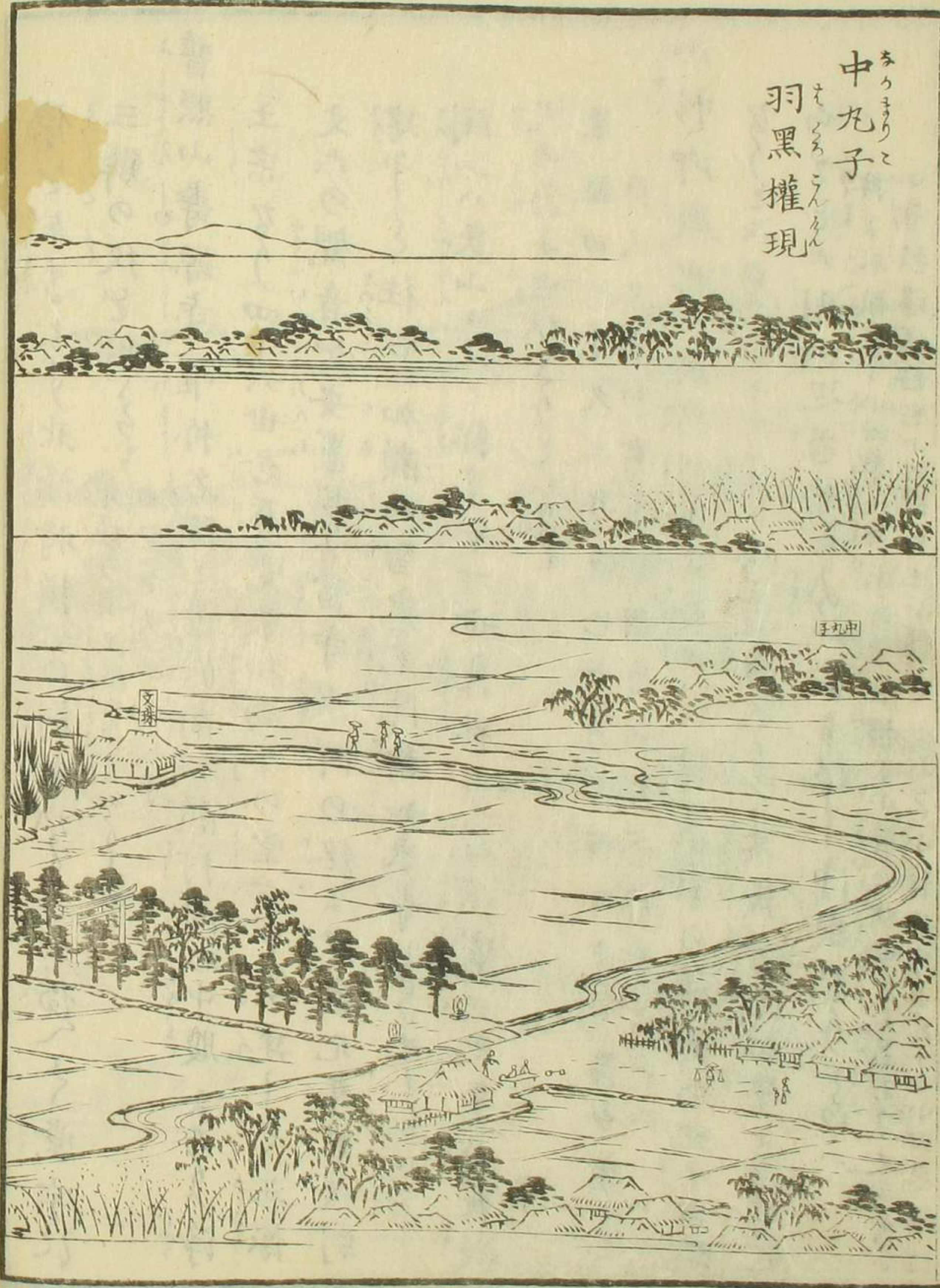
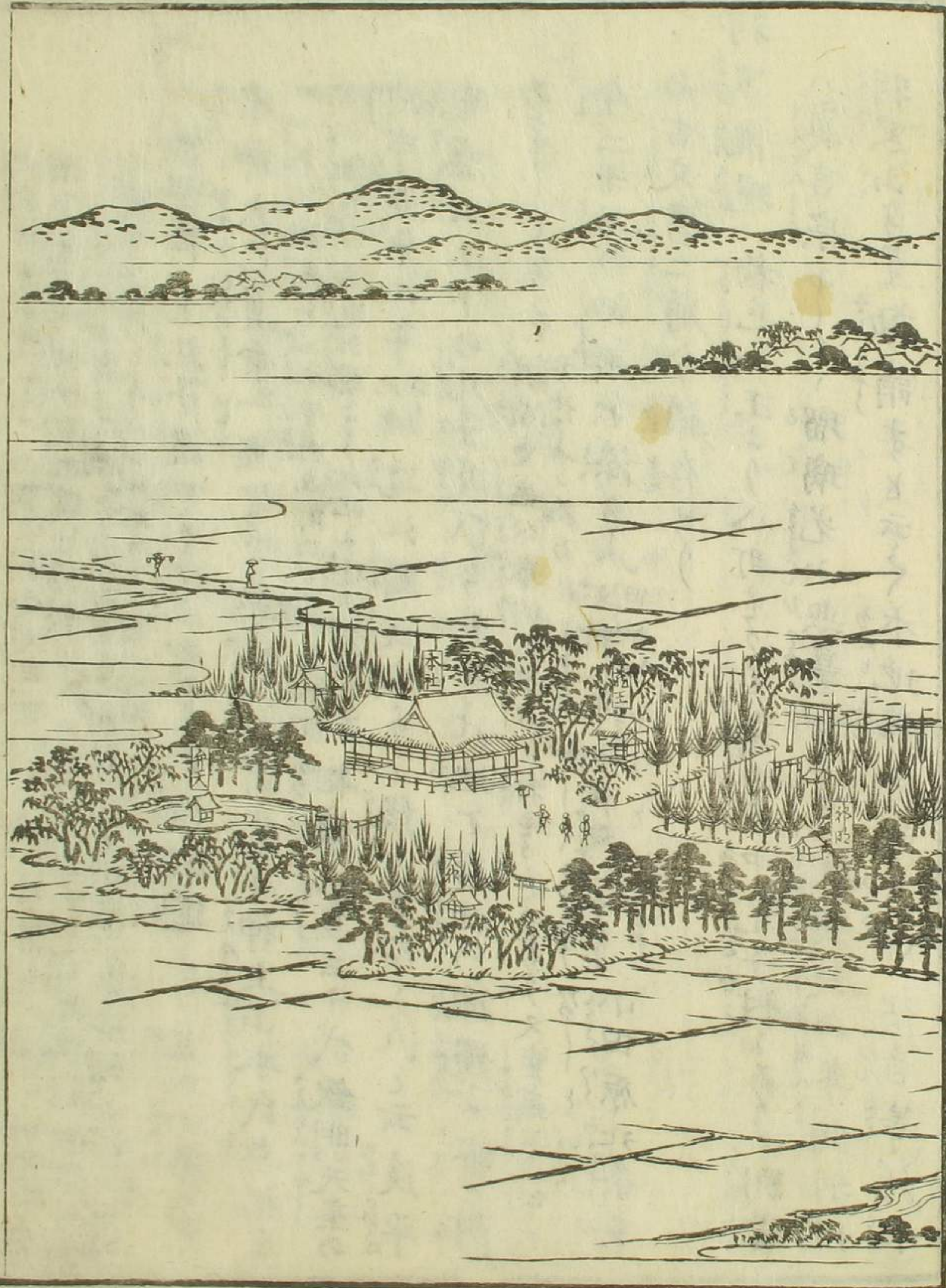
負入々中加世左近将監同弥次郎死了云云

小杉河殿地最明密寺の大門の傍農家の後園の地を旧跡

なりと云慶長十三年に河造営あり其後万治三年にたまた

ら云則此辺省耕のあふ殿なりとあり

按よ永禄二年小田原北条家の分限帳に小菅大炊助と云名あり又同書に小菅撰津守縮毛小田村の地を領すとあり小菅正字あり小田原記に



中丸子 なぐまりこ
羽黒権現 はぐろくわんげん
現 まへ

大永四年正月十三日上杉の家臣大田源六同源六郎謀反と起し小田原へ相
図を定め氏綱伊豆相模を引卒せしむ江戸の城に上杉修理大夫朝興居相
敵をすし居たりと云ふ此地のついで武略なきふ似たりと云ふ岳川小杉へお向
山王権現社 上丸子渡口より五町を南と西南道より左の小路あり

祭神大己貴命一座なりと祭礼ハ六月十四日神主山本氏奉祀也
此山本氏祖先を山本平内左衛門と稱せ住古 相傳人皇三十代欽明天皇の
當社勸請の頃近江國より此地へ遷り住むるなり
御宇庚申の年元年近江國坂本より移りまわると云ふ
重盛公上下の丸子及び今井等此地を當社の神領に寄附

あつととありと
其頃重盛公奉納の短刀と稱するものあり又重盛公の印と
今二十石の神領を添ふなり
の古文書二通今猶存せり
小田原北条家

羽黒権現 稻毛山王より八町を南の方中丸子村より 別當
ハ真言宗より 瑠璃光山無量寺と号相傳天正年間羽州
羽黒山より勸請すと云く本地佛弥陀某師觀音等此木

像を安置す行基大士の作なりと
追あを江戸に住より一十年久しく中風の病に侵され半身不遂中々竟る非人と
なりく此所彼所よまま歩行其頃當社を己の身甚憐れ早く難治せしむと
一日山伏一人來り告て曰く汝此社殿にあはれし其身甚憐れ早く難治せしむと
海と改むしとあり 病全快せしむとあり 玆海と号く同四年乙未正月十日當社の
地あり朝多神前へ香花神燈をたき生誕此神を報しむるなり
華表の額に羽黒大権現と書せしむる朝鮮國雪峯の筆と云
丸子渡口 相模街道より 其邑上中下に分れり
西より橋樹郡に属せり永祿二年北条家の分限上丸子の地千葉慶親領
とあり又下丸子は荏原郡に属し川より東より下丸子は布施善三といふ人
領するなり 同書より

東鑑曰
治承四年庚子十月十日以武藏國丸子庄賜葛西
三郎清重今夜御止宿彼宅清重令妻女備御膳但
不申其實為御給構自他所招青女之由言上云云

回國雜記
ゆりのこの里めくよめり
本路のまじり地里よりかきつりてを急ぐれば
道與
准后
羽林といふ所ありて云く

概々四國雜記よりこの里とあるふより東海道鞠子驛と混
々れとも此記行々々々丸子のよをとりあり此記行々々々
のり此浦をさきくありいとえさきくありこの里駒林は省
鎌倉より〜〜〜を記せるとして此記のまをとり〜

早稲田大学図書館

011688984906